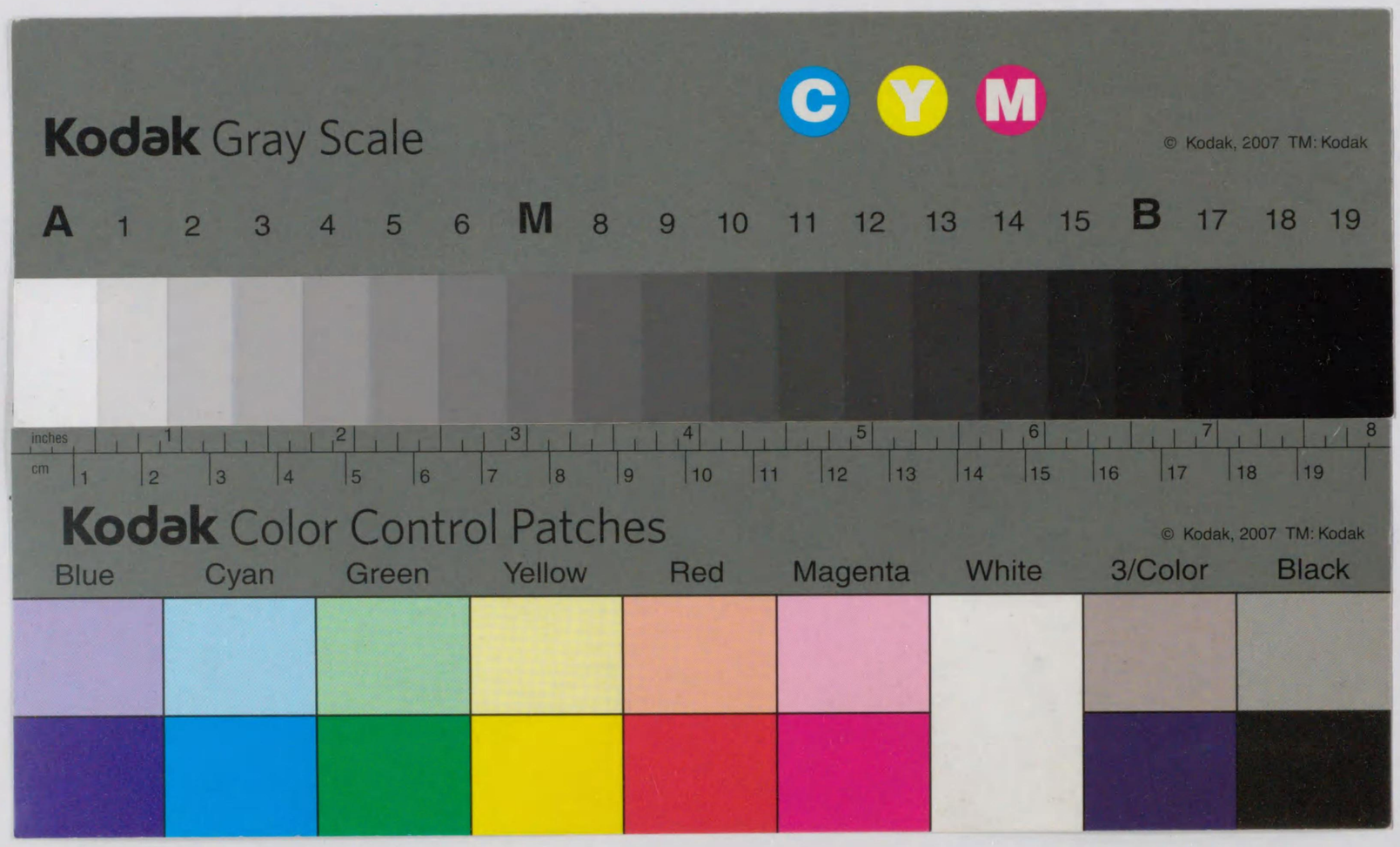


563
158
563-158
12005015131 20

26.10.15

211317
き

農學博士 横井時敬 著

# 小農と開墾の研究

東京 丸善株式會社

昭和二年三月 帝國圖書館藏

563-158

# 緒言

「小農に關する研究」は小農經營の根本義に及んだ、わが國が小農國である丈け、この「研究」はわが國農業の根本問題を對象とした、小農の存在は農村と蛇跗蝶翼相待つの關係に立つものとの結論に原づきて、この「研究」は進んで、わが農村存在の根本要義にまで立ち入つた、小農の經營が資本主義的營利主義に依らずして、反て非資本主義的勞作主義を以て、その基調とすといふの結論に原づきて、現代の經濟學が研究の對象とする所が、經濟社會の一端に偏して、その全豹に及ばざるの憾あるを指摘し、經濟學所用の術語の不備にまで論及した勞作經營の本義が自家勞力の完全利用にあるを說き、自家勞力に關する研究の餘波はマルクスの勞力論にまで及んだ。

かくてこの「研究」は經濟社會の大體觀に及び、經濟學の缺陷をも指摘するに至つたが、その本旨は現在の農業經濟學が大農經營の本義とする所の資本主義的營利經營を以てその指導原理となし、これを經營の主義を異にする所の小農經濟にまで宛て篏め、凡てを一律の下に論定したる、その缺陷を指摘するにあつて、小農經濟

に對する指導原理を研究し、農業經濟學の革新を企つるを主眼としたのである。

幸にして、或は不幸にして、この研究が學界の是認を得るに至らば、從來學者の小農經營に對せる教示は全然一變し、延いてわが國の農業政策の根本的革變を誘致せざるを保しない、學界は果して能く此の如き大膽なる研究の結論を是認するに至るであらうか、余の研究が果して根柢に於て誤謬なきを得るであらうか、余が小農經濟の爲めに攻め得たる指導原理が果して正鵠を得て居るであらうか。

思ふに多年認定せられたる指導原理を斥け、新たなる旗旆を樹てゝ學界に臨むこと、この「研究」の如きを發表するに當りては、一言一句、愼重に愼重を加へ、寸毫の誤なきを期しなければならぬ、とわれも人も勿論思ふのである、殊に術語の不備を憾とするの著者は尙更この主張を正當としなければならぬ、然るに著者の研究はその端緒を明治二十八年頃に發したとはいへ、筆を執つて現にこの著述に從事したのは、昨年末よりであつて、二月末には既に稿を脫し、その間僅に四ヶ月に過ぎなかつた、公私繁忙なる著者が此の如く性急に起稿し、充分の校訂をも經ずして、これが發表をなしたのは例の癖ではあるが、而かも故なくして徒になしたのではない、思ふに愼重を重ね、思を潛め、句を鍊るは一方より見れば、漫に幾度も稿を改むるに過ぎないで、これが爲め立論も字句の洗鍊も加良するには相違なきも、尙ほ遺漏も存すれば、訂正すべき點も發見せらるゝに相違ない、然らば急ぐも急がざるも、その間五十歩百歩の差に過ぎないとも考へられぬでない、是に於て斷然所謂拙速を貴んで、これを公表し、世の學究者に向つて、その意見を問ひ、然る後に徐に大成を期するが得策であらうと信じ、且つかゝる粗製濫造の著書も世の學究家に向つて研究上のヒントを與ふるには相當の價値なきにあらざるべしと考へた、余が敢てこの研究の性急なる發表をなしたる所以の眞意は實にこゝにあるのである。

余は更に白狀しなければならぬ、この著述の爲めに筆を執れる間、殆んど全然參考書を繙くことを避けた、此の如き獨創の意見を綴るに當つて、幾多の參考書を繙くときは、立論反て爲めに岐路に彷徨するが如きこともあるべく、又た彼も論じ、此も評し、容易に決着に至らざるの憂なきにあらざるべく、かくては一章一節の爲めに多大の頁數を費やし、何時脫稿に至るべきか、際限あるべからざるを恐れたのである、それのみでなく、現に脫稿の後に於てさへ、補足を加へた位で、印刷の校正をなす間にさへ、加除したきことが、後から後からと起つて來て、この念慮を排し去るには多大の耐忍力を要したのである、されば余はこの原稿の印刷中には出來る丈け

この問題に關する見聞を避けんと試みた程であつた、彼の子路が聽くことあらんことを恐れたといふ、論語の記事に想ひ到つて、獨り失笑を禁じ得なかつた。

その然るに拘はらず、尙ほ起稿中には新進學究者に意見を問ふことを以て、必要なる處置であると考へたので、農學士經濟學士我妻東策君と農學士近藤康男君とに若干の紙數の起稿を終れる毎に、これを示すことゝし、兩君の有益なる示敎を得たることが少からざりしが爲めに、この著の價値を加へたることはいふ迄もない、殊に近藤君の如きは多く參考の書目を加書し、批評の言をも惠まれた、この兩氏の厚意的助力には、この機會に多大の謝言を呈しなければならぬ。

事情此の如しであるが、而かも最後に差急き添加したる補足に向つて、更に多少の補足を加ふることは、如何にしても禁ずることが出來ぬ、余は土地使用の移動性が、わが國の如き小農には、極めて必要であると信じたが、更に考ふるに、わが借地借家法の如き、如何に土地使用の移動性を阻碍したのであるか、この事實は既に何人も疑はざる迄に明確となつた、現に借地を讓り受けんには、以前に倍蓰したる權利金を提供するを餘儀なくせられ、新たに借り入れんとするにも、地主に權利金を提供せざるべからざることゝなつたのは、この法發布以來の出來事である、土地使用の移動性が爲めに阻碍せられたといふのは、かゝる事實を指すのである、これのみでなく、借地人ある土地は獨りその價格が大に下落したのみでなく、これを賣らんとするも、容易に買手を得ず、隨つて擔保價格を失ひ去るに至つた程であり、公課を負擔せざる第二の所有者が出來たことは、佐藤寛次博士の所論の如く、社會的罪惡であらねばならぬ、宅地使用の移動性がかくまでに阻碍せられ、資力少き希望者の土地を得ることがそれ丈け妨げらるゝ、その弊たる頗る甚しいと見るべきである、而かもこれが耕地の上にあつたと假定するよりも、幾分その弊害が輕しといふことが出來やう。

宅地の貸借には即ちその使用の移動には、定まれる期節がない、賣買貸借共に、何時にても出來る、一年三ヶ月の遲速は餘り大なる問題とするに足らぬ場合が多い、急を要する人はそれ丈け價を多く出せば、大抵その目的を達することが出來やう、これに反して耕地は作附期節の關係上、貸借には必ず期節がある、期節外の貸借が全然ないでもないが、これは例外であつて、爲めに幾多の面倒と失費とを伴ふが常である、されば借地を讓らんと欲するもの、乃至これを引き受けんとするには、一般に定まれる期節が存するゆゑ、使用移動性の阻碍は、農業に於て特に甚しとなさね

ばならぬ。

この補足の補足は差向きの補足で、本文の補足は相當に價値ある研究との自信があり、獨逸に於て地方的に大問題となつて居る所の「農場屠殺」の如きも、この問題と共に更に研究の價値があらうとも想はるゝ故、再版の時來たらば必ず少くともこれ丈けは先づ一大改變を加へねばならぬとの豫定を有つて居る。

この著述に筆を執るに際し、屢々拙者「農村制度の改造」に想ひ至つた、前述の通りに參考書を繙かざるの主義を執つた故、この書さへも全然棄てゝ顧みなかつた、而かも記憶を辿つて、これに述べた所のわが國の農業及び農村並に地主等に關する問題は寧ろこの「研究」内に收めた方が、編述宜きに合ふたであらうとも考へらるゝ位である、問題たる農村制度の改造以外に、多く叙述が及んで、却て該著の價値を損したとさへ批評された位であるが、余はこの場合に於て、この著の姉妹篇として、讀者が該著を參考に資せんことを請はねばならぬ、但この兩著の間、意見に於て多少の衝突あるべきは勿論であらねばならぬ、この「研究」中該書出版後になりたるも少からざるが爲めである。

何れの緒言又た凡例にもいふことではあるが、別してこの著に就きては、何れの方面の學究者からも遠慮なき批評を希はなければならぬ、此の如き獨創的の研究に瑕疵の多かるべきは勿論であつて、著者自身に於てさへ、心に安んぜざる所が實以て少からないのである、余は問題が問題であつて、殊にわが國には當面に最も重大なる關係ある問題である故、學界の爲め、農政界の爲め、社會國家の爲め、學究者の默殺は斷じてこれを喜ばないのであつて、批評、論駁は著者を啓發して更に研究の歩を進め、以て速かにこの著の改訂をなすの機會を與へられんことを、敢て大方に請ふこと切なるものがある。

昭和二年五月

著者識

# 小農に關する研究

目次


第一章　小農の概念……一
附　商品生産と小農……一〇
第二章　利潤と小農經營……一三
第三章　土地と小農經營……一七
附　土地の價格……二七
第四章　資本と小農經營……三三
附　器械と小農……三八
第五章　自家勞力……四一
附　マルクスの勞力と自家勞力……五四
第六章　小農の經營主と世帶主……六二

第七章　小農經營の最小限度……六七
第八章　小農の組織……七四
第九章　集約・疎放……八七
第十章　生産費……一〇四
第一節　生産費の概念……一〇四
附　小農生産物の價値……一〇七
第二節　生産費の内容……一一五
一、生産手段に關する評價……一一五
二、勞力の評價……一二二
三、小作料の評價……一三二
四、利息の評價……一四〇
第十一章　純生産又は純收得……一四二
第十二章　小農と簿記……一四九



第十三章　農場……一五七
第一節　農場の意義……一五七
第二節　農場の類別……一五八
第三節　小農經營に於ける密居、疎居の得失……一六〇
第十四章　自作小農と小作小農……一六六
附　地主と農業經營……一七八
第十五章　共同經營……一八二
第十六章　大小農の優劣比較……一九〇
附　畑地と小農經營……二二〇
第十七章　小農の團體的活動……二二三
第十八章　小農と農村……二三一
第一節　概念……二三一

第二節　農村の組織……二三四
第三節　農村住民間相互の關係……二四〇
第四節　社交と經營との關係……二四五
第五節　農業經營と農村經營……二四七
第十九章　農業經濟學の體系……二五四
第一節　概念……二五四
第二節　農業經濟學の組織……二五九
附　經濟現象の推移と經濟學の進化……二七九
第二十章　小農に關する研究補足……二七九
土地使用の移動性……二七九
小農に關する研究　目次終

# 小農に關する研究

農學博士　横井時敬著

## 第一章　小農の概念

小農といへば、必ず大農を聯想せしむる、大小は實に比較の觀念であるからである、或は農、或は工、或は商、何れに於ても洋の東西を問はず、古來必ずこれに大小の區別を立てんと試みたのである、而してこの大小の觀念は、農業に於ては、その管理する所の土地の面積、これに投ずる資本、勞力の多少、人力、畜力、器械を用ふるの狀態、分量などが、多くはこれが區別の基準として採用せられたのであるが、而かもその中最も著しきもの一個を選んで、これが基準となすが常であつたのである、言を換へて云へば、大小の區別は當然に分量の概念に基を發したのである。

農業の大小を分つに、その基準として採用するに最も簡單にして、且つ明白なる

は各經營者が管理する所の土地の面積である、現に獨逸に於て統計が採用せる所は左の如くである。[1]

| | |
|---|---|
| 過小農 | 二ヘクタール以下 |
| 小農 | 二—五 |
| 中農 | 五—二〇 |
| 大農 | 二〇—一〇〇 |
| 大經營 | 一〇〇以上 |

此の如き區別的基準が局處的價値を有するに過ぎざることは、固より明かなれば、更に他の普遍的價値ある基準を採用せんと試みたものが、就中獨逸の農業經濟學者である。

これが基準を主として勞力關係に置かんと試みたのが、かのテーヤであつて、彼の農業原理の經濟編に於て經營を大中小の三部に分つた、[2]次いで經濟學者ロッセルは相均しき趣旨を有する基準の下に、やゝ異なつたる內容を有する分類を試みた、[3]其外、獨逸の農業經濟學者の分類に於ける大同小異で、就中クレマーの如きは更に細分を試みたのである。[4]

その分類の基準は分類上極めて表現的にして、認識し易き、勞力關係にこれを取つたのである、ロッセルの分類は以て標準をなすに足るものとなすことが出來やう、即ち經營者が專ら指揮監督の任に當るものを以て大とし、指揮監督と併せて多少の肉體的勞務に服するものを以て中とし、經營者並にその家族が專ら肉體的勞務に服して、その勞力を充分に利用し得べき程度の農場を經營するものを指して小となしたのである、この外、大の更に大なるものを領地農となし、小より以下の更に小なるを分地農となしたが、これはこの場合に必要なきが故に、姑くこれを省くことゝする。（拙著農業と農學參照横井全集第三卷二九五頁以下）

此の如く、最も表現的なる材料一個を擇んで分類の基準とすることは、極めて便利なる手段となすべきも、而かも植物學上林那（リンネ）が一個の機關を以て、分類の基準となしたるが如く、廣く世界の農業に通して、同一基準を應用して一種の分類となさんと試みなば、左支右吾の不都合を認むるに至ることがあらうと、豫想せらるゝのである、現に米國の農業の如き、固より大と認むべき經營に於てさへ、經營主自らその勞力を提供することが往々にして然りである、蓋し極めて簡單なる單一耕作的經營に於ては經營主が指揮監督のみにその全力を傾注すべき程の必要は、如何な

る大規模經營に於ても、殆んど考へられないのである。

併ながら余は此の如き分類が、單に仕事の分量に即して、ものゝ內容に觸るゝことなく、畢竟科學的分類の概念に於て、頗る遺憾の點あるを免れざるべく思ふのである、試みにこれ等大、中、小なる各階級の內容に就きて、よく細考熟視するときは、少くとも大及び中と小との間に、大なる性質の相違があつて、これ等を同一カテゴリー內に編入することの、極めて妥當を缺くの處理たるを發見するであらう、直截的に概論すれば大と中とは均しく資本主義的營利經營であつて、小が非營利主義的勞作經營……經營といふ語も或は不適當であるかも知れぬ……であるのと、全然其經營上の主義を異にし、同一カテゴリーの內に編入すべきものでないとなすことが出來る、果して然らばこれ等を同一カテゴリーに收めて、單なる分量を基準として、これが分類をなすことの、決して科學的價値あるものにあらざるを認めざるを得ないのである。

われ〳〵はこゝに於て營利經營と勞作經營の區別を一通り說明するの必要を認むる、この說明に就きては資本主義的經濟なるものを先づ以て研究するのが適當なる前提であるに相違ない。

われは今日の經濟社會を目して、資本主義的經濟社會と名づくる、經濟社會に於ての特徵が所謂「資本」が生產上に著大の作用をなすにあるからである、而かも資本の作用の著大であるといふことは、單に著大なる一作因を揭げて其特徵を示すに過ぎないのであつて、今日の經濟社會の全豹を說明するものではない。

今日の經濟社會は前時代の經濟社會と全然相異なつたる所がある、政治的社會組織が全然其趣を變へたのである、社會中の一階級が他の階級に對して絕對的支配權を有するの組織は革まつて、社會の成員には悉く自由が許され、何人も其意志にあらずして、無代價に他人に奉仕するの必要がなくなつた、即ち茲に所謂勞力に衣食する所の階級が起り、名づけて勞働者と呼ぶのであり、これに對して資本を利用して勞働者を働かしめて、所謂利潤を求むるを旨とする所の經營をなすものが生じて來た、是れが即ち企業家といふものである、一方に資本家なるもの、地主なるものも認められ、茲に資本主義的經濟社會が形づくられたのである。

資本を用ふることは、交換經濟が行はるゝこととなつたる以來、殊に貨幣が採用せらるゝこととなつたる以來、生產上常に行はるゝのであつた、大なる經營……この經營なる用語が容るさるるならば……に於ては、多くの奴隷又た隷屬が勞使せ

られ、支配人、監督者なども採用せられ、多少の器械や家畜なども使用せられ、生産費と名つけてよき生産手段の消費も少くなかつた、この事情に據つて考ふれば、今日の經濟社會が前時代の經濟社會と異なる所は、生産手段が實物より變化して貨幣となり、信用となり、これが資本と名づけらるゝことゝなつたのが、生産手段に於ける所の主なる相異である。

その實、今日の經濟社會の特徴は資本の運用によつて事業を經營企畫する所の企業家と名づくるものゝ起り來たれることであらねばならぬ、企業家の全力は資本の利用によつて、企業益又た利潤を獲得することに集中せらるゝ、凡ての機制も、勞力の使用も、自己の企畫、焦慮、周旋も、冒險も、詮する所は企業益又た利潤に向つて結晶的に集中するのである、この企業家の經營は故に名づけて營利經營と呼ぶものである、今日經濟社會は即ちこの營利經營の出現によつて特徴づけられ、營利經營の下にこの經濟社會は支配せらるるの觀があるのである。

資本主義的經濟といふは、これ資本が生産上に重要なる作用を有するの謂であると解釋せらるゝときは、營利經營が主たらざる所の資本主義的經濟社會も成立し得ざるにもあらずと見ることが出來やう、共産制度や組合制度が主として實行せらるゝの時代が萬一現出し來たとしたならば、かゝる時代の經濟社會は、營利經營を失へるも、尙ほ資本主義的經濟社會と名づけて可なるであらう、かく考ふるときは則ち今日の經濟社會は營利經營が特徴たる所の資本主義經濟時代に居るものとなすべきであらう。

かく營利經營が今日の經濟社會を支配するの狀ありとするも、而かも營利經營ならざる所の經營がこの經濟社會に生存し得ざるといふにも限らぬ、恰も人類が地球を支配するの觀ある位に、生物界の帝王たるに至りたる現時に於ても、他の凡百の生物はよく生存し、繁殖し、人類もそれによつて、よく生存し、繁榮するが如く、營利經營以外の經營もよく生存し、これによつて又た營利經營も亦たよく生存し、繁榮することが出來ると見ることが出來やう。（第十九章參照）

營利經營も非營利經營も、現代の經濟社會には同時に生存する、但非營利經營も資本主義的經濟社會裡に生存する以上、亦たその影響の下に立ちて、全然たる非資本主義の經營をなすことが出來ないのである。

農業經營に於ても、營利的範疇に屬するものと、非營利的範疇に屬するものとの二種類があり、獨逸學者の分類に於ける大中は前者に編すべく、その小は則ち疑も

なく非營利的範疇に隷すべきに相違ない、小經營はその經營の旨とする所、利潤の獲得にはあらぬ、その終歲孜々役々として、勞作する所、その自家勞力即ち自個及びその家族の勞力を利用して、出來る丈け多くの收入を獲得することに集中する、即ちこれを營利經營に對して勞作經營(特に勞力と言ふを避く)と名つくるが然るべしであらう。(第十九章參照)

既にいふた、營利經營は更にもいはず、非營利的勞作經營と雖とも、資本主義的經濟の影響の下に居るものであると、勞作經營の小農と雖とも、資本を全然用ひないではない、勞働者をも必ずしも使用しないとも限らぬ、されば小農經營の定義に於て、ロッセルが云へる如く、自家勞力を充分に利用し、敢て勞働者を用ふることがないと、定限するの必要がない、テーヤが定義せる小農經營か一二の勞働者と共に、筋肉的勞働をなすとせるとは異なりたる意義に於て、われは小農經營を定義するに於て、專ら自家勞力の使用によつて收入をなすを旨とするものが、多少の勞働者を勞使するとするも、敢てこの概念に矛盾を來たすの虞ないとするのである。

(1) Berufs-und Betriebszählung von 1882, 1895 und 1907 の際に Deutsche Reichsstatistik にとれるもの。なほ Grünberg, Agrarverfassung (G. d. S. VII. S.S. 136 —— 140) 參照

(2) A. Thaer, Grundsätze der rationellen Landwirtschaft. Berlin, 1880, s. 136, s. 141.

(3) Roscher, System d. Volkswirtschaft Bd. 2. S, 209 - 10.

(4) Goltz, Handb. d. Gesamten Landwirtschaft Bd. 1. S. 193 - 5.

(5) 横井博士によつて我國農業經濟學界に投ぜられた一つの石、小農の問題、の中樞をなす部分は本章及び第二章にある。その要旨は、大農と小農とは單に經營規模の大小なる技術的數量の差でなくて、むしろ質の差である、經營原理に於ける差である、大農は營利主義的で資本の利潤を目標とするに反して、小農は然らず、故に小農は大農とは別個の見地よりして研究さるべきものなり、といふにある。

この問題は從來我國に於て不當に等閑に附せられてゐたものである。何故なれば「營利經營も非營利經營も、現代の經濟社會には生存する」からである。博士の警鐘は非營利農の我國に於ける存在を强く告げるものである。

たゞ具體的な一つの農業經營が營利農業であるか、非營利農業であるか、又その兩面を有するのであるならばどの點までが營利的でどの點までが非營利的であるか、を言ふことは困難である。けれども概念としてこれを分けることが可能である。又それが當然である。だから私は博士の「但非營利經營も資本主義的經營社會裡に生存する以上、亦たその影響の下に立ちて、全然非資本主義の經營をなすことが出來ないのである」なる但書は具體的な經營は二つの原理に從ふことがある、といふ意味に解す。何故なら、元來全く非營利主義的な經營も「資本主義の影響」の下にある形態を示すならば、それはその限りに

於て資本主義的であると言はねばならないからである。兩者の差は質にあつて量にない、吾々は現象によつて誤らせられてはならない、博士の大小農の區別は概念上の區別である。（近藤）

# 第一章　小農の概念

## 附　商品生産と小農

小農の經營はやゝ自然的經濟に近い、これがその特色である、その勞力の大なる部分が使用價値の製出に向けられ、或は自足經濟に近きものと見做さるゝ程であるが、而かも現代の經濟社會に於て、全然商品生産をなさずして濟むべき謂はない、若し全然この生産をなさざるものありとしなば、そは所謂分地經營で、農業を以て副業となす程度の經營でなければならぬ。

されば小農と雖とも、必ず多少の商品生産をなすものとしなければならぬ、商品生産の生産全體に對する歩合は經營規模の大小、その採る所の作物の種類、組織の異同などによつて、大なる差異あること勿論である、商品生産が主なる經營の目的であつて、副生産的に自用の食糧品などを産出するも往々ある、これに反して自用の食糧品産出が經營の主要部をなし、商品はその一部に過ぎざるもあれば、その以外、別に商品産出を事とするものもある。

小農經營の内容は千差萬別、一律を以て規すべきでない、所詮は商品生産の生産全體に對する割合は、場合により大差あるものであり、殊に新開地の如きに於ては、全然自用品の生産をなさず、商品生産を以て、經營の全部となすこと、恰も都會に於ける手工業者とその揆を一にするものさへ、往々これを見るのである、[1]都會附近の園藝の如き、全然これと相均しきもあれば、比較的に少量の自用品生産をなすものも少からぬ。

かくの如く商品生産を以て主要となし、非商品の生産は僅少の分量に過ぎざるか、若しくはそが皆無である場合は、その經營の内容、その性質共に資本主義經濟と見るべきであるとなさねばならず、而してその經營が主として自家勞力を價値づくることにあり、經營の主要目的が勞力收得に結晶するものとなして可なる場合の如きは資本主義的營利經營と、非資本主義的勞作經營との中間にありて、これを資本主義的勞作經營と名附づけて不可ないであらう、而してこれが大と小との間に居る所の中經營と見ることの至當であるかも知れぬ。

所詮は經營の內容を吟味するときは、農業の分類も、左程簡單に規畫すべきにあらざるを知らねばならぬ。

(1)　歐洲大戰中わが北海道に於ける青豌豆の栽培の消長は興味あるものである。

# 第二章　利潤と小農經營

利潤の何物たるか、これが根本的概念を精考することは、本著の範圍內にはあらぬ、余はたゞ利潤は營利經營者の特に享受する所の生產の部分であるといふを以て滿足するのである、既に營利經營者の特に享受する所の生產の部分であるといへば、是れ資本主義的經濟時代に於て、生產に從事する關係者に現代的分化が行はれたるより、この名を附するに該當する所の生產の分配が生じ來たれるものとなすべきである。

經濟學原論に於て、實に生產は地代、利息、賃銀、利潤又た企業益に分たるゝ者となされて居る、地主、資本家、勞働者、經營者又た企業家、此の如き各種の生產關係者が分化し出でたる結果が、即ち經濟學者をして學究の便宜上是等の名稱を各分配に向つて與へしめたのである、敢て學者が與へたといふのでなく、其實世俗の言葉に既に是等の名稱があつたのを學者が採用して、學語となしたるに外ならぬのである。

即ち是れ經濟上に於ける分化の結果、かゝる學語が認めらるゝことゝなつたのである、而かも此の如き分化が經營の凡ての方面に、起り來つたのでは確かにない、

彼の家内工業と名づくる小工藝に於てを見よ、何處に賃銀があるであらう、何處に認むべき利潤があるであらう、地代や利息は認むることが出來やう、而かも賃銀と利潤とは全然認むることが出來ないではあるまいか、小農に於ても、これと相均しき業態にあるのである。

成る程小工藝家、小農家の勞力の運用によつて得る所の成果即ち收得には利潤と勞賃とが含まれて居るものとして、これが計算をなすことが出來ないではない、恰も下等の動物に於けるが如く、諸機關に腸胃に該當する部分が認められ、肺に均しき機能を營む機關が存する、而かも是れ胃腸ではなく、肺ではない、これに腸胃の名を附し、肺の稱を與へたならば、不適當なる命名でなければならぬ。

小農が全然勞働者を使用せざる場合を考へよ、その勞力の收得は當然賃銀と名附くべきものではなからう、賃銀は雇傭關係に原づき經營上の成果の勘定が未だ終らざる以前に、傭主が勞働者に支拂ふ所の報酬であるからである、賃銀ならば評價を待たずして知られたる既定の價額である、小農の勞働收得は評定を待つて始めて知ることが出來る、その實若干迄は隨意に評價することの出來るものである、經營の勘定をなす場合に於て、若し安低に勞力の收得を評價しなば、多少の剩餘を認めて、これを利潤と名附くることが出來ないでもなからうが、これに反して勞力を高く評價しなば、何等利潤と名附くべき剩餘が生じない、然らばこの場合に於ては、利潤と名附くべき貨幣價値は評價上隨意に有無あらしむべきであつて、現にその物が當然認めらるべきものでないことは審である、翻つて企業家が勞力を悉皆雇傭勞働者に仰ぐ場合、又た土地も資本も自個の所有にあらざる場合に於て、勞賃、地代、利子を支拂ふて尙ほ若干の剩餘がその經營上の勘定に發見せられたりとせば、此の部分は確かに利潤と名附けて然るべきものであらねばならぬ、此の如き部分が即ち利潤なのである、この意味に於ける利潤は如上小農經營の收得には發見し得られないに相違ない。

借如ひ計算によつて、小農の勞力の成果より利潤と勞働收得とを分解算出せんと試みるも、賃銀額も、利潤額も孰れも$x$である、不明因子である、不確定の數量である、一個の確定したる數量……その實利息も地代も、時に不確定なる場合さへないでない、隨つて勞働收得と利潤とを含むものと認むべき數量が確定し居るものとなすことが出來ないかも知れぬ……この確定せる數量を形づくる所の二個の數が孰れも$x$である以上、之を確定せる二個の部分即ち勞働收得に該當する部分と

利潤に該當する部分とを、評定し得べき道理がない、往々行はれる如く、獨斷的に一方の部分を若干と假定し、この假定に原づきて、他の部分を算定するより外はない、かゝる計算によれば、往々にして兩者孰れかの部分に、或は不相當に高く、若くは不相當に低きを發見することが、極めてあり得べきことで、現に我國の小農の如きに於ては、勞働收得に該當する部分を假定するときは、利潤がなく、利潤を假定すれば、勞働收得が不相當に低廉なることゝなる場合が多いやうである。

その實、小農經營は營利經營でない、この經營には資本を用ひないではない、而かも資本は勞作の能率を進め、其成果を加ふるが爲めに用ふる補助手段と見做して居る、その努力は資本の使用に集中して居ない、資本の使用を利潤の獲得に向つて集中せしむるのでない、其努力は勞働收得に向つて集中せらるゝ、所謂勞力的集約が營利經營に於けると比較にならざる程に進むのである、要するに小農經營は勞作經營である、その生產に向つて利潤なる分子を認むべきでない、利潤は營利企業の特徵であつて、非營利經營に見るべきものでない。

(1) 帝國農會、米生產費調査資料(大正十五年)に於ては家族の勞賃は「男子の一人前の勞働をなすものゝ能率を標準とし、及辨當持參として、各府縣に於ける雇勞働賃銀を參酌して見積」る。(三〇頁)

# 第三章　土地と小農經營

土地を以て資本となすべきや否や、是れには從來學者中に贊成もあれば、反對もある、一派の學者は土地を以て自然物であるとする、これを自然物とすることによつて、地代に關する學說も多く生れて居るのである、勿論土地は自然物であると、他の凡ての物質と何等異なつたことはない、而かも人工が加はつて始めて經濟財として取扱はるゝに至ること、亦た他の物質財と何等異なつたる所がない、今日經濟學者が財として取扱ふ所のものは物質なるが常である、而かも物質は勿論自然物である、少くとも自然力の下に出來たものである、人間は「草の一葉だも創造することが出來ぬ」といはるる通り、人間は財の生產に際してたゞ自然力を贊くるの外はない、而かも人間の力によらざれば、經濟學に所謂生產は出來ないのである、土地と雖ども、此範疇外に出づることが出來べくもない。

自然の土地は自然物を生ずるの外に出でない、自然物の採收は多く自然の土地上にて行はるゝ、而かも農業上の土地は人間の力によつて、即ち農產物の生產をなすのである、人間の力によらざれば農產物は生產せられない、而してその生產には

土地に向つて人間の操作が加はる、土地は之れが爲めにその形質の上に多少の變更を受くる、人智が漸くに進んで、この形質の變更は無意識的より意識的操作に移つて來る、無意識的操作も年を積むことによつて漸くに變更が增大し來たるものであるが、意識的操作に移つるに及んで、人工の極印が著大を加ふるのである、排水、灌漑の施設ある土地と然らざる土地とを比較し見なば、以上の說明は何人にも、よく諒解せらるべきを疑はない。(1)

實に文明國に現に見る所の耕地の如き、既にして多くの改良が加へられ、即ち人工が施されて、自然の土地とは雲泥の差を示し、即ち多く生產手段が加へられ、其形質に大なる變化が實現して、疑もなき人造物となつたのである、若し自然物であるゆゑ、土地が資本たり得ざるものとの論據が認めらるゝとしなば、土地が既に自然物の形質を脫して人造物となり、加へられたる勞力と資本の效果が不可分となり居る所の土地は、それが生產用に供せらるゝ財たる以上、資本主義的經濟社會に於て、これが當然資本とし認めらるべきは勿論の事であるとなされねばならぬ、私經濟に於てのみ然りでなく、公經濟に於ても然りでなければならぬ。

土地の所有者に對する分配はこれを地代又た小作料といひ、資本の所有者に對する分配はこれを利息といひ、土地と資本とは同一範疇內に居るものにあらざるかの如くに說かるゝ、而かも是れ非科學的の俗解であるといつても不可はない、通俗に於て此の如き區別が立てられ居るが故に學者も亦たこれに從ふて居ると見ることが出來、又た土地を何處までも、自然物であるといふより、別に地代を認め居るものとも考へられぬでない。

家屋に對しては家賃の名があり、器械の類には、借料或は代料の名がある、土地の借料に向つて地代又た小作料の名があること、敢て怪むには足らない、而かも金の借料たる利息と、範疇的概念に於て何處に相違があるべきであらう、土地に就きて自然物の借料とこれに加はりたる資本の借料とを區別し考ふるとすれば、家賃に就きても、其材料は自然物である、器械も同樣であるゆゑ、これ等すべてに向つて、土地同樣の區別が必要とならざるを得ない、抑も不可分なる兩者の結合に成る所の土地である、自然物と勞力と資本とが合關的に結合して始めて產出せられたる土地である、これに向つて區別的に兩者の借料を考ふることは、不合理であるといはねばならぬ、これを合理であるとすれば、凡ての財に就きて材料賃と所謂手間代とを分けて考ふるの必要が生じて來る、かくては財に關する價格の概念に革命を來

たさなければならないことゝならう(2)

資本主義的經濟社會に於ては、凡てを經濟眼を以て見れば、貨幣價値である、否、あらねばならぬ、土地も建物も器具も器械も、貨幣價値である、簿記計算の上に於ては、品物の名稱は縱し掲げ出されて居るも、そは形容詞であり、冠詞であると見られ、計算の材料は悉く數字である、數字は貨幣そのものゝ數量にあらざれば貨幣價値化せられたる品物の數量に外ならぬ、貨幣價値なき品物は計算に加はゝるべき資格を當然有しないのである。

資本主義的經濟社會に於ける經濟人としての地主が其土地に對する觀念は、土地その物ではない、財産としてはその貨幣價値である、資本としてはその貨料たる貨幣價値を産み出す所の力である、貨幣價値を以て評定せらるゝ收入の元本である、故に土地の貨幣價値は資本化せられたる價格である、經濟人ならざる分子が地主の胸中に存すとせば、これ單に土地に對してのみ然るでなく、そのこれあるが爲めに土地が資本たるに妨なく、それが貨幣價値の代物であるといふに差支はない(3)。

資本は種類によつて、その性質に大小の差がある、其差の最も著しきは土地である、土地資本に特有の性質がある、これには何人も異存のあるべきでない、而かも特異の性質があるといふの故を以て、資本主義的經濟社會に於て特種部落扱さるべき謂はれはない、彼は他の財と同樣、貨幣化するの力を有つて居る、貨幣と交換し貨幣を通じて他のあらゆる財と交換することが出來る、それが一旦貨幣化する場合には、その貨幣には土地もなく、器物もない、資本主義的營利經濟社會に於ては凡てが貨幣價値である、貨幣それ自身も貨幣でなく、貨幣價値である、器物も、土地も貨幣の變化せる一時的形體であると見なば、見らるべきものである。

以上の說明は頗る簡單で、且つ明瞭である、多くの異存が挿まれ得べきでない、而かも尙ほ且つ異存が少からぬのは、資本主義的經濟に關する研究に、時々、又た場合々々に技術家的重農派的思想が執拗にも、多く附き纏つて離れざるが故でなければならぬ、實に貨幣價値といふ概念は資本主義的經濟社會の概念であつて、この概念が即ち經濟社會に革命を來たしたといふてもよい、貨幣價値を離れて、この經濟社會には何物もなく、貨幣價値の概念を除きて今日の經濟學は成立しないのである、この概念に於て當然土地も亦た貨幣價値たること、他の財と同一でなければならず、貨幣價値を以て評價せられたる資本として、農業上の土地は他の資本と同一範疇内になければならぬ。

この資本主義的經濟社會の一隅に割據して、非營利的なる小農經營がある、如何に割據するといふも、交通をこれと遮斷して、全然その影響を蒙むらずに、その經營をなすことは勿論出來ぬ、その所有する所の土地は公なる計算に於ては到底貨幣價値ならざるを得ない、賣る時も買ふ時も、又た財產としての公なる評價に對しても、貨幣價値以外に之を措くことは出來ぬ、而かもその特種なる經濟眼よりすれば、これ自然的では勿論ないが、而かも尋常の貨幣價値ではない、かれは技術眼を以てこれを認定する、かれは重農派の思想に近き思想を以てこれと相對する、土地がかれの手裡にある間は、貨幣價値ではない、その仕事場たる一種の品物である、資本を運用すべき一種の器械ではない、否、その資本ではない、少くとも直に利潤や利息を產み出すべき資本ではない、これを購ふの機會に於て、かれがこれを評價するの基準は、これが資本化ではない、その勞作を價値づけるが爲めの手段と見る、資本化に原づきての評價に比して、多くの場合に於て、遙かに高き貨幣價値を認識する、貨幣價値を以て凡てを律せんとする現代の經濟眼を以てしなば、これは異樣に色彩せらるゝであらうが、而かも非營利經濟の範疇內に居る所の小農經濟をよく諒解するときは、この疑問は直に氷解せらるべきものであらう。(1)

勞作に價値づくるを以て目的とする所の小農經營者は、土地が自己の所有にあるときは、これが經營上に於て幾多の利便を得る、小作地の場合に見る所の幾多の制限がない、かれは經營上に大なる自由を有する、この經營上の自由は幾何の貨幣價値を有するであらうか、この價値も却々に大きい、而かもこれに劣らざるか、若くは更にこれより大なる價値ある要素が他に一つ認めらるゝ、アルソー、ヤングは「所有權なる魔術は砂子を黃金化する」と叫んだ、自作小農の手にある土地は荒漠たる沙漠も黃金の寶庫と變し、一介の草だも生じ得ざりし礫磧も、その努力によつて、豐沃なる園圃化するに至る、これが即ち所有權なる魔術の不測の力である、小作農が土地を自己の所有に收めんとするときは、その胸中、必ずや此の如き自信がある、土地を以て單に一個の資本と見做し、この資本より生ずる小作料なる利息の元本と見做し、この元本を資本化するの觀念を有する所の一般地主とは全然選を異にするのである。

生產より利潤を控除し、殘餘を以て小作料と見做すが如きは、自作小農の認識內には全然有り得ない、彼の收入は勞作の成果である、この成果を貨幣價値として評定するも、その中に利潤なるものが見當らない、資本運用の成果を利潤であると見

るときは、勞作の成果はこれを同樣に利潤と認むることは出來ぬ、然り、而るが故に自作小農は小作料として、利潤を控除せる剩餘價値なるものを算出すべきでない、隨つてその土地の價格を評定するに、この剩餘價値の資本化に由るべきでない。

獨り我が國のみでない、小農經營の行はるゝ所、小作料は所謂習慣によつて定まるが常であるとせられて居る、この種小作料の構成に關しては章を改めて、論及することゝしようが、一般に農地の價格は收入の泉源たる資本であるとし評定せられ、これが資本化を計算の基準となすのである、而かもこの資本化の要素として假定する所の利廻率は普通利率と頗る徑庭の差があつて、我が國の場合の如き、普通利率より遙かに低いのが常である、これを强ちに資本家の土地に對する一種の嗜好に原づきて然るとのみは云はれぬ、自作小農の多い地方に於ては、その土地に投ずることの出來る資力が大なる關係を有し、その資力豐で土地の價格が高く、採算上地主が多く資本を土地に投下するを敢てしない地方もある、小農が土地を購はんと欲する場合には、その資力豐かなれば、相當に高價なる價格を以てしても、尙ほ土地を購ふことを敢てするのである、その自家勞力を巧みに利用することによつて、相當に大なる生産をなし得るときは、この高き價格も敢て意とするに足らざると、前述の如しである、固より利潤の資本化もなければ、甚しきは小作料の資本化にさへ重きを措くことがないのである、彼等が土地に對する愛著は往々にして、利害得失をさへ、超越することがある。

土地に對する愛著心は見方によつては、金に對する愛著心と同樣であつて、理性を超越するに至るのである、相當に豐かなる生活をなす以上の財産、到底自己の生涯には勿論、數代の後に至るまで、尋常にては消費し得ざる程の財産、それさへ尙ほこれが增殖を計るに汲々たるのが、豪富の徒である、地主も將來自己の耕作し得ざる丈けの土地を所有し、その上に幾何にても土地を購はんと欲したのであつた、今日は時勢が變はつて來た、今やそれを有價證券化し、乃至は商工業の方に向つての資本とし投下せんと欲するの傾向が著しくなつて來た、これが農業に對して人心の漸く背き去らんとするの傾向の現實化であるとも見らるゝのである、小農の土地に對する愛著心、これが若し消滅して、その資力が有價證券化し、商工業資本化することゝもならば、農業の前途は悲觀の域に進む、ものとなさねばならぬ、土地に對する利率、小作料の資本化より割り出だされたる利率、これが普通利率より低く、隨つて土地の價格が資本主義經濟に於ける合理的相場以上に高きは、この純にして、

且つ喜ぶべき愛著心の然らしむる所であると見ることが出來る、土地の相場の比較的に高價なるは、一方小農が土地を購ふには不便なるに相違なきも、一方小農の貯蓄心を誘致するの效果がないでもなく、所詮は農業が尙ほ頗る健全なる狀態に居るの證となすに足る場合が往々にして然りである、但英國に於けるが如く、地主の土地慾が土地の過當にし高價なる原因の主なるもので、爲めに自作農の成立を全然不能ならしむるの感ある場合は、以上の理論と多少の不一致を免るゝことが出來ないのであらう。

(1) 土地が人造物化するに至れる作因を、かの直接にこれに投じたる所謂勞力と資本とのみと考ふるは、勿論淺薄なる思想であらねばならぬ、その地に勞力と資本とを投ずることを敢てせしむべき狀態を誘致したる、各種の作因も決して輕視してはならぬ、この他に治安の維持、敵の侵入に對する防禦、交通便の開發など、數ふるに暇がない。

(2) クラアクの資本及資本財の概念參考 Clark: Distribution of Wealth, Chap. IX, X 高田保馬、經濟學研究第一篇第三章クラアクの資本觀參照。

(3) 日本勸業銀行調査課、田畑賣買價格及賃貸料調。

(4) 前掲日本勸業銀行調査の地方別府縣別諸表參考。司法省登記統計年表參考。農業經濟研究第一卷、小農に關する研究の一斑。

# 第三章　土地と小農經營

## 附　土地の價格

わが國の農地の價格はもしこれが有價證券同樣の收益評價法によつて評定するものとしなば、收入率が餘り低く過ぎ、隨つてその價格が高か過ぎるといふ、主張が當然成り立たないのでない、國庫債券の如き、極めて安全なる投資の目的物と雖ども、尙ほ利廻率が六分强にも當る、然るを農地は三分か四分の利廻率を以て滿足せられて居る、これがこの種の主張の起る所以でなければならぬ。

單に農地を以て有價證券同樣、投資の目的物であつて、收入の泉源に止まるものとしたならば、三分か四分の利廻を以てこれが所有者が滿足することの如何にも、その當を得ざるを想はねばならぬ、併し均しく投資の目的物であつても、單に利廻率のみによつて、それの價格が定まるものにも限らぬ、同樣の安全さを有する證券が必しも同樣の價格を同一時代に有つにも限らぬ、日本郵船株が比較的に高價なるが如き、その一例とすることが出來やう。

均しく農地なりといふも、供給需要の關係より、地方によりて利廻率に大なる相

違がある、山口縣大島郡地方に於ては、出稼によつて富をなせる連中が、競ふてこれに投資するが故に、土地の價格大に騰貴し、利廻率は一分以下と注せられて居り、播州の某村に於ては、農業家が競ふて土地を購入しその價の當否を問はないが故に、利廻率の關係上、土地を以て單に投資の目的物とする所の同村の地主等は自村に於ては一反の土地をも購ふを敢てしない、此の如きは明治二十八年頃に、われわれが調査したる所で、該村の農業家の主張として、元來農地を所有するは、耕作の目的を以てすべきものであり、投資の目的を以て購ふ地主輩の手には斷じてこれを渡してはならぬといふ、これが此の如き現象を來たした所以であるやうである。

從來の經驗によれば、地方に富の集積するに從つて、土地の價格が漸くに騰貴するが常である、恰も英國に於て農地の價格がその富の集積の結果として、それの利廻率が所謂低く過ぎる程に、農業の衰頽せる今日尚ほ土地が高價を維持するのと、同一般視することが出來やう、土地慾か高きゆゑ、利廻率が爲めに低下するのであつて、國民の心理狀態が即ちこれを然らしむるものと見なければならぬ。

論者が往々此の如き相場を以て、骨董的であるとなし、不當であると認むるは、自己の主觀的立場を標準として、客觀的價格を非難するものと認めなければならぬ、即ち此の如き主張は非科學的であると、われ〳〵は信じなければならぬ、凡そ物の相場は社會意識の認定に原づき、絶對的のものであり、容易に善惡、當不當を以て、これに對すべきでない、縱ひこれが骨董的相場であるとしても、何故にそれが不當であるか、高價に骨董を購ふはこれを好まざるものより見たならば、馬鹿氣たものとなすであらう、併し骨董を愛するのが何故に惡いであらうか、米國のカーワー博士の如き、米國の富を以てして、道樂の爲めに一ヒリピン群島に多少の資財を投ずるも不可なりとすべき道理がないと論じて居る、骨董に巨資を投ずるも、土地を高價に購ふも、歸する所は相均しき心理狀態に出づるものと見るべく、これに可不可を論ずべき限りで勿論ない。

併ながらこれ等の場合に特に善惡當不當の議論が起るとすれば、その議論に何等かのその善惡當不當を決定すべき基調がなくてはならぬ、農政學者がこれを不當であるとしなば、そは農業上に不利を致すの虞ありとなすが爲めであらう、何が故にそがしかく不利益なのであらうか、小農がこれを購ふに支障ありとなすのが主なる原因であらう。

土地が廉價であつたならば、成程小農にはこれを購ふに都合がよからう、而かも

われわれは討ねゝばならぬ、土地は何が故に高價であるか、何が故に廉價であるか、その原因次第では廉價なるが必しも喜ぶに足りないに相違ない、土地が若し何の價値もなく、隨つて需要が少く、隨つて廉價であるとするの事情にあらば、この場合の廉價は最も哀むべき事情の下にあらねばならぬ、縱ひそれが極めて高價であつても、農業に前途の望が多く、農業者が競ふてこれを購ふが爲めに然るであつたならば、この場合の高價は極めて慶賀すべき農村の事情に原づくものとして、これを欣ばねばならぬ。

農業家が競ふて土地を購ふことが、必しも農業の前途に望を囑するが爲めにも限らぬ、假令ひそれが單純なる土地慾の爲めに然るものとするも、この土地慾は自作農成立の原因であるゆゑ、これは抑壓すべきでなく、反て奬勵しなければならぬものであらう、この土地慾の盛なるが爲めに、土地の價が騰貴するも、此の如きは已むを得ざる現象で、これを不當となすべき道理がなく、不利益が縱ひこれに伴ふて起るとするも、一利一害は數の免れざる所であるとすれば、些の不利益の伴ふの虞あるが爲めに、大なる利益を逸すべきでない。

土地慾は自作農成立の原因たるのみでなく、農業家の勤勉節儉を刺戟するの一大原因たるを失はない、かの佛國フランダーの小農が如何にも勤勉にして節儉であり、而してその勤勉であり、節儉である所以の目標はその結果によりて土地を購ふにある、即ちこの地方の小農の土地慾がその地方に於ける農業の繁榮と富の集積とを助くるの媒たるを知るとき、土地慾が縱ひ土地の價格の騰貴を介くるも、敢て惡むべきにあらざるを諒とすべきであらう。

土地慾は獨り己れ一代の爲めにのみ出づるものでない、子孫の爲めの遺産として、土地を貴ぶことかある、即ち自作するか爲めの土地慾でなく、自己は固より、子孫も地主となつて、自己の直接勞作に衣食するを免れんとの意に出づるも、これを決して非難すべきでない、かの恩給の爲めに、養老保險の爲めに、多少の犧牲を壯年時代に拂ふことあると同樣、敢て非難すべき道理はなく、反て欣ばなければならぬ、それが小にしては自己の負擔に於て、不時の窮厄を免れ、老後の善處に資し、子孫の繁榮を介け、大にしては社會の富の集積增殖に寄與する所以であると認めなければならぬ。

都會の富の集積は多く流通資本の形に於てし、その集積は殆んど際限を知らない、その集積の原因として、又た結果として、多くの富豪を輩出せしめて居る、農村の

富の集積が土地の形に於てするでなく、反てこれか悉く流通資本の形に於てしなければならぬとすれば、これ農業に勤勵して節儉なる結果は都會の繁榮に資し、農業氣分の消滅を介くるの虞がある、此の如きは土地慾の衰弱のこれと伴ひ到るものたるを前提としなければならぬのである。

投資の目的物として土地か採用せられ、爲めに地主なる階級が生じ、土地の分配が不均平を來すに至るも、その甚しきに至らざる限り、これらも決して非難すべきでない、今日の社會組織に於て、財產の不平均は自然の結果であり、又た已むことなき不利益であり、反て利益であると認めねばならぬ。

所詮は土地の價が過度に高く、一般農業者が如何に希望するも、到底これを購ふの機會を得ざるまでに及ばゝ、茲にその價格が農政上不利益であると認め得べきも、所謂談豈容易ならんやであつて、文化の進展上より立論する場合に於ては、事は極めて複雜であつて、一義的にこれを論過せんと要するが如きは、これ科學的立脚點より觀て、頗る不當ならざるを得ないのである。（地主の農村社會に於ける位地は第十八章第十九章參照。）

# 第四章　資本と小農經營

資本はもと商業上の用語であつて、その經營の手段たる貨幣價値を指したのであらう、この用語を廣き意義に取り、凡ての生產手段をこの用語内に收むることゝしたのが昔時の經濟學である。

この廣き意義に於て、資本なる用語を採用することゝしなば、資本なき生產は原始時代よりして、曾てこれあらざりしものとしなければならぬ、實に農業經濟學者の如き、今日尙ほ多くこの用語に據りて、固定、流通兩資本を說き、資本と生產手段とを同一視し、貨幣價値を以て資本となすの今日の慣用に則とることなきを常とする、若し資本を生產手段なりとしなば、資本主義經濟なる意義の如き、その徹底を缺くのみでなく、農業經濟學の研究に於ても、多くの支吾を來たすの虞がある、されば余は資本と生產手段とを別個の意義に考へ、資本は貨幣若くは貨幣價値の生產用又た經營用に供せらるゝものに對するの術語となさんと欲するのである。

この意味に於ける資本は大農の如き資本主義營利經營に於ては、經營手段として、多く使用するのである、資本の運用によつて、かれは利潤を求むるのである、農業

は他の企業とは違ひ、多少の生産手段を自製することが出來る、而かも年度の終りに於ては、必要に應じ、これが貨幣價値を評定する。

小農の如き勞作經營に於ては、これと相反して、自製の生産手段が最も多く用ひらるゝ、資本主義經濟時代たる現時に於ては、勞作經營と雖ども、全然資本を用ひざる譯にはいかぬが、而かもその用量は比較的に少い、のみでなく、資本投下の意義が營利經營に於けると頗る揆を異にする、營利經營に於ては資本投下の目的は全く利潤獲得にある、資本がその經營の唯一要素である、これに對して勞作經營に於ては自家勞力が主たる經營要素である、隨つて資本はこれが臣妾の位地に居る、自家勞力の能率を進め、その效果を增すが爲めに、即ちその補助として用ひらるゝものである、生産手段の不足を補ふが主である場合が多い、手間肥を補ふが爲めに金肥を施用するが如き、その一例である。

小農がその經營に於けるや、種苗、肥料、飼料等の如き、多く自製のものを用ひて、植産、畜産を生産する、その事業は專ら技術にある、出來る丈け多くの收穫を擧げんとするには、巧みにこの技術を操つるにある、この技術を操つるが爲めの農具である、農具も已むを得ざるものゝみ、資本を用ひてこれを購ふ、わが國の小農家は近時多く金肥を購ふことゝなつた、これ自製肥料の不足と、これが性質上の缺點を補ふが爲めに外ならぬ。

小農は役々として勤勞し、その勞力の效果を出來る丈け多く收めんことを期するも、その效果の大なるを求めんが爲めに、多少の資本を投ずることは已むを得ざるものとするも、小農の專ら苦心する所は、この資本の巧なる運用ではない、資本の巧なる運用を緊要ならずとするではない、而かも小農が貴ぶ所は經營的技倆にあらずして、反てこれ技術的堪能にあるのである。

所詮は小農の如き勞作經營主は出來る丈け多く且つ巧みに自家勞力を利用するを以て、最も大切なる要務とする、かれは經營の技倆よりも、技術上の堪能と、勤勞とを以て、その成功の基とする、これが即ち營利經營なる大農の成功の要素が一に經營的技倆にあるのと相違ある主點である、經營の技倆といへば、實に資本の巧みなる運用と、勞働者の巧みなる使役に主點を置くのである。

營利經營に於ては、その經營の規模の大小は當然資本の多寡を以て、その比較の基準とすべきものである、資本を一定の範圍内に於て出來る丈け多く運用し、その集約の程度内に於ては、出來る丈け、收入のその投下量に對し、即ち生産費に對し、比

較的に大ならんことを旨とする、所謂少費多獲なる概念即ち是れである、少費多獲の概念は經營の大小に通じたる普遍的の理想であるが、而かも小經營に於ては、その經營の大小は必ずしも貨幣價値を以て算する所の資本の多寡によつて比較算定すべきでない、これが主要なる經營要素は自家勞力であつて、資本はこれが補助たるに過ぎないこと、前述の如しである、且つこの場合に、單に投下せる資本のみを基調として、少費多獲を說くも、何等の意義を徵することが出來ないのである。

小農經營に於ては出來る丈け資本を用ふることを節約せんと欲する、勞力を以て採集することの出來る生產手段は、出來る丈け、購ふことを避くるがよい、賃傭勞力の場合ならば、即ちこれ資本をこれに投ずるものであるがゆゑ、これを以て生產手段の採集をなすが如きは、得る所と費す所との比較によつて、これが得失を決すべきは勿論である、自家勞力の場合に於ては、何れの方面にこれを利用すれば、最も多くこれに價値づくることの出來るかをよく考慮すべきこと、勿論であらねばならぬ、一般の原則として、資本を用ふるよりも、自家勞力を出來る丈け多く使用して、生產手段はこれを採集するを以て宜きを得たりとすべきであり、資本はこれが補助たるものと心得べきこと、前述の如しである。

大農經營の如き營利經營に於ては、資本は相當の利息を拂ふて、これを經營に投下するも、不都合なきを原則として不可ない道理がある、資本の運轉が遲緩なる丈け、商工業に於けると同一に視ることは出來ぬが、而かも適當なる金融機關によることの出來る場合に於ては、借入資本を用ふるも敢て非難すべきでなからう、これに反して、小農經營に於ては、多くの場合に於て、或は原則として借入資本を用ふることは、これを不利益とする、但し一方から見れば、經營の割合に資本を用ふることの少き丈け、利息が多少高値なるも厭ふべきにあらずとなすことが出來ないでもなからう、彼の肥料購入資金の場合の如きがその一例とする、併ながらこれはある一定の場合に於てのみであり、順當に生產が行はるゝ場合に於てのみ當箭まるものであつて、年に豐凶があり、生產物の價格に騰落があることを考慮の中に入るゝときは、借入資金の使用は甚しき危險の伴ふの虞ありとして、出來る丈けこれを避くるを原則としなければならぬ。

これを要するに、土地に對する勞力と資本との投下割合を以てすれば、大經營の場合には資本的集約が往々にして行はるゝ代りに、小經營に於ては勞力的集約が

行はるゝ、(後章參照)器械に資金を投じて、資本的經營をなす代りに、勞力殊に自家勞力を多く使用して、大經營に於て想像することの出來ない程に、勞力に集約なる經營をなすのである、世往々小農が此の如く、多く勞力を使用するを目して、これが節約をなさんことを忠告する、これ小農の小農たる所以を辨せざるの議論である、勞力を多く用ふるは小農の生命であり、そこに大なる意義あるものなることを認めねばならぬ。

## 第四章　資本と小農經營

### 附　器械と小農

人間の力以外の原動力を以て動かす所の器具を假りに、器械と認めて置く、然らば畜力も、所謂器械力も同樣に、當然器械使用の原動力とすべきであり、所謂有生器具も無生器具も、原動力たるに於て、こゝには分ちなく論ずる。

資本主義的營利經營より見れば、畜力も器械力も人力も、敢て區別の必要あるべき點がない、これは皆資本の用途に外ならずして、生產費の範疇に屬するものに外ならぬ、現代の經濟學に於て、勞力として人間の力のみを特稱するは、その力の持主が人間なる動物、即ち經營者と同一種族に屬し、またこれに經濟上特異の研究對象があるからである、往昔人力の提供者は悉く奴隷又は隷屬であつて、敢て賃銀なるものを給與することをなさゞりし時代に於ては、純なる經濟上の關係よりすれば、人間も家畜も器械も、これを分ち論ずるの必要がなかつたのであらねばならぬ。

純なる私經濟より見れば、現代に於ても、これ等各種の力は、生產手段として、彼れ此れ代用せしむることの出來べきものであつて、若干技術的見地よりする相違の外、何等區別を立つべきものでない。

勞力の貨幣的價値が昂騰する程、器械力の貨幣的價値が比較的退減する、勞働者が得易からざる程器械の使用が增加する、資本主義營利經營に於ては、これ等に對する經費は均しく生產費として損益の勘定項目に計上せらるゝのである、蓋しこれを他より借用する場合には、即ち借料として支出すべきであつて、賃銀の如きは則ちこれを一種の借料と見て不可なる道理を發見しないのである。

技術上より見て、各種の力には多少の優劣もあり、得失もある、(1)而かも經濟的見地よりすれば、亦た是れ生產費の多少勞價の大小が問題となるのである。(2)

小農經營に於ては、資本に對すると同樣で、單に勞作に對する補助と見る、而して

技術的見地よりする、各力の相違が及ぼす所の關係は大農經營に於けるに比して、更に大なるものがある。

(1)『一人の男はMotorpflugを以てすれば日に二十五モルゲン耕し、牛を以てしては同じ深さで一・五モルゲンに達しない』エレボー。

(2) 器械と人力と、その各速力の差の外、機能に大なる相違あることも認めねばならぬ、耕耘その他に對して、變化自由にして、精巧なるは人力の長所である、これに對して、往々整一正確であるのが、器械の特徴である、これ等の點は單に速力のみの比較によつて、能率を論ぜんと擬するの不可なるをいふものである。

# 第五章　自家勞力

資本主義經濟社會に於ての勞力は、勞力その物の問題よりも、勞力の持主たる勞働者のそれが主要である、勞力といへば筋肉的、器械的のそれを指すのであるが、今日の如く、複雜なる狀態に進める以上、純なる筋肉的、器械的勞力と、精神的勞力と、その持主を分類するに就きて、頗る困難を感じなければならぬ、現時の社會組織に於て階級的意識が感情を交へて、茲に勞働者なる一階級を認め、社會に大勢力の團體を生じたものと見なければならぬ。

勞力といふ概念に於て、筋肉的また器械的と精神的とを截然區別の出來るものではない、而かも經濟組織の分化が大に進み、經營者、事務者、勞働者なるものが、相當の程度に認めらるゝに至つて、始めて勞力に範疇を分つことの出來るやうになつたといふてよく、この分化的分業のなき所には、此種の區別は全然不能であらねばならぬ。

然らば勞力といふは勞働者の勞力であり、賃傭勞力であると見なければならず、農業經濟學に於ての勞力も、この意義に於て研究せらるゝのが常である、これ何と

なれば農業經濟學は一般に資本主義的營利經濟の農業を以て研究對象となし居るからである、余はこれに對して自家勞力なるものを認めた、初め經營者の勞力と名づけたのを改めて、この名稱となしたのである。

自家勞力なるもの果して穩當なる名稱であらうか、勞力なる名稱が既に一種の意義を齎し來たれる以上縱ひ自家なる形容詞を冠するも、尙ほまぎらはしき名稱であつて、概念の上に、兩者間の混錯を免れざるべきではなからうか、而かも別に然るべき名稱を發見せざる以上、概念上不都合なき限り、この名稱に據るを止むを得ざることゝしなければならぬ。

大農經營に於ては賃傭勞力をその資本の運用上主とし用ひざるを得ない、この經營に於て謂ふ所の勞力はこの種の勞力に限られて居る、自家勞力を時として用ひないでもない、而かもこれは勞力とは稱しないのである、自家勞力の成果はその利潤內に貨幣價値として現出し來たるもので、利潤內に於てはこの種筋肉的勞力も、所謂經營的勞力も、全然區別せらるゝことなく、他の要素と共に、渾然一切無差別に貨幣價値として計算せらるゝのである、されば勞力が貨幣價値として經營費の中に組み入れらるゝは、賃傭勞力であつて、單に勞力と云へば名實共に賃傭勞力に外ならぬ。

小農經營に於ても、多少の賃傭勞力を使用する、されば大農經營にて謂ふ所の勞力は、小農經營に於ても、亦た同一の名を以て使用することがある、而かも一方自家勞力なるものが特に認めらるゝ、是れ技術上賃傭勞力と均しく、筋肉勞力の分子が著しくこれに含まれて居るからである、言を換えて云へば比較對照上、かく名づけたのであつて、賃傭勞力と概念上に混錯を來たし易いのは已むを得ざること前述の如しである。

自家勞力は純然たる筋肉勞力となすべきものでない、その持主に性質の差多き丈け、その行動に種別多き丈け、或は精神勞力とし、或は筋肉勞力とし、その間に區別をなすことが困難である、又た所謂經營的勞力も同時に操らるゝ場合少くないのである、されば自家勞力は賃傭勞力と相似たる點が、技術上發見せらるゝといふに止まつて、賃傭勞働者の勞力とは全然特種のものと認めなければならぬ。

經濟上の見地よりして、自家勞力が賃傭勞力と全然異なれる點は、かれは生產費として、その貨幣價値が支出項目の中に現はれ來たるに對して、これは年度末の決算勘定に於て、その價値が收入項目內に於て、他の要素の成果と共に現はれ來たる

にある、これが實に兩者の最著相異の點である。

賃傭勞力に對して所謂賃銀は使用毎に、必ず支拂はるゝ、年度末の計算が縱ひ損失を示すことありとするも、そは支拂はれたる賃銀が生産費として控除せられたる後に於てゞあつて、その損失は或は賃銀の支出が過度に多かつたからゞであると認定せらるゝ場合もあり得べきである、少くともその損失の要素として支出の側には必ず多くの賃銀が發見せらるゝ、即ち大農經營に於ては然りである、小農經營に於ても、分量の差はあるが、亦たその支出の項目中、賃銀なるものが發見せられないでない。

自家勞力はその價値が收入中に入れらるゝものである、若し年度末の計算に於て純收入なるものが認めらるゝとしなば、その純收入は悉く自家勞力の價値であるとするも、簡單化せる一種の概念に於て、敢て不都合となすに足らないであらう。

大農經營に於ては收入の源は資本である、資本運用の結果が利潤として現はる、小農經營に於ては作因の主なるものに、收入の源を歸することゝするならば、そは即ち自家勞力であつて、自家勞力が各種の生産手段を適宜利用したる結果、即ち純收入が現はれ來たるのである、各種生産手段は、悉く自家勞力の補助因子である

と見做すときは、大農經營に於ける利潤に對して、小農經營に於ては自家勞力の收得があるとなすことが便宜であらう、即ち自家勞力の價値は、生産費でなく、反てこれ收入である。

既に收入である以上、これが使用上の數量に對しては、經營主は賃傭勞力に對すると、全然異なつたる意義の下に取捨する所あらねばならぬ、大農に於ける經營費は出來る丈け節約するの必要がある、同一の効果、同一の能率があるとしなば、勞力の代りに畜力、器械力などを以てするも、敢て不都合なりとはしない、生産物の貨幣價値が賃銀の數量と比較して、そが不足であるとしなば、該生産物の生産はこれを止むるも敢て不都合がない、少費多穫の意義に於て、少費といへは今日では主として少き賃銀であると見ることが出來る位である、奴隷使用の場合に於てであれば、奴隷は出來る丈け、搾取するを利益とした、その全能力を出ださしむべく、これが酷使を避くることがなかつた、出來る丈け少數を以て、出來る丈け、多量の成果を收むることが、奴隷使用者の利益とする所であつた。

賃傭勞力は約束の時間内に於て、それ相當の働をなさしむるより外はない、漫にこれが搾取を企つることは容されない、故に賃銀とその成果とを比較して、所謂勞

價を出來る丈け低廉ならしむべく、最善の努力を必要とする、これが爲めの生産の選擇であり、これが爲めの器械の使用である、器械の使用はより廉價なる生産費を以て、より高價なる勞力に代ゆるを旨とする、勞力の能率を進めて、その生産費を打減せんとするといふ、これ右より見たるものを左より見るに過ぎずして、見地の相違よりするに外ならぬのである。

自家勞力は出來る丈け、收得の多きものに向くるがよい、生産の選擇はこの意味に於てすること、大農經營に於ける勞力に對すると相均しきものである、而かも兩者の間の意義は頗る相同からぬ、大農經營の場合には勞力を生産費と見て然るに對して、小農經營の場合には、これを收入の源として然るのである、かの場合にはいはゞ消極的の意味に於てし、この場合には積極的の關係を有するのである。

賃傭勞力は外より賃銀を拂ふて傭ひ入るゝものである、傭ひ入るれば入るゝ程、經營費が多くかゝる、自家勞力は外より入るゝでなく、内に在るものである、他人の有でなく、自己の有である、これを使用するが爲めに料金が要するでなく、多くの場合に於て、年中餘る程の分量が存する、これの有效なる使用が望ましきばかりでなく、年間出來る丈け餘剩なからしめんことを欲する、[1]一日の時間も自己の能ふ丈け多からんことを欲する、これを多く使用するのが精勤者であつて、然らざるが怠惰者である、精勤は好ましいが、怠惰は厭はしい、精勤なるが苦しく、怠惰なるが樂であるとも限らぬ、體力相應に稼ぐことは、健康の爲めにもよいのである、賃傭勞力と自家勞力とは、隨つて品質の上にも大なる相違がある。

賃傭勞力にも、雇傭關係を度外視して、極めて忠實にして、精勤を以て稱するに足るものがないでもない、稼ぐことを樂みとするものもないでない、而かも一般の原則として、かれ等は約束の時間丈け、約束せる仕事をなせば、それにて足れりとする、かれ等は契約なり、世間押し通りなりの分量に、その働の標的を措くのである。

自家勞力はこれと頗る違つて居る、これは何等契約の據るべきものを有するでない、おのれの仕事を收入多からしむべく、この希望を以て勞働する、勞働すれば勞働する程、收入多きを加ふるの望みがある、所謂慾と共に勞働するのである、日々の時間も、精勤者程、多く働くのであつて、修養の結果、慾なるものは去つて、勞働そのものゝみ殘り、働くが爲めに働くに至つて、精勤の極度に達することゝなる、又た農業上の勞働は仕事そのものに樂みが伴ひ、仕事の對象物に同情が起る、作物や家畜の盛榮を來たすことは、いふに謂はれない程の快味を感ぜしめ、その不良なる狀態に

居ることは、如何にしても見るに忍びないといふ同情の感あらしむる、所謂同情的興味は獨り有情のものゝみに對してゞなく、無情の草木にも及ぶのである、茲に勞働に自ら趣味が生ずる、勞働の技術的結果に趣味が起る、その結果に就きてばかりでなく、勞働の技術的出來榮にも、趣味が伴ふ、自己搾取などゝいふことは、自家勞力には多く發見せらるべくもなく、生産的勞働には必ず勞苦が伴ひ、娯樂に對する勞力には然らずといふ、此の如き區別は少くとも自家勞力には見ることの必しも出來るものとは思はれぬ、自家勞力の特徴はこゝにも存する。

自家勞力の持主は一樣でない、老弱男女、勞力の持主としては品質の優劣種々である、その中經營的勞力を何れがこれを行ふであらうか、多くの場合に男子が經營主であつて、その妻がこれが補佐であらう、而かも補佐が果して補佐であり、經營主が果して命令者であらうか、家族の凡てに就きてこれを見るも、往々にして命令をもなし、補佐をもなし、何れを純なる勞手となすことが出來やうか、これか區別の出來ないのが多い、その勞働能力に就きて見るも、適材が適所に働かしめらるゝときは、男一〇女八といふが如き、往々採らるゝ所の能率の比は全然應用が出來ない、その能率と大なる關係なく、男と女とは勞働者として多く賃銀率を殊にして居るが、自家勞力の場合には此の如き習慣的の比率は應用の限りでない。

これ丈けは多く確である、即ち自家勞力は多く命令を待たずして働き、働くべき仕事に對して、自家の發意に於てこれをなすのである、極めて怠惰なるものを除くの外、自己が働くのは自己の仕事として、效果にも重を措き、趣味にも驅られて働くのである、賃銀を得るが爲めにそれ丈け働くといふのとは、全然範疇を殊にするのである。

自家勞力に對して一日幾何の勞賃を認むるか相當であるか、往々これが評價を試むるものがある、此の如きは頗る無理なる試みでなければならぬ、その試みには賃傭勞力との比較を以てするが、殆んど常であると見て差支がないであらう、而かも兩者の間全然その性質が違ひ、その範疇が異なり、直接の比較は殆んど絶對的に出來ざるものとなして不可ないであらう。

賃傭勞力の價値には一日若干といふ客觀的の相場がある、その效果が幾何であつたかは、年度の終りに於て定まるものであるが、而かもその損益計算の終局を待つことなく、働いたる當時に於て既にその報酬を享受する、即ち先取の報酬である、加ふるに一方人に使はるゝものである、その仕事の成果には何等直接趣味を有せ

ざるが常である、一年果してその生活に必要なる丈けの收入を獲ることが出來るであらうか、幾日かの失業を憂ふるが如きことはないであらうか、年傭の場合にはその契約期間は生活が安定して居る、而かもそれは契約期間内の事に外ならない、自己の仕事に於てすると同視することは出來ぬ、所詮は勞働者の境遇と、經營者及びその家族のそれとは根底に於て違つて居る、自己が自己の發意に出でゝ働くといふのと、人に傭はれて働くといふのと、各心理狀態の根本が同一なるを得ない。

かゝる事情の下に、人に傭はれて働く所の所謂勞働者は、仕事の種類により、又た同一仕事も、時期によりて、賃銀の相場が違ふ、そこに所謂供給需要なる關係も働いて居る、これ等の事情や、賃銀構成の根本問題に就きては、從來經濟學者の研究が少からぬ。

自家勞力に就きての研究は極めて乏しい、乏しいといふより殆んどないといつてもよい、自家勞力といふ名それ自身が余が始めて命じた位のものである、そが働いて獲る所の收得如何、何人に對しても、その收入率に就きて契約があるでない、それが幾何に當るべきか、年度末の計算に於て始めて發見せらるゝ、これと先取的收得をなす所の勞働者の賃銀と比較するは無理である、繁閑の差によつて、これに差異を附せんと試むるものがある、愈々以てその當を得たることゝすべきでない。

資本主義的營利經濟の場合に於ては、資本の効果に對する貨幣價値は市場に相場がある、一般利率といふがそれである、この相場に該當する丈けの收入を得ることは、資本所有者には何時にても出來るとなしてよい、然らば經營者がその資本を運用することによつて、單にこの率丈けの收入より得ることが出來なかつたならば、危險をも冒し、勞苦をも嘗めて經營をなすの必要なしといはねばならぬ、故に經濟人としての經營者は當然その經營の利潤として、一般利率に相當以上の收入率を豫期するのである。

これと同樣に、自家勞力もこれを他人に提供したならば、同一カテゴリーの勞働者と同率の收得を豫期することが出來る、故にこれと比較して、一日の收得率を評定することが、不合理でなく、寧ろ評定基準としては、これによるを適當とし認むべきである、(1)此の如き議論も全然根據なしとはいへまい、併し資本の場合には一般利率以上に收入率が豫期せらるゝ、自家勞力の場合には果して如何。

資本に於ては同一貨幣價値は何れも同一の貨幣價値である、勞力は全然これと揆を異にする、賃銀の相場は勞力の有効率を嚴密に評定して定まるものでない、例

へば男女間の率差の如きは、純然たる合理的のものと見ることの出來ざる場合が多い、これに反して自家勞力の場合には、その價値はその價値相當の價値である、適材を適事に當つることによつて、女は反て男に勝ることにもなり得べく、その實老弱男女等全家族の協働によつて、經營の成果は擧げらるゝもので、有効率に一定の差を附することは、可能性に乏しい、即ち自家勞力はこの點より見ても、賃傭勞力と比較すべきものでないことが分る。(2)

それのみでない、市場に價格を認めらるゝ勞力には制限が附せらるゝ、例へば零碎時間の勞力は市價を有しない、時々中斷せらるべき勞力はこれ亦た賃傭の價値を有しないと、いふが如しである、自家勞力が有利に用ひらるゝには、別にかゝる制限がない、苟も有効に用ひらるゝものは、如何なる種類の勞力といふことに制限がない、時には教育の意味に於て働かせて居る勞力もないでない、若し市場に提供して賃銀的收得を求むるとなれば、自家勞力の中、時には一個若くは二個に止まるべき場合に、自家がこれを自家の經營に採用するときは、そが三個にも四個にも及ぶべきことがあり得るのである。

賃傭勞働者の不利とする所は、一旦結婚をなし、子供が家族の中に加はゝるときは、子供の養育に當る所の妻君は、賃銀收得者の中より除かれ、往々にして一人の主人が凡ての家族を養ふことを餘儀なくせらるゝことが、その一である、稼人が一人にても仕事を休むときは、それ丈けの收得が得られざることゝなる、是れ亦たその不利益の一である。

此の如き不利益より殊に農業に於ける自家勞力の一團は逃がるゝことが出來る、全然勞働力なき老幼病者などを除くの外、凡ての家族は多少の勞働に服せしむることが出來、自家勞力はこの格外を除きて、最善に利用せらるゝことが出來、またその中の或者が若干日間業を休むも、多くの場合に左程の收入減を來たすの虞がない。

これ等その他の事情を認めて、賃傭勞力と自家勞力とを比較對照する、而して各收入率は孰れか高く、孰れか低かるべきか、或は同等に評價すべきであらうか、この比率が若干であると斷定するものがありとしなば、畢竟これ獨斷的認識に過ぎずとの非難を免るることが出來ないであらう。(3)

(1)　一經營年度内に於ける勞働の分配に就ては左記參照。
農商務省農務局、副業參考資料(六)餘剩勞力調査事例(大正十年)。

Taylor, Outlines of Agricultural Economics 1925, p.p. 34—41.

v. d. Goltz, Landwirtschaftliche Betriebslehre 2. Aufl. 1896. S.S. 274—5.

Tschajanow, a. a. O.S.29. チヤノフは實例に就て述べた後 Jedenfalls gilt der Satz: In der bäuerlichen Wirtschaft wird regelmässig die Arbeitskraft nicht voll ausgenutzt." と嘆じてゐる。

(2) この限界生産性の概念はチウネンが、その勞賃論に於て採用せるところであり、經濟學に於ても例へばクラアク等によつて採られてゐるものである。

(3) 仕事の種類と勞働者の種類との關係に就てはエレボーの精しい考察あり、ibid.120—141

# 第五章　自家勞力

## 附　マルクスの勞力と自家勞力

自家勞力の性質を研究するに當りて、これとマルクスの勞力とを比較對照することは、頗る興味ある試みでなければならぬ、マルクスの「賃勞働と資本」乃至「資本論」を繙くときは、その所謂勞力は極めて簡單なる筋肉的勞力に過ぎずして、經營的勞力は全然問題に上して居ないやうである、獨りマルクスのみでなく、現代の經濟學者もやはり勞力を同樣に解釋するが通常であるやうである、但マルクスは社會的平均勞力といふ、前人の未だ道破せざる一種の概念をその勞力の上に置ける丈け、この對照比較が殊に趣味を加ふるのである。

マルクスは商品の價値は社會的必要勞働時の分量によつて評定せらるゝものであると論ずる、而してその論述する所の全般より推せば、この社會的必要勞働時には經營に關する諸般の筋肉的精神的の勞力の支出は全然これを除外して居るやうである、資本家(企業家ではないやうである)は單に資本を提供し、勞働者を搾取することによつて、剩餘價値を獲得するものであるといふことを前提として居るやうである。

資本が適當に投下せられ、案配せられ、最も經濟的に運用せられ、所謂勞力は合理的に組織せられ、その組織的動作が最も有效的に行はるゝやうに指揮監督せらるゝ等、諸般の經營的勞力は何等認められて居ないやうである、若しこれ等の經營的勞力が生産上貢献する所多き、現代の經濟界に於て、全然これを除外し、商品は單純なる所謂勞力によつてのみ生産せらるゝものとなさば、これ餘りに非科學的であらねばならぬ。

余は發明が勞力の能率を加ふるの値あることを認めたるマルクスはその發明が如何なる勞力によつてなされたるものであるかを諒知するであらうと信じな

ければならぬ、既にこれを諒知するときは、生産に貢献する所の勞力は決してその所謂勞力のみにあらざるを辨ぜざるを得ないであらうとなさなければならぬ、而かもこの種の推論を以て、マルクスの主張に對して論難に渉ることを避け、且つ試みに喩を取つて、商品の生産に與る所の勞力はしかく單純なる機械的勞力のみに止まることなく、精神的勞力の寄與する所の極めて多きを調べて見やう。

かの戰爭の場合を考へよ、これが現代に於ける組織的動作の最も顯著なるものと見ることが出來やう、軍隊の最高幹部はまづ以て、各部隊の配置と、これが活動との爲めに、大體の作戰計畫を立てねばならぬ、この作戰計畫の大體方針に從つて、それ〴〵部隊が活動を始むる、而かもこの活動は時宜に從つて多少の變化をなさねばならぬ、大體の指揮が各部隊を掣肘して、これに盲從を强ゐてはならぬ、一部隊はまた幾多の小部隊に分れ、この小部隊は更に小なる部隊に分たれ、これが配置、これが運動に對し、それ〴〵これが任務を帶びたる各種階級の將校が置かれてある、今は此の如き、複雜なる軍隊的組織を細叙するの機會でないと思ふ、而かも團體の組織的動作の最も顯著にして、何人も疑を挿むを敢てしないのは、戰時に於ける軍隊の組織的活動であるに相違ないといふことを以て滿足しなければならぬ。

かゝる組織的活動のメカニズムがおのがじゝ漫然たる經路を各部分に執らしむべき道理は決してない、提案せられたる計畫はそれ〴〵の任務に居る各將校が命令の下に、多少自己の發意をも加へて、これを實行する、その實行が一絲亂れざる底の整然たるものでなければならぬ、苟も然らずしてこのメカニズムに動搖が起り、何れの部分にか、紊亂を見るが如きあらば、こゝにこのメカニズムの組織に破綻が生じ、その極や、遂に軍隊は土崩瓦壞の悲しむべき結果に終らざるを保しない。

縱ひ勇悍なる兵士が犧牲的奮戰の結果、全軍が見事なる戰勝の月桂冠を贏ち得たりとするも、その名譽が全然獨りこの勇悍なる兵士の雙肩に歸すべきでない、若し軍隊が弱卒を以て成つたとしなば、如何なる神機妙算も、その甲斐あるべきでない、この意味に於て兵士の怯勇が、戰勝の上に大關係を有すること勿論なれども、その實兵士はこの複雜なるメカニズムの一部分に過ぎない、これを一大器械に喩ふれば、その機關の作業部分に外ならないのである、これを以て戰勝の原因が全然獨り兵士の奮鬪にありとなすことは、勿論その當を得たるの結論でない、言を換えて云へば、戰勝の名譽は將校と兵卒との協働の結果にこれ由るもので、軍隊の强弱は兩者の總和に由つて判るゝとしなければならぬ。

現代の一大工場のメカニズムはこれを軍隊に比較すべきものではあるまいか、これが經營を引き受くるものがあり、各要部の任務に當りて、指揮監督をなすものがあり、各種の事務に執掌するものがあり、その組織は分業せられ、分化せられ、複雜化せられて居る、一大器械とこの複雜なる組織が巧妙なるメカニズムをなして、今日の生産は擧げられて居る、紡績絲の如き、簡單なる一生産物と雖ども、この生産には複雜にして巧妙なるメカニズムが工場的經營を形造り、こゝに現代的生産が比較的少き勞力を以て、極めて大量の産出を見ることゝなつて居る、この産出が全然勞働者の手によりて行はれ、資本家(企業家)は單に勞働者を搾取することによつて、剩餘價値を收むることが出來、勞働者が贏ち得たる剩餘價値を袖手して收得し得るものとなさば、恰も戰勝の結果には將校は與らず、獨り兵卒のみか賞賜を得るものとなすと、不合理は相均しかるべきではなからうか。

併しわれ〳〵は此の如き問題に深入すべきでない、われ〳〵の論究の目的は勞力なるものゝ概念に對してである、經濟學原論によれば勞力は勞働者の勞力であると解せられ、勞働者は勞力の價値を賣つて生活するものであるとせらるゝ、言を換えて云へば勞働者は賃傭勞働者であり、賃銀としてその勞働の報酬を受くるのが勞働者であるといふのである、勞働者以外の從業者は俸給を受くるものとせられて居る、而かも俸給と賃銀と均しくこれ報酬である、その實質に於て何處に相違あるであらう。

試みに會社組織の工場に就いて見れば、現に日常その經營の各所に勞働するのは、悉く從業者である、使用人である、その執る所の仕事は分業せられて居る、而かも皆從業者であり使用人であるに於ては同一である、或は殆んど純然たる筋肉的と認むべき勞力より、漸く精神力の加はゝり來たる所の幾段の勞力、更に進んで殆んど全く精神的勞力と見て不都合なきものがある、從來の習慣によれば刀筆を手にして事務所に執掌するものは、筋肉勞働者にあらずとせられて居る、これ筋肉勞働なるものが、殆んど悉く精神力の加味なかりし時代のことである、試みに極めて精巧なる器械の重要部を手にし、若くはこれが修繕に從事するもの、或は勞働者中にてその頭分として、これが監督に從事するものと、單に往復書類の淸書をなし、或は尋常一樣の計算をなし、又た簿記に記帳すると、何處に筋肉勞力の提供者として、即ち精神勞力の加味少き勞働者として、その間に相違を認むべきであらう、精神勞力の提供者として、孰れが勝つて居るであらう。

所詮は大工場の分業せられ、分化せられたる勞働に於て、精神勞働と筋肉勞働とを截然分別することは無理である、妥當でない、均しく從業者であり、使用者である各種の勞働者が仲間分れをなして、勞働者と從業者又たサラリーマンと別種の團體をなすは、因習の然らしむる所、感情の致す所、將た分業の惡結果とより見る外はない、仕事衣が違ひ、仕事場が違ふ、生活狀態が慣習的に違ふ、こゝにかれ等に異なれる團體が出來、異なれる社會が形造らるゝ、此の如きのみである。

翻つて小農の場合を見る、自家勞力は分業せられず、分化せられず、複雜を一身に備ふるものである、作業が時に若くは多く分たるゝといふも、これは或は性の種類の然らしむる所、乃至は年齢の然らしむる所であり、業的に階級的に分たれ居るではない、自家勞力は經營的であると同時に、作業的である、精神的勞力であると同時に筋肉的である、神心を勞して經營に構思することもあり、口舌を以て指揮することもある、犂鋤を執つて田圃に周旋することもあり、刀筆を手にして机前に鞅掌することもある。

かゝる渾然として分化せられざる自家勞力が分業せられて、經營者となり、從業者となり、勞働者となさるゝに至れるは、これ分業上の概念に原づくの分類である、然るをかれは搾取者であり、われは被搾取者であるとする、これ感情的指導原理に原づくものとなすべきではなからうか、或は搾取者となり、或は被搾取者となるは、經營者と從業者(勞働者をも含む)とが、力の强弱に著しき差等ある場合にこれを見得べきである、余が搾取といふは分配上過當の收得をなして、一方を苦むる場合の收得を意味するのである。

マルクスは勞力に向つての定義を直截に示して居ない、而かも階級的對峙を主張するを見れば、その精神のある所、察知するに足るでなからうか、勞力の定義を直截に示さざる所に、マルクス說の根本的缺陷があると、余は信じなければならぬ、將たマルクスが果して精神勞働と筋肉勞働とを區別し居ないとすれば、氏の階級に關する議論は意味をなさざることゝなるではあるまいか、念の爲めにこれをこゝに附記する。

# 第六章　小農の經營主と世帶主

小農經營は往々にして家族經營と名附けらるゝ、經營主が必しも家族たるを要するといふでもない、而かもこの經營は經營主の世帶と、經營との間に經濟の區別が殆んどないのが常である、この意味に於て家族經營の名が不適當ならざることとなる。

自足經濟にありては、經營と世帶とは經營單位の大小に拘はらず、何れに於ても固より區別がない、交換經濟に進むに及んで、兩者間の區別が漸く芽出して來る、而かもこれが截然區別せらるゝに至れるは、信用經濟に進める後に於てである、即ち現時代の經濟社會の特徴の一としては、經營と世帶との間に經濟の區別を生したることにある、社會の進化が茲にも分化を生じ來つたのである、商店と住宅、工場と住宅、各その場所を異にする、農業に於ては場所を異にするまでには多く至らないが、尙ほ農舍とは全然建物を異にし、住宅の爲めに特に地點を選ぶが如きは、極めて大なる農場に於ては、普通の事である。(1)

住宅の建物が借如ひ農舍内にその位地を有するとするも、即ち建物は兎も角も、經濟には區別あるが大經濟に於ける通則である、農場所産の品物を全然世帶の所要に供用しないといふではない、而かも簿記は必す別々に之を設くる、經營の簿記には特にその資本が記帳せらるゝ、收支は世帶のそれと全然別個の記帳である、農場より世帶に採入れらるゝ所産の品物は、農場は世帶に賣り、世帶は農場より買ひ取るの姿として記帳するが當然の處置である、世帶は農場所收の利潤を以て賄はるゝ、是れが大農經營の常態である、商工業と比較して、農業は經營の所産を世帶に供用すること多い丈けが、分化の不充分なるを徴するものと見てよいのである。

小農經營は經濟社會進化の行程に於て、尙ほ世帶と經營との截然たる分化を徴するに至らざるものである、但尙ほ至らすといふは、早晩遂に至るべしとの意味ではない、余は小農は小農として、この分化の程度に於て止まるが常なるべしと思ふのである、經濟社會か全體に資本主義に變し去りたる以上、小農經營か交渉を要する商工の社會が既に資本主義に改まりたる以上、政治がまた資本主義經濟社會に對するの特徴を得來りたる以上、小農經營と雖ども、何時までも依然として自足經濟の儘不變に維持すべきではない、商品生産を全然忌避する譯には行かぬ、時には全然商品生産のみをその事業となすものさへ生じて來る、この種生産の範圍は少

くとも手工界に於て、漸くに縮小せられて來る、固より一方に於て更に新たなる手工を採用することがあり得べきであるが、而かもその種類は大抵自足用品にあらずして、商品たるべきものである。

自足用品の生産が漸く減退して、商品生産がこれに代はりて漸く增進する以上、世帶と經營との聯鎖はそれ丈け弱くなつたと見てよく、それ丈け兩者間の分化は進んだる譯合であるが、而かも世帶と經營とが融合して居り、大體に於て兩者が一體として存することは、舊によつて依然たりとなすべきである、多くの場合に於て特に經營の爲めの簿記を存するの必要がなく、記帳を全然分別することはなし得べからざる場合が多い。

資本主義的營利經營に於て、經營の爲めの資本を世帶の爲めに融通するが如きあらば、これ經營が左前になつた場合に限られ、世帶主と經營主とか同一人格である場合より外には發見せられないに相違ない、非資本主義的勞作經營に於ては、世帶主と經營主とは通常同一人格である、而して世帶主は必ずしも經營の爲めに特に資本なるものを分ち置きて、世帶の爲めには斷然使用せずと誓約するの必要を認めない、兩者間の遣り繰りは、時の場合にあるのである、全體から見れば、消費する所の品物は世帶、經營、孰れの爲めのものであるか、豫めこれを分別することはなし得ない場合が多い、建物に就きて、何れの部分が世帶に屬し、何れの部分が經營に屬するか、この分別の截然たらざるものが多い、家具、寢具等一切の諸器物、これ等の所屬を分別することは困難である、若し主として類を分てば、かの農具の如きが獨り世帶の用に資せざるを原則とする位であらう、消費する物資の如き、これ亦た區分の不能たるか比々皆これである、かの經濟調査に於て、資本主義經濟の影響の下に、兩者間の經濟を區分し、經營方面の損益を發見せんと努め、種々面倒なる假定を設けて、兎や角數字を算出して居るが、而かも根本に於てそれが不合理なるが故に、得る所の成果は不自然なる人造物たるの嫌あるを免れない。

經營といへば、資本運用によりて、即ち貨幣價値を投下して、より多き貨幣價値を求むる所の業態であるとなすが、現時代の概念であるやうである、かゝる概念の下に、小農の業態をも、研究の對象物となさんとするのが、今日の學究者である、然らば經營の名を小農の業態に應用せんとするの可なるやを疑ふこと、その故なしとなすべからざるであらうか、實に小農經營といへば經營と世帶との渾然融合して成れる一の經濟體となすが至當である、即ち或は小農には經濟あつて、經營なしとな

すも、敢て不可なりとなすべきでなからう。

(1) 栽植經營に於ては經營主若くは栽植者即ち管理者は往々農場を離れて住居する。

# 第七章　小農經營の最小限度

小農の上方限度即ち小農と大農との間、これが限界は固より判然せざるまでも、概念に於ての分野は分明なることを得るであらう、大農と小農との區別的概念は數量を基準するのではないが、而かも大農とし經營するには、その經營に投ずる貨幣價値が相當の分量に存するでなければならぬ、營利經營として利潤を求むる、而して利潤率が左程大なる數字を以て示されざる以上、その投下額は勢相當に大なるを要し、隨てその經營が相當に大規模なるべきこと、當然であらねばならぬ。

小農はこれに比して勿論頗る小規模なるべきこと、亦た事情の然らざるを得ざることである、然らば一般にいへば、規模に於て、即ち地積と之れに投下する資本、勞力(廣き意義にいふ勞力)の分量よりいふて、小農は大農より小なるべきを通則として認めねばならぬ、その大中の小なるものの即ちロッセルの所謂中に屬する經營、是れは幾分經營主の勞力が利用せらるゝといふ事情よりして、恰も大と小との間にあるものとなし、これに中なる名稱を附してある、(第一章參照)併しそれが利潤獲得を以て經營の目的とするといふ點に於て、即ち亦た大經營の範疇内に屬することが、

勿論であるとしなければならぬ、但營利經營か勞作經營か、その差別が判然たらざる程度のものに、中なる名稱を附して、これが區別をなすべしとの提議あらば、これは必しも排斥するの必要がなからう。

分量を以てしての限界を大と小とに區別すること、假令ひ實際に於て、これが基準を立つることの困難があるとしても、概念に於て、これが區別を立つることは、左程の困難でなく否、蓋し瞭然たるものありとなすべきである。

然るに小農が小農として、獨立經濟を立つることの出來る分量、この問題に逢著するときは、これが決定は實際的丈けでなく、概念上に於ても大なる困難を發見しなければならぬ、ロッセルは經營主とその家族の勞力が他に利用せられずともその經營内に働くに仕事が充分である丈けの大さを小經營となし、これにて簡單明瞭なるものと信じたやうである、而かも事實は左程簡單ではあり得ないのである。

先づ第一に農業經營といふ、その農業なるものが、範圍如何、是れが大なる問題とならねばならぬ、農業經營に各種雜駁なる分子を抱有せられ易きこと、是れが抑々の農業の特性の然らしむる所であるが、殊に小經營に於ては副業なるものが、多く採用せられ、兼業なるものも少からぬ、これがその特性であるとも考へられ、就中わが國の小農の業態は極めて雜駁なる組織を有して居る、これが極めて小面積の耕地を以てよく生活を營むの原因なるに相違ない、是に於て副業、兼業などの概念に就きて研究の必要が起つて來る。

副業は農業經濟學者往々農產製造を以てこれに當てんと欲する、農產製造は自己農業の所產に加工するの作業に命ずるの名である、但その範圍に就きては嚴然たる限界の畫せられ居るのではない、若し副業が農產製造に止まつたならば、これは農業の延長と見做してよい、若しその範圍が農產製造以外に及んだとすれば、それは農業の範圍外に出でたるものとせられ、この範圍以外に居るものには、別に副職業の名を以て、これを呼ばんと欲するものがある。

副業と副職業との區別が判然たるものあらば、これによつて農業の範圍を定むるに頗る便利よき事ならんも、その實農產製造なる範圍が頗る曖昧なるを免れざるものなるを思へば、副業と副職業との區別も判然たることが得られず、隨つて農業の範圍も判明を缺くことゝなるの不便がある。

これを實際に徵するに、農業經營者は、勞作主義經營者はいふ迄もなく、資本主義經營者に於ても、他の職業を兼ね居るが少からぬ、他の職業が全然無關係にして、各

々獨立して存しなば、敢て問題とするに足らざらんも、事實然らざる場合が往々あるその使用する所の勞働者の側よりして、また各所産の關係よりして、相互相待つて始めて成立し得るの經營も、決して考へられぬでない、勞作經營なる小農の場合に於ては、所謂兼業なるものが殊に多い。

兼業といへば、その兼ぬる所の職業か何れが主、何れが從なるか、截然區別すべからざる場合を指すのである、若し一方が主であれば一方は從となり、從者は則ち副職業と名づけらるゝ、故に農業家か商、工、漁などを副職業とするもあり、勞働者を兼ねたるも少からぬ、これに反して商、工、漁乃至勞働者が農業を副職業とするも少からぬ。(1)

此の如き事情の下に、小農經營の最低限即ち單獨にて成立し得る程度の大さを定めんと欲するは却々に困難ならざるを得ない、隨分六ケ敷き試みなるに相違なきも、副業の範圍を限定し、勿論相當の程度までにてよいが、この限定が出來、副業までを農業の範圍としなば、獨立の經營をなし得る丈けの大さを以て小農の最低限とする、是れより外にこれが最低限を定むるの道はなかるべしと思はるゝ、而かも副業と主業との區別をこの場合にも定むるの困難を生じ來たるが故に、これ亦た決して容易の業にあらざることを思はねばならぬ、抑も此の如き試はもと經濟上の研究の爲め、若くは政策上參考の用の爲にするものなるを思へば、限界決定の基準は相當に明瞭ならざるべからざるものなること、いふ迄もない、然らばかゝる明瞭を缺く所の基準が果して適當なるものとなすことが出來るか、頗る肯定に躊躇せざるを得ない。

併しながら由來一義的の基準を以て、かゝる分類の上に臨まんと欲するが如きは、多くの場合に適當ならざるものなるを思へば、寧ろ各種の事情を考へ、これが決定上の概念を造るを以て、宜に協ふものとなすべきであらう、而してこの定限を如實に表現せんと欲せば、地方による所の經營地積を以てするが、頗る便利なるものなるを思はねばならぬ、獨逸の統計は二ヘクタールを以て、獨立的小經營の限度となして居る、我國に於ては果して幾何を以てこれと相對せしむべきであらうか、疑もなく一町より以下に於てすべきならんも、而かもこれが限定には尚ほ幾多の研究を要する。

獨立的小經營以下は、これを分地經營(Parzellenwirtschaft)、過小經營、矮小經營など命名してある、余はこの中最適當なるを分地經營となさんと欲するのである、矮小經

營なる名は如何にも不健全なるものゝ如く響き、過小は既に適度以下の意を寓して居る、而かもそれ自身として獨立し得ざる程の經營たるに論なきも、これが爲めに社會上この種の經營が不健全であり、不適當であると見ることは出來ぬ。

世に往々分地經營を不健全視するものあるは、昔時細民が一方に不充分なる狹小の土地を經營し、一方その餘ある勞力を他に利用するの道を得ざりしものゝ憐なる生活振が今尚ほ傳はりて、論者の腦裡に現實化せられ居るが爲めとなすべきであらうか、或は農業經營の方面より一義的に考へらるゝが爲めに、この結論に到着するものとも見ることが出來ぬでなからう、その實現時の經濟界では就中都會の事業が相當に發達せる地方に於ては、勞働の機會が多く、又た商工業者などが、その副業として農業を採るものも少くなく、その他各種の事情にある所の分地經營は、決してこれを不健全視すべきでなく、反てこれを採用する所の人に取りては、健康上、及人格上、至大の影響があるのであつて、殊に市民並に勞働者の爲めに、現に國土によりて、分地經營が奬勵せらるゝのである、所詮は社會政策上、分地經營は大に貴ばるべきものでなければならぬ。

終りに附記すべきことがある、他でない、世に往々農業經營の最小限度として、一家を養ふに足る面積を云々するものがある、而かも農業經營なるものが、如何にも複雜なるの關係上、即ちその採る所の事業が頗る雜駁にして、經營が單に土地と直接の關係を有するものにあらざる爲め、最小限度の面積なるものをこの意味に於て一義的に定めんと欲するが如きは、その道にあらざるを思はねばならぬ、小農經營の最小限度はかゝる意味に於てするものなるべからざるを辯じ置く。

(1)　比較大正九年臨時國勢調査局の解釋。

# 第八章　小農の組織

小農經營は一にその自家勞力を最も有效に利用するに目標を置くが故に、專ら資本の利用を利潤の收得に集中する所の營利經營と、根本的要義を異にしなければならぬ、營利經營は何處までも、差引き計算の純收入主義を中心としなければならぬ、生產手段の貨幣價値と、粗收入の貨幣價値と、その差引きが、何時も必ず問題となる、故にすべて使用する所が年傭勞力であつたならば、兎も角、日雇、臨時雇を主として用ふるのであつたならば、差引計算の上にて有利ならざる事業は決して採用すべきでない、その事業經營の集約程度は生產費と粗生產との比例如何によつて左右せられ、生產費の一部たる賃銀率の高低如何によつて、所謂勞力的集約の程度は加減せられ、これ等の事情に原づきて、經營の組織が大に考慮せらるゝ、これが即ち資本主義的營利經營である、若し勞働に繁閑の差あることがこの種經營に於て大に忌まるゝとすれば、これ年傭勞力に不使用の日若くは利用の程度少き時期あるを不利なりとするが爲めである、殊には日雇又は臨時雇を隨時自由に得ることの困難なる場合には、年間仕事の平均は經營上の必要條件とするのである。



勞作經營に於てはその經營の中心は、凡ての自家勞力を、適材を適事に配當して、出來る丈け充分に利用するにあらねばならぬ、出來る丈け、賃傭勞力を採用せずして濟ますべき努力が又た最も肝要とせらるゝ、子供には子供相當の仕事を課し、老人には老人相應の仕事を與へ、凡ての勞力を組織的に働かしめ、合關的に働かしめ、由つてその效果を、出來る丈け多からしむる、そこに仕事の組み合せの中心點が置かれねばならぬ。

農業上採用せらるゝ所の仕事には、種類が多い、學者はこれを分類して、耕種組織、畜產組織、副業組織の三種とする、その他兼業の組織あらば、これは別問題としなければならぬ、これ等三種に就きて、適宜事業に選擇を加へて農業を組織する、その大本に至つては、經營の大小に因つて甚しき相違あるべきでないが、而かも管理の面積が違ひ、勞力の性質が異なる丈け、採擇する所の組織の種類、乃至はその組織內に採るべき事業の種類は自ら異ならざるを得ない。

耕種に就きて考ふれば、穀菽の栽培は大經營に最も適當であると一般に認められて居る、この種作物はやゝ疎放なる栽培に適し、器械が比較的經濟的にこれに使用し得らるゝのが、その重なる原因である、その中最も集約なる經營を利益ありと

するは、稻作である、北米合衆國に於て往々疎放にこれを經營することがあるが、赤米と雜草との被害の爲めに、往々にして甚しき不利益に陷ゐり、永續的耕作が多く不能に歸すべきものと考へらるゝ、穀菽はかく疎放の經營に適し、大經營の採用に宜しとするも、經營上相當の組織を以てすれば、敢て小經營に不可なりとなすべきでなく、現に稻は勿論その他、各種の穀菽が、小經營に於ても廣く採用せられて居る、

工藝作物は一般に小農に適する、大經營にて栽培せらるゝ種類がないではない、彼の油菜の如きは穀菽類と選ぶ所が少い、烟草が米國の大經營に於て、極めて集約に栽培せらるゝは、現に見る所である、甘蔗の如き、甜菜の如き、製糖工場と相待つて、比較的に疎放なる大經營に採用せらるゝこと、亦た周知の事實である、棉作が大經營に採用せらるゝこと、亦た然りであり、茶業はシーロンなどで器械的製造を以て大生產をなして居る、概して工藝作物はその生產物の價格が勞働賃銀の騰貴に伴ふて上騰せざるときは、これが栽培は最も適當なる風土にして、而かも土地廣く、地價廉なる地方に局限せらるゝの傾向あるを見る、而かも集約なる經營を待つて、始めて成果の多きを望むべき工藝作物は、精巧なる技術の持主たる小農の自家勞力に依つて始めて有利に經營せらるゝことが出來る。

園藝作物は果樹と蔬菜とに區別せらるゝ、果樹には疎放なる大經營に適するものもあれば、最も集約なる小經營によつて始めて適栽を得べきもある、蔬菜亦た同樣であるが、一般にいへば、集約なる小經營に適する、市場の組織が概して大量販賣を不利益とするのが、その一大原因である、但蔬果の類の如き、果物と往々同樣の販賣的取扱を受けて居る、花卉は園藝作物に屬せしめ、庭樹亦た同樣である、藥艸は多く工藝作物と同視することが出來る。

作物に關しては、作物其自身の特性あるが上に風土など自然的環境の關係と、經濟的事情とが多くこれに影響を及ぼすが故、或は集約なる小經營に適し、或は疎放なる大經營を喜ぶ、此の如きはそれ〴〵精細なる調査研究を待つものである、米國に於て見る所の如き、機械的經營は米國特異の事情に原づくもので、舊くより開けたる國土の範となすに足らないのである。（拙著比較農業參照）

飼料類は原則として、畜產と大なる關係を有する、畜產と無關係に、販賣の目的を以て、之れが栽培又た管理（後に出づる）を見ることもあるが、これは格外となすべきである、飼料類中特色を有するは桑樹である、養蠶をなすの農家が自ら栽培するを通常とすれども、近年販賣の目的を以て特に栽培することもある、一般に集約なる

小經營に適栽せらるる。

根菜、葉菜など、飼料として栽培せらるゝことがある、相當に集約なる栽培を要するものなれども、原則として疎放なる大經營に採用せらるゝ。

牧草の如き、大經營に於ては往々にして耕地に採用せらるゝ、而かも牧場又は秣場に栽培せられ、又たは管理せらるゝが多い、栽培といひ、管理といふ、栽培には解釋を要しない、管理といふは自然草地の利用に出づるものを云ふのである、我國の風土は一般に牧草に適しない、その品質が良好ならざるのみでなく、乾草を製するに不便である、最初の刈草時には降雨あり勝ちであるからである、これが栽培には雜草の跋扈が大なる妨碍をなし易いのである(北海道、樺太は例外)、此の如き事情は熱帶、半熱帶などにあり勝ちのことであらう、一般に牧草の栽培は小農に適しない、自然草地の利用が最適當である場合が多い、和蘭に於ける最も集約なる灌漑秣場地は例外と見てよい。

畜産に就きて研究する、畜産を家獸類、家禽類、家蟲類、水畜類に分つ、家獸類が特に家畜と名づけらるゝ、家畜に大家畜と小家畜とがある、大家畜に就き且つ馬と牛とを擧ぐる、馬の場合に、奢侈馬を産することは、小農には餘り適當でない、これが爲めに資本を要することが多いのみでなく、その結果に於て頗る冒險的性質を帶ぶるが爲めである、出産したる馬が必ずしも良馬たるの質を有し居るにも限らず、假如ひそれが品質に於て間然する所なしとするも、その良質を失はずして健全に成長することは必とすることが出來ないのである、乘馬の育成は廣き適當なる牧野を所有せざる限り、小農には不適當である、但わが國に見るが如く、共同牧地があれば、小農にもこれが必ずしも不適當であるとはいはれない、そが繁殖丈けに止まれば、慈愛と溫情とに富める小農の手にてなす方、大農に通常なる無責任の賃傭勞働者の手に於てするよりも優ること萬々である、されば獨逸にては小農に繁殖を委ね、大農これが育成をなすこと往々にして行はるゝといふ、牛の場合は馬とやゝその趣を異にする、これが繁殖も育成も、小農の手に於てして不都合なき場合が多い、但役牛となれば放牧を要し、爲めに共同牧野が小農には必要となつて來るが、馬に於てするが如く、特種の廣き牧野が必しも入用でないのである、牝牛を育ふて搾乳をなすと同時に、これを役用に供することが、歐洲の小農には往々行はるゝ、幼時に使役し、若干年數の後肥育するとか、又た特に瘠牛を購入してこれを行ふなど、小農にも不適當でない、獨逸の調査によれば、一定面積を以てすれば、小農は大農よりも、牛

を育ふこと反て多しといひ、隨つて牛の飼育は寧ろ小農に適すと論ずるものあれども、それも小農が管理する土地の面積が或程度よりも小なれば、大家畜の飼育には適せざることゝなる、殊にわが國に於て見るが如く、水田が主なる場合は尙更のことである。（搾乳業者から乳牛の育成を引受けることは我國各地に見られる、又牛の小作、朝鮮に於ける預托牛等は小農に於て自ら發生すべき制度である。）

小家畜に羊、山羊、並に豚がある、羊は小家畜であるが、特種の場合の外、小農よりも、寧ろ大農に適する、山羊は小農に好適である、就中豚は小農の家獸であるといふてよい程であるが、但その種母共に共同飼育となして、仔豚のみを分ち養ふことが、多くの場合に最も利益であらう。

家禽には家鷄、家鴨、鳩などがある、皆最も小農に適する、但前者は殊に共同繁殖をなして、出來たる雛を採用するが、殊に小農に最適である場合多からう、採卵、産肉など、何れも小農に適する。

蠶即ち家蠶は自家勞力に餘裕多き小農に於てのみ適養せらるべき性質を有する、但蠶種製造業は、多少その揆を異にする。

水畜の生産も種類にはよれども、殊に小農に好適であるといふて、不可ないであらう。

副業には種類が多い、農業の範圍内に編入すべきものにして最も通常なるは、特に農産製造とせられて居る、而かも製造の名が不適當であり、寧ろ製作と名附づけたきものもある、麥稈眞田編、藺莚織の類の如きがそれである、蓋し農業に於ては先づ原料品を生産し、更に之れに加工して始めて賣出すことが多く行はる、飼料類を栽培又た管理し、これを以て家畜を飼育して、卵肉毛等を生産するは、これ一種の加工と見做すべきものである、人力又た器械を以て、加工する代りに、家畜の機關の機能を假りて加工するのである、或は黴菌の作用を利用して加工するもある、技術的に考ふれば趣大に異なつて居るが、經濟的理法よりすれば、その間別に異同を論ずべきでない、畜産物は更にこれに加工すること、亦た往々行はるゝ

この外、農業に於て副職業として、各種の仕事を採用すること、前章に於て述べた通りである。

これ等各般の仕事に就き、單にその中の一類、又た一種を採用して、經營の組織を立つることもあれば、各類、各種を組み合せて、複雜なる一種の經濟單位とすることもある、この組み合せの理法は、大經營と小經營との間、主義に於ては大に異なつて居るが、技術的原則に於ては頗る相似て居る、出來る丈け年間勞力の分配を均一な

らしむべしといふ技術的原則は、兩者間に共通であるのである。

大經營に於ては年傭勞働者が多少具へられて居るのが常とせらるゝ、この種勞働者の勞力を充分に利用しないのは、勿論不利益とする所である、これ消極的の事であつて、若し年間の仕事が不平均であれば、勢臨時に勞働者を傭役しなければならぬ、抑も農業は如何に巧みに組織せられても、年間に仕事の全然平均なることは不可能であつて、多少繁閑の差あるは免るべからざる所である、故に原則として年傭勞働者は最少限度にまで縮少し、出來る丈け、隨時勞働者を傭ひ入るゝをよしとする、即ち臨時傭は原則としてこれを採用するがよしとせらるゝのである、而かも都會が勞働者を吸收し去ることの多き爲め、臨時傭を隨時隨意に採用するを得ること、出稼勞働者の多き米國など、新開國に於けるが如きは、少くとも工業が若干發達せる國土に於ては容易に見易からざる所である、故に臨時傭といふも、頗る局限せられた程度に於てする外はない、是れ大經營に於ても、出來る丈け、勞力の年間に平均なるを要する所以である。

小經營に於ても同樣、仕事の年間に平均することは、原則として頗る望ましきことである、是れ自家勞力を充分に利用し、これに價値づけるには、年間多くの手空きの時あらざるを要すること、勿論であらねばならぬ、年傭勞働者の場合には賃銀は勿論年極であつて、勞役日數の多少によつて、その額に相違あるでない、故に勞働日が少ければそれ丈け勞價が高き譯である、自家勞力の場合には、それは生産費でない、反て收入の源である、これを利用することが少ければ、それ丈け收入の多からざるを意味し、これを利用することの多ければ多い丈け、收入がそれ丈け增加すべき道理である、而して消極的には、仕事が一時に集積するときは、賃傭勞力を採用することを餘儀なくせらるゝの虞がある、賃傭勞力の採用はそれ丈けの支出である、賃銀が安ければとて、それ丈けの支出はそれ丈けの犧牲である、この種の犧牲は出來る丈け少いがよい、皆無であつたならばそれに越したることはないのである、大經營と小經營との間の仕事の分配が年間平均なるを要することは、かくて形式に於て相同じであるが、その意義に於ては、兩者の間絶對的相違あること、上叙の通りである。

凡そ農業上採る所の事業は種類によつて、價値に多少の相違がある、同一類に屬する穀作に於ても、例へばわが國では稻作と大麥作とはそが各收入を齎すに大なる徑庭がある、所謂麥作中にても、大麥と裸麥、裸麥又たは大麥と小麥と、殊に風土に

よりて、各齎らす所の收入に多少の相違がある、類を異にする作物を比較するときは、蔬菜や果樹と穀作と、そが栽培上の價値は勿論同一であり得ない。

單純なる理想を以てすれば、風土に鑑み、經濟上の事情に原づき、內容と環境との許す範圍內に於て、最も價値多き作物を採用し、價値少き作物は之を排斥する、これが農業組織上の原則であらねばならぬやうに思はるる、而かも事は左程簡單であり得ない、何となれば作物栽培にはそれ〴〵期節がある、若し某期節に於て、他に採るべき作物が發見せられずとしなば、この期節に於て仕事の缺乏を防ぐが爲めには、勢、極めて價値少き作物と雖とも、これを採用しなければならぬ、極端に云へば、全家族が徒手閑居の不利より免るゝが爲めには、價値が負である所の作物と雖ども、尙ほ且つこれを採用するを可とすることがあり得るのである。

最も價値多しと認めらるゝ作物と雖ども、抑も農作は一面氣候の支配を受け、一面經濟上の變動の影響を蒙むるの恐があり、その他各種の事情あるが爲めに單一耕作は頗る不利益であると當然見做されて居る、（商業的農業はこのモノカルチュアを齎す傾向をその一つの特徵とすて有）この組織は極めて危險であつて、かの最も忌むべき投機組織として排斥せられなければならぬ、そこに各種の作物を適宜組み合せて、最も堅實性を帶びたる併種組織を選定すること、農業經濟上の合理的原則とするのである。

單一耕作に對して、非單一耕作はこれを複合耕作と稱して不可ないであらう、複合耕作式を推し擴ぐるときは、これを畜產に及ぼし、副業をも包含せしむることが得らるゝ、耕種組織と畜產組織とを合せたる組織は特に混同農と名づくることがある、副業を合せたる組織、これは大經營に於ても往々ある所で、小農には殆んど缺くべからざる組織と見做すことの出來べく思はるゝ。

この複合耕作、即ち農業組織に關する作物採用上の條件に就きて、合關的法則は拙著合關率に於てやゝ詳論せる所であつて、今一々これを繰返すべきでないが、これが技術的原則として經濟學者の採用する所は、大經營と小經營とによつて、相違あるべきでない、而かもこれが指導原理の內容に立ち入れば、彼此の間に當然大なる相違あるべきことは、前述せる所によつて、これを審にすることが出來やう。

大經營に於て主眼とするは、彼の利潤である、農業の適當なる組織は期待以上の利潤を齎らすべき基調たるにある、小經營に於ては自家勞力の最も完全なる利用の基調をこゝに求めて、最大收入を獲得せんと欲するにある、各作物、各家畜、各副業、これが選擇は固よりそれ〴〵の生產價値の比較對照に待たなければならぬが、併

しそれは選擇上の一基準に過ぎないで、農業組織を組み立つるに就きては、更に相互間の合關的關係を考へ、大經營にありては最大利潤、小經營に於ては最大勞働收得を唯一の目標として、彼此の選擇をなさねばならぬ、今日の農業家は動もすれば各生產の價値に過度の重さを置き、合關的方則を度外し易い、これ農業の時々大なる悲境に陷ゐる所以の最大原因であらねばならぬ。

# 第九章　集約、疎放

集約疎放は獨逸學者によつて始めて唱道せられた生產手段の濃厚程度の比較である、有名なる經濟學者ロッセルは始めて詳かにこの問題を說明したのであるが、その他農業經濟學者亦たこれに就きて相當に研究をなして居る。

集約の程度は一定面積の地に資本勞力を投下するの分量となされて居る、その分量が少ければ疎放と名づけ、多ければ集約と呼ばるゝ、要するに亦た比較の意味に出てたる標徵でなければならぬ。

而かもこの比較に、通常資本と勞力との兩者を同一の範疇に置いて居る、こゝに相當の疑問が起らねばならぬ、獨逸のフューングは集約に關するこの二大類別に就き、大體の區別としては單に資本のみの比較を以て足れりとし、勞力的集約の如きは細別にあらざれば、副次的類別に過ぎない、何となれば勞賃は亦た資本を以て支拂はるゝが故であると論じて居る[1]、この提唱はその大體を得て居れとも、而かも隔靴搔痒の感あるを免れないのである、實に博士が云へる如く勞力は資本を以て購はるゝものであるゆゑ、資本といふ一義的の要素を以て比較の基調とするに、何

等不都合のない筈であらねばならぬ、のみでなく細別の必要に至つても、殆んど見當らないのである。

大經營即ち資本主義的營利經營に於ては、凡ての生産手段はそが貨幣價値を以て表示せらるべきこと、固より當然である、然るを學者が集約程度を研究するに當つて、この當然にして而かも明瞭なる道理に何が故に、多く氣附かなかつたであらう、蓋し餘りに現實即ち生産技術の實際に拘はれて、科學的研鑽を怠たつた結果、然るを致したものとも見ることが出來やう。

耕作の爲めの技術を目擊するに、主として器械的作業に據るのと、多く勞力を用ふるとの差がある、器械作業によれる、而かも集約なる生産方法はといへば、肥料を多く用ふることであり、器械を用ふるにしても、勞力を多く用ひて、周到に作業を行ふのである、即ちこれを資本化すれば、その分量が相當に多額に上るのである、これに對して、器械を利用することなく、目立つて勞力を多く用ふるものがある、この生産技術の差異に原づきて、茲に勞力的集約なる類別を行ふて居る、この場合には勞力の貨幣價値は計算をなさゝるを常とした、その實この計算をなさんと試みたならば、大なる難關に直面したに相違ない。

かくの如く、集約を區別して、勞力的と資本的とするこれが技術的分類であるとしたならば、それも强ちに非難すべきでなからうが、經濟學的分類としては蓋し意義をなさぬものとしなければならぬ、投じたる資本の額を計算するには、凡てを貨幣價値に先づ以て換算するの必要がある、物料と貨幣とを直に合算すべきでないからである、これに勞力を加算すること亦た勿論不能である、されば資本的集約を測る場合には、勞力は當然賃銀として加算すべきである、然るに勞力的集約といふ場合には、これを勞力その儘にて計算する、かくの如きは比較の基調を異にするもので、分類の範疇として、決して妥當なるを得ないに相違ない。(2)

然らば假如ひ資本的集約と、勞力的集約とを二個の範疇を殊にしたる分類として、存置せんと欲せば、勢、これは主義を殊にしたる經營との間に於てしなければならぬ、いふ迄もなく、資本主義的經營に於ては、生産手段はかれこれの差別なく、一切これを資本化し、貨幣價値として考量しなければならぬ、勞力とてこれを別種視すべきでは勿論ない、これに反して、非資本主義的經濟に於ては、資本は資本とし、勞力は勞力とし、別種の取扱をなすべきである、されば前者に於ての集約は資本の多寡を以て比較の標準とし、後者に於ては勞力の數量を以て比較の標準とするも不可

ないであらう、彼の資本主義經濟を主とし研究せる農業經濟學に於て、この兩者を混錯して、比較の標準を單一基調に求めんと要したるが故に、學者かゝる錯誤に陷ゐつたるものと見て不可なからう。

世往々小農經營に於ての生産に、餘りに多くの勞力を要するを以て憂となし、これが輕減を無條件に圖らんと欲するものがある、餘り多過ぎるといふは、大經營と比較しての事であらう、果して然らば小農經營との比較に於て、大農經營に於ける生産手段に、餘り多くの資本を用ふるを不可なりとすると、事情に於て好一對であらねばならぬ、大農經營に於て資本の多過ぎるを輕減するの理由あらば、これ小農經營に對しての比較よりすべきでなく、同樣に、小農經營に於て勞力の多過ぎるを節減すべき場合ありとせば、大農經營に對しての比較よりこれが打算をなすべきでない、大農經營に於ての生産手段は凡てこれ資本である、小農經營に於ての生産手段には勞力が第一で、これが補助として資本その他の生産手段が用ひらるゝのである。

小農に於ける集約程度の適否は、大農經營に於けると、やゝその趣を異にする、大農經營に於ては資本は比較的に得易い、經營者が選びたる面積に於ては、相當の資本は得らるゝものとして、一定面積に對する投下量は事情の異なるに從つて、相同からざるものとなさるゝ、即ち集約程度の適否を論ずる場合に於ては、抽出せる問題要素以外の諸要素は悉く相均しきものと假定してある、小農經營に於ての勞力はこれとその趣を異にし、斯の分量は經營者毎に或る一定時には定まつて居つて、これか增減はなきものとする、減却は或は出來るが、增加は多くの場合に絕對的に出來ない、若し賃傭勞力を採用するとすれば、その場合にはこれは大經營に於けると同樣、これが爲めに支出する所は資本又は生産手段の貨幣價値であると見做さなければならぬ。

されば他の場合と同樣、この場合に於ても、小經營と大經營とは同一範疇內に於て相比較してはならぬ、資本的集約なるものは大經營に於ての概念に原づくもので、該經營內の比較は勿論資本の多寡を以てすべきである、小經營に於ては勞力を標準とするが便利であらうが、更にそが使用する所の資本の多寡も場合によつて參考とするが良からう、若し大經營と小經營との間の比較をなさんとならば、技術的觀察を以てし、生産の比率を參考とするなどが、然るべきであらう。

一に資本を以て、生産手段の主要なるものとする大經營と、親切と熟練とを特徴

とする自家勞力を主要なる生産手段とする小經營とは、生産技術の根抵に於て大なる相違あるものと見なければならぬ、資本主義的營利經濟に於ては、凡てが差引勘定に主要の重點を置くが故に、生産の分量、これが品質などに關して、分量も品質も、それ自身としては殆んど無關心である、即ち分量と良否とは問題にならぬ、問題はたゞその貨幣價値である、貨幣價値の比率ではない、その總額である、それが利潤として勘定せられたる場合の多寡が唯一の問題である、品質が大なる問題とせらることがありとすれば、それは貨幣價値と聯關してである、數量に於ても同樣然りである。

小經營に於ても、生産物の出來高、そが品質なども、商品としてこれを取扱ふことを餘儀なくせらるゝ以上、勿論その貨幣價値の總額に就きては顧慮する所がなくてはならぬ、併しこの場合に於ては、總額そのものであつて、利潤として表はさるべきでない、而かもその生産物が自家消費の目的物である場合は勿論、それが商品として生産せらるる場合と雖ども、收量の多きと、品質の良好なるとを、それ自身として喜び、わけて作物又た家畜の成育の良否はいはば所謂慾を離れてこれに喜憂するのが、自家勞力を提供する人々の情緒である、彼等がその勞力を提供するのは、それによつて直に收入の多きを唯一の問題とするのでなく、全然收入に關する慾望を離れたる觀念に原づいて行動するが、寧ろ常であると見てよく、それが小經營の運用上極めて望ましきことであるのである。

大經營に於ては、集約の問題と聯關して生産費の問題が起つて來る、他の事情が相均ければ、集約の度が進むといふは即ち生産費の額が增加するを意味するのであつて、それ丈け粗收入は分量に於て增加すれども、比率に於ては減退するのが常である、言を換えて云へば、報酬は漸減率の支配の下に、漸減するのである、故に資本の金利が低くなければ集約の程度を增加するを不利とすべきが原則としなければならぬ、小農の場合に於ては、これと趣を異にする。

小農には嚴格に云へば、營利經營と同樣の生産費はない、假如ひこれに同一の名を附するとするも、それは質に於て大に異なつて居る、この問題は次章に於て、これが詳論を試むべきであるが、所詮は若し强ゐて生産費をこの場合に認めんとならば、その生産手段として支出したる資本の額に止まり、自家勞力の價値はこれを度外しなければならぬ、故に支出せる貨幣と並に資料の貨幣價値のみが生産費であつて、それによつて得たる生産物の貨幣的價値が兩者その總額に於てかれがこれ

に超過するか、乃至はその差が餘りに僅少であつたならば、資本はそれ丈けの分量を使用すべからざることゝなる、その差量はこれに要したる勞力に對して、場合相當の收得を生ずる丈けの分量がなければならぬ、而して場合相當といふの意味は前章組織の篇に於て略論したる所で、その要を得ることが出來やう、かくて大經營と小經營との間、この點に於ても大なる相違あることを知るべきである。

然るに既に自家勞力は一定時に於ては限定せられて居るといふた、然らばこれは確定の分子である、若しこれに變動が來たとすれば、その變動はまた一定したる勞力數を現出するのである、經營者は出來る丈け、この數に應じたる農場の面積を求めて、これを經營せんと欲する、而かもその經營面積は必しも恰も適當なる分量たるを豫期し得ないのである、その分量が多かつたならば、自ら疎放なる經營となり、少かつたならば集約なる經營となる、自家勞力の數が農場の面積に比して、過少であつたならば、賃傭勞力を採用することもあり得べきである、併しこれは生産費に屬するものゆゑ、自家勞力に對する收入の著しく減少せざる範圍に於て、これを使用しなければならぬ、この勞力の分量はその貨幣價値の大小と頗る關係を有すること勿論である、而かも自家勞力の投下分量はこの貨幣價値即ち賃銀の高低によつて、左右せらるゝことがあるべきでない、自家勞力が多過ぎたならば、勢これを何等かの他の仕事に利用するの道を講じなければならぬ、勞力的集約の程度は技術的に極度があるからである。

小農に於ける經營の集約程度は既にいへる如く、自家勞力の分量と經營面積との比例に原づくことが多い、この比例は農業人口と土地面積との關係が重大の決定を與ふるものであり、而して農業人口は大抵不良なる風土に少く、良好なる風土に多い、これ各種の事情の然らしむる所であらうが、所詮は不良なる風土は生産力に乏しく、良好なる風土はこれに反するといふ事情が自ら決定的運命を與ふもの であらねばならぬ、勿論そこに生産技術の進歩程度といふが關係あると同時に、その環境に農業以外の事業が開展し居るや否やの關係もある、この環境に於ける各種事業との關係は多少の複雜性を帶びて居る。(3)

風土と農業人口の關係以上の如くなるは、農業人口に移動性が存すると、また人口の自己制限の存在とを豫想する、若しこれが充分の働をなさゞるときは、人口多きに過ぎて、集約はその度を超え、生活上大なる困難を來たすを免れない、これに反してこの働が過度に行はるゝときは、人口過少となつて、農業は相當以下に集約の

度が低下するが常である、されば集約の程度が人口と土地面積との比に支配せらるゝことと、又たそれと風土との關係は必然なるを保し得ないのである、所詮は風土と集約程度との關係は、大經營に於けるが如き主として生産費と生産價値との關係より來たるものでなく、寧ろ間接に人口と風土との關係に原づくものであるゆゑ、その趣が大に異なつて居ると謂はねばならぬ。

若し夫れ風土が及ぼす所の技術的關係は決して無視することが出來ない例へば稻作に就きて見るに、氣候の寒冷なる場合には、その生育期間が短かい爲めに、集約なる經營が生育期間の長き暖地と、同樣になし得られざるが如しである、不良なる氣候に於ては生産手段を精到に運用するも、その割合に効果を奏すること大ならざるのみでなく、その適度の局限が然らざる場合よりも、速かに到達するが常で、一般に云へば技術上の可能性が集約の經營に掣肘を與ふるのである、彼の暖地に於て行はるゝ二毛以上の作附が、寒地に於て行はれ得ざるが如きは、何人にも諒解し得らるゝ表現的事實であるに過ぎない、また運搬上に多く勞力を要する不良なる地勢が、經營より勞力をそれ丈け吸收し去つて、經營の集約程度に不良なる影響を及ぼすが如き、亦たその一例證となすものであつて、風土の良否といふは進んで各種自然的事情の良否といふが寧ろ包括的なる表示であることを思はねばならぬ。

資本を用ふるの多寡、即ち資本的集約の程度は、小經營内に於ても、全然問題とならざるものではない、而してこれに關する原則は大經營に於ける場合と、略々相均しかるべき道理である、而かも例へば肥料に供する物料の如き、或は貨幣にて購ひ、或は勞力にてこれを採集する、農具の如きも、自製し得べきも少からぬ、所詮は生産手段の同一集約程度に於て、……生産手段の有効度などよりかく推量することが出來る、……資本の用量は凡ての場合に經營の集約程度と關係あらざるものと見ることが出來る。(5) 余は茲に肥料の使用量に一瞥を與ふることを、この場合に適當であると思ふ、英國にて通俗往々云ふ所の高度農業 (high farming) なるものは肥料の施用分量の大なるを以て、標徵として居るといふ、高度農業といへば集約農業の意味に解すべきである、げに未だ全然肥料を用ひざる農業より、進んで多量の肥料を用ひ、肥料の種類も鑛物肥料を加ふるに至るまでの間、農業進歩の程度は明かに階段づけられて居る、而して肥料を用ふることの多少が、集約の程度の一の標徵となすに足るものなることは、殆んど論を待たざる所なのである。

余は嚮きに、經濟學上より見て、施肥上主義の進化を左の數段に分つことゝした。

(一) 施肥の目的が單に土壤生産力の衰耗を防ぐを目的したる階段。

(二) 施肥は進んで、土壤の生産力を加ふるを目的とし、土壤を以て生産手段貯藏の倉庫となしたる階段、この階段に於ては出來る丈け遲效肥料を多く用ふる、即ち有機肥料の如きはそれであつて、資本に多く利息あるを認めないが故に、しかなしたのであると見ることが出來る。

(三) 土壤の生産力を根本的に加ふるは、その實質に改良を加ふるの意味であつて、有機肥料の如き、この意味を以て施用するのである、既にして資本には利息が附せらるゝことゝなつたゆゑ、流通する十錢は固定せる一圓に優るとの意味を以て、多く速效肥料を用ふる、速效肥料は土壤を所謂「肥やす」が爲めでなく、これを以て生産物を造るの資料となし、この資料は一生産を終る毎に殘りなく消費し去らるゝを以て利益ありとする、即ち出來る丈け多く施用して、出來るの器械と認むるものとなしてよい位である、この階段に至つて、鑛物肥料が用ひらるゝことゝなり、その單純なる組成は以て肥料要素を適當に配合して、各要素に過不及あらしめず、由つて無用に地中に遺殘する要素多きの不利より逃るゝことが出來る、この目的の爲めにまた肥料は幾回にか分施せらるゝのであつて、進歩せる蔬菜栽培の場合などに於ては、その生育の模樣によつて、適宜肥量の加減をなすことさへあるに至つたのである、また補助肥料として、所謂間接肥料を多く用ふるが當然と見らるゝ。

今日の科學の程度に於ては、第三階段に述べたる程度に、施肥上の經濟を適當にすることは出來ないが、而かも施肥原則上の理想が最も集約なる農業に於て、進んでこゝまで至れることは論なきことであらう。

以上施肥に關する主義の變遷は、資本主義的營利經濟より觀察したるもので、今日より考ふれば、勿論小經營には當箭むることが出來ないのである、小經營に於ても、無肥階段より、有肥階段に移り、遲效肥料專用より、速效肥料加用に至り、鑛物肥料の階段にまで進んだのは、事實としてこれを承け入るゝことが出來る、而かもこの變遷は主ら生産技術の進歩に原づけるものであつて、經濟主義は左程大なる關係を有して居ないと見なければならぬ、わが小農が一般に金肥を用ふることゝなつたのは、つひこの頃のことといふてよい位である、明治の初年までは專ら手間肥料

を用ひ、金肥は相當に古き時代より存在せるに拘はらずこれを用ふることは、進歩せる小區域に止まつたのである、而かも下肥は古來多く施用せられた、多少の物料と交換してまでも、これを用ひた、遲効肥料を殆んど全く用ふることなく、一に下肥によることさへあつた、下肥は敢て肥効の速なるが爲めに、經濟上の利益を進むる所以として用ひたのでは勿論なかつた、集約なる經營を要する作物に對しては、金肥を多く用ひた、而かもこれ生産の分量とこれが品質とを進むるが爲めで、敢て流通經濟上の主義に原づけるものでなかつた、近年鑛物肥料の施用が盛になつたけれども、亦た同樣の意味よりしたのであつて、これに經濟的主義の色附けをなす餘地がない、勿論金肥にはそれ丈け資本を要するものであるゆゑ、生産物の貨幣價値が相當の分量に及ばざる限り、これを多く用ふることの不可なるは勿論であつて、即ち亦た資本主義的經濟の影響の下に、金肥が多く用ひらるるに至つたることは、いふを待たない所である。

生産技術の立場より、以上の進化が施肥の上に及び來つたのであつて、手間肥たる遲効肥料に加ふるに、金肥たる速効肥料を以てし、鑛物肥料もこれが施用を避けざることこれ今日に望ましき所であるに相違はないが、而かも事情の容るす場合に於ては、全然手間肥のみの施用を以て、耕種的生産をなすべしと主張するの意見は、小農經營の原則として、これを首肯することの出來ないものではない。

序でに尙ほ一個の施肥上の原則に就きて吟味して見やう、歐洲にては古來家畜に重を置くのであつて、凡ての物料にして、飼料となすに適するものは、先づこれを家畜に與へ、その腸胃を通過して後ちに、肥料とするを經濟となされて居る、かくの如きは資本主義的經濟の立場より見ても、決して凡ての場合に於て然りといふことが出來ない、その飼料が果して家畜の腸胃を通過して、爲めにそれ丈け價値づけらるゝや否や、これは畜産物の貨幣的價値の大小によるのであつて、一概に決定すべきものでないからである。

更にこれを小農經濟の立場より見れば、飼料によりては、直に肥料とし用ふると、家畜の腸胃を通過せる後に於てするとは、肥料の性質が全然一變して、生産技術の立場より利害あることはこれを度外に措くも、家畜に與ふることが、その經濟上に必ずしも利益あらざるものといはねばならぬ、かの有機飼料に見るに、直にこれを肥料とし用ふるを不可なりとし、これが腐敗を待つを利益ありとする場合に、その腐敗を家畜の腸胃に委ぬるも、小農の自家勞力に依りてこれをなすも、その得失は

場合の問題である、家畜の爲めにこの物料が價値づけらるゝと同樣、小農の勞力も亦たこれによつて價値づけらるゝことがあり得べきである、小農の勞力は生産費でないことを、この場合にも考へなければならぬ。(5)(6)(7)

(1) Fühling, Oekonomie der Landwirtschaft

(2) 資本主義營利經營に於ても、資本化せる勞力即ち賃銀資本の分量と、他の生産手段の資本化の分量との比較があり得る、而かも賃銀資本を多く投下する場合には、他の生産手段の爲めに投ずる貨幣價値も相當に多いが常であつて見ると、賃銀資本と他の資本との比較に原づける資本的集約と勞力的集約とは、集約の種類を分つの基調としては、蓋し餘り多くの意義を有せざるものと思はるゝ。

(3) 就中都會の發達が如何に、農村人口を吸收し去つて、肥沃なる土壤に於てさへ、農業人口の比較的に稀疎なるを致すことあるかは、商工業の發達せる文明國に於て、明かにこれを徵することが出來る、但都會附近には園藝が多く發達して、農業が極めて集約に行はれ、その人口も稠密なる場合が多いが、一歩この園藝地域を離るゝときは、その風土の割合に、人口稀疎なるを見るが常である、これは勿論都會の影響の然らしむる所であるとしなければならぬ、これ等の事情は農業を好むと否との民族性にも關係あることで、一を以て律することは出來ないが、輸出工業の大なる發達は勢、農業人口を吸收し去つて、農業人口爲めに稀疎となつて、農業爲めに衰頽に陷ゐること、英國の如き、その最大特著なる例證となすべきである。

(4) 往昔人口の自己制限の多く行はれたる時代に於て、東京の如き大都會に近接する房總の地に人口稀疎で、農業の集約性に著しき影響を及ぼしたることなど、本文の著しき例證とすることが出來る。

(5) 生産手段を資本化し、凡てを資本と見るときは、自家勞力の價値をも資本化するの必要を生じ、勞作經營の概念と一致せざるものがある、故に前述の約束に從ひ、資本といふは現に用ふる貨幣と貨幣を以て購ふたる資料、勞力などを斥すことゝしたのである、念の爲めに註釋する。

(6) 施肥の分量が集約程度の目標となさるゝに就きて、以上の如く、生産技術上、また經濟上、複雜なる關係があるのであるが、而かも肥料の施用量は、それ自身に資本の分量を意味するのみでなく、これを用ふるが爲めに、生産技術上、幾多の勞費の加用を意味するのである、故に、そが集約程度の一の表現的標徵たるには、頗る適當して居るが、小農の場合には大農の場合と頗る相異する所あるを諒としなければならぬ。

(7) 家畜の腸胃の機能によると、人力の作用によると、肥料價値に及ぼす效用如何、これは多少の優劣があると論ずるものがないでもないが、何れにしても左程の差があるべしとも思はれない、將た種々工夫を凝らすときは、反てより良好なる效果を收むることが出來ないでないと信ぜらるゝ、此の如き精到なる手段を盡すことは、自家勞力を多く有する小農に於てのみ、これを望むことが出來る。

# 第十章　生産費

## 第一節　生産費の概念

生産費は資本主義的經濟に於て始めて一種の意義をなすものである、社會經濟の立場よりすると、營利經營の立場よりすると、その間多少の相違はあるが、而かも資本といふ概念ありて、茲に始めて生産費といふ概念の生じ來つたものと見ることが出來やう。

一の生産をなす場合に於て、茲に若干の生産手段たる資本が有用である、この資本は生産手段として用ひらるゝ財の一部であると解せられて居る、社會經濟より見ればこの資本にして現に一生産の爲めに消費せられたる分量、これが即ち生産費であると解せられて居る、私經濟たる營利經營に於ては、經濟主が投下したる資本を以て一切生産費となすが故に、社會經濟に於て定義するのと相同しくない、營利經營に於ては即ち「消費せられたり」と見做すべからざる地代、利息、賃銀、など、現に經營主が資本として投下せるもの、即ちその手を離れて他に移つり去れる部分は、消費せられたる部分と併せて、これを生産費と見做すのである。

資本主義的營利經營に於ては經營の目的は、前章に於て述べたる如く、利潤の獲得に集中せられて居る、而して利潤の内容には賃銀は含まれて居ない、賃銀は當然支出せらるべきもので、筋肉勞力は經營主の提出するものにあらざるを前提としてある、即ち勞力は生産費である、この點に於て小經營は全然異なつて居る、今日の社會に於ては小經營と雖ども、全然資本を用ひざる譯には行かぬ、賃傭勞力を全然排斥することも、出來ない場合がある、而かも純然たる小經營に於ては、そが使用する資本の分量は生産物の價額總量に對しては、小部分に過ぎないが常である、賃傭勞力の分量は自家勞力の使用量に比較して、殆んどいふに足らざる程でなければならぬ、小經營と大經營との間、突然そこに隔壁が生じ來たるでなく、漸くに相近づいて、全然區別の出來ざる階段あるべきは勿論であるが、而かも小經營といふ概念は、そが寧ろ全然資本をだも用ひず、一に自家勞力に依據するを標徴として居るのである故、そこに生産費といふものゝ存在が否定せられざるを得ざるべき道理である。

職人は由來手間賃なるものを認めて居る、某仕事の注文を受け、その貨幣價値を算出する場合に、若し材料を注文主より渡さるゝときには、單に手間賃のみを請求

する、材料を職人側より出すときは、材料價を少くとも表面は原價に見積もるのである、この場合には勿論利潤なるものを眼中に置かぬ、注文に依らず、自己の仕事として、製作に從ふ場合に於ても、その仕事の成果が、その投ぜる手間を相當の貨幣價値化せしむるに足れば、それにて滿足する、即ちこゝにも利潤なるものは考へられない。

小農の經濟はこの種の小工藝と全然趣を同ふし、分類的概念に於て、同一範疇に編せらるべきものとなすべきであらう、即ち小農もその經營上より、相當の手間を得ることが出來れば、それにて滿足し、固より利潤なる區別をその收入の上になすの餘地がない、言を換えて云へば、投下したる資本に對しては、別に報酬を需めないのである。

以上の解釋によつて、生産費なるものゝ概念は、これを審にすることが出來たと思ふ、この概念は資本主義的營利經濟の生産物であつて、非資本主義的非營利經濟には、當箱むることの出來ざる概念である、而かも世往々小農經營内に於て、某種の生産に就きて、生産費の評價を試むるものがある、余はこゝに評價の名を下して、殊更に常用の調査なる語を避くることとした、何となれば、この場合に於ては、假定的計算が主點をなして、調査はこれが補助手段と見做すべき事情を多く包有するからである、余は聊かこの評價の内容に就きて、觀察を下して見やう。

(1)　現今わが國に行はるゝ生産費調査は營利經營に常用の基調に依據するのであつて、これ假りに非營利經營を營利經營化せるに原づくのであると見るべきであらう、或は多くの調査家はこの兩者を混錯し、その間の差別を辨ぜざるにあらざるかとも考へれないでない、但この調査の目的が那の邊にあるか、これが疑問である、又たこの調査の成績を如何に利用するのであるか、こゝにも問題が存する、若し小農經營の爲めの調査であつたならば、營利經營に於ける基調に、無條件に從ふべきでない、目的とする所は寧ろ主點を自家勞力の價値化の問題にあらねばならぬ、小農經營の性質上自ら然らざるを得ないのである、若し夫れ商品生産の場合に、小農經營主と雖ども、多額の資本を投下するの必要ある場合ありとせば、かゝる場合に於て、始めて生産費の調査が必要となつて來るのである、小農經營の性質を辨へず、徒らに生産調査を行ひ、漫にその調査の成績に原づける應用を試むるものあらば、これ害あつて益なきことゝ知らねばならぬ。

## 第二節　生産費の概念

### 附　小農生産物の價値

農産物の價値、就中小農が産出する所の農産物の價値に就きて、マルクスの價値

論と對比して研究することは、頗る趣味あることでなければならぬ。

抑も經濟上の價値が交換的價値であり、これが社會現象に歸因することは、マルクスの主張に多くの經濟學者は共鳴するに相違ない、獨り社會的勞働時がこの價値の唯一の量的決定因子であるといふ主張に就きては、農産物にそれが該當するや否や、これには多くの研究の餘地がなくてはならぬ。

社會的勞働時に就きては、これを單純なる勞力に對するものでなく、經營的勞力その他事務的勞力とも稱すべき各種勞力の作業をこれに當てゝ考ふるときは(他章參照)、かくの如き假定的概念も一種の意味を有し來つて、一般工業的生産物には、必しも當箝まらないでもないかも知れぬ、余はこの種の概念の科學的價値は敢て問ふ所でなく、少くとも環境の大に異ならざる地理的場所に於ては、大概無難に原則として採用することが出來るかも知れぬと思ふ、併ながら農産物の價値構成に當箝むるの原則としては、少くとも多くの變更をこれに加ふるの必要があらう。

農産物に就きてはこれが生産條件たる天然要素即ち風土によつて、大に差異あることを前提として考へなければならぬ、産出せられたる農産物の品質は殆んど同一であると見て差支なき場合に於て、即ち同一の交換價値量即ち價額を生産するに要する所の勞働時に大なる差異あることを見るのが、農産物の生産に於て、一般的現象であるとして不可ないのである。

例へば同一分量の農産物價値を産出するに、甲に於ては風土の良好なるが爲めに、百時間を要するに對して、乙に於ては二百時間を要するが如きことは、極めてあり得べき事實である、風土が不良である場合に於ては、勞働時を要すること、その良好である場合より比較的多きは原則であるのである。

風土の差異が此の如きいはゞ、不公平を勞働者の收得に致すことは、自由競爭の流通經濟に於ては、小作料がそれ相當に異なることによつて相殺せらるゝのである、彼のリカルドーの小作料論の如き、この般の事情を審かにするものであらねばならぬ、此の如き經濟的現象に原づきて、農産物の生産に於ては、勞働時の效果が平均せらるゝの傾向あるものとなすべきである、この種の事情と工産物生産の事情とを比較對照するときは、その間多少の相違あることを發見するのである、工産物の生産に於ては、環境の事情の影響は農産物に於けるが如く、大ならざるが爲めである。

更に飜つて資本主義的營利經濟社會を離れて、非營利的勞作經濟に眼を轉ずる

ときは、農産物生産に關する事情の頗る相同からざるものあるを發見しなければならぬ、小作の場合と雖ども、小作料は勞働時の公平的均平を介くること營利經營の場合の如くならざるが常である、小作料の場合に於て述べたるが如く、その額はわが國に於ける多くの場合に於て、生産量の比率によつて定まるのであるとすれば、こゝに相當の不公平が場合によつてなくてはならぬ、良好なる氣候又た土質に於けると同一なる歩合を以て小作料を拂ふ所の不良なる風土は、頗る不利益なる狀態に居らねばならぬ、不良なる風土は同一量の生産價値をなすに、比較的多數の勞働時を要するからである。

更に進んで自作農の場合を考ふるときは、益々以て、同一勞働時が同一量の生産價値を擧くるに、その差等の甚しきものあるを發見するに相違ない。

これ等の事情は農産物價値の量的決定因子として、勞働時が唯一のものにあらざることを、肯定するものとなすべきではなからうか。

年柄の農産物産出に對する關係は、また一種の現象を呈するものであらねばならぬ、不良なる年柄に於ては、平生に比して勞働時を要すること、比較的に多い、而してその價格が果して、この勞働時の增加と比例するであらうか、これに反して豊作に際する價格の下落が、これと對比して、適當なるを得るであらうか、而して年の豊凶といふも、一定の區域に於てさへ、各經營又は各區地が同樣なるを得ざるが常であるを思へば、農産物生産の場合に於ては、マルクスの平均的勞働時なるもの、これが價格の構成に就きて、勞働價値を論ぜる所に益々多くの變更を必要とするではなからうか。

斷つて置く、マルクスの主張は資本主義的營利經營の場合に於ける商品に就てのみ該當を得るもので、非資本主義的勞作經濟には否らずといふものがあらう、然らばこれ社會的勞働力又た勞働時なる概念そのものゝ普遍性を否認するものであつて、マルクスの主張の科學的價値が爲めに疑はしくなるを免れないのではあるまいか。

われは更に疑ふのである、農産物と工産物との比較に於て、果して同一勞働時が同一價値を生産するのであらうか、資本や勞力の融通が果して勞働時を基準として、かれよりこれに移轉するを原則とするであらうか、或は實際に於て如何にして勞働時の比較計算をなすであらうか、併しマルクスも産出せられたる物品の異なるに從つて、同一勞働時が同一價値を生産するものにあらざるを說いて居れば、農

産物と工産物との生産に於ける勞働時は必しも、均平なるを要せずと、註釋するであらう、而かも同一農産物に於ての不均平は如何に、これを解釋せんとするであらう、所詮はマルクスの研究は工産に偏して、農産は多く疎外して居る、農産の生産經濟と工産の生産經濟とを同一視せんと欲するが如き、頗るその當を得たるものにあらずとなさねばならぬ。

更に進んで考ふれば、貨幣によつて財の價値が代表せらるゝ時代に及んでは、經濟の事業は極めて複雜化して、生産上要する所の勞働時の比較の如き、殆んど賣買（貨幣の媒介による交換）の際に考慮の内に措かれざることとなつた、また去る計算は必要もなく、また可能性にも乏しくなつた、殊に異質の財間に於て然りである。

余は例へば通貨の增加が、別に公表せらるゝことなき場合にも、それが如何に速かに物價の上に影響を及ぼし來たるかを見るとき、如何に社會意識の鋭敏なるかに驚歎せざるを得ないのである、余は或種の金肥の價格の評定が如何にして、かくも正鵠に幾きを得るかに驚かざるを得ないのである、明治中葉の頃、駒場農學部の分析室に於て、例へば魚肥を分析の結果、その含有要素の分量と、これが價格との間、その差等が如何にもよく一致し、價格高きもの程、その含有要素も亦たそれ相應に豐富であることを示して居る、元來肥料效用の程度は特に科學的試驗を經るにあらざれば、これを確むることの出來ないものである、隨つて優劣の差が左程著大ならざる肥料に就きて、これが價格に差等を附するが如きは、科學者より觀れば、如何にも困難ならざるを得ない筈である、而かも農業者側よりでなく、寧ろ商人側に於て、頗る正確なる評價を以て、價格に差等を附し得たるは、殆んど諒解に苦まざるを得ない程に神秘的であると思はねばならぬ。

この種の評價の標準は疑もなく生産勞働時によつてゞなく、使用價値に重きを措いて居るのである、然り、肥料の貨幣價値は一般に客觀的使用價値を大なる要素とし居るのである、而かも學者はこの價値の評定に往々誤謬あることを指摘して居る、例へば現時鑛物肥料は有機肥料に比して、多く比較的に廉價である、これ農業家が一般にこの事實に無理解であるからであると、而かもわれ〳〵經濟學の側よりいへば、有機肥料は需要が多い、需要の多き所以は鑛物肥料よりも、有機肥料が一般に喜ばるゝからである、その原因として、有機肥料が智度低き農業家には使用し易く、また危險の度も少いなどの、各種の理由あるに原づくものとなして不可ないであらう、然らば肥料の貨幣價値は單純なる使用價値によつて定まるものにあら

ざるを知ることが出來やう。

併し又た如何に考へても、農民の知識の不足よりして、一種の貨幣價値が定まることあるをも想はねばならぬ、例へば大豆粕が少しく下落するときは、これと性質の頗る相異なる所の肥料にして代用に適せずと信ぜらるゝものにさへ、代ゆるに大豆粕を以てするの傾向が著しく生じ來たり、大豆粕の需要が大に加はゝるが如き、これである。

また農産物の價格如何によつて、肥料を用ふる分量に、大なる相違がある、農家は農産物の一定の分量を標準とし、その價格丈けを肥料購入に充つるを通常とするからである。

われ〳〵が乃ち茲に農者の購買力が需要となつて、肥料の價格が騰貴すべきを知ることが出來、また肥料には種々の種類があり、農業家は自らこれを製造することの出來ざるも少からざるが故に、比較的に高價を出して、これを購入するが如きも、往々これあることをも、考慮の内に容れねばならぬ、自製肥料はこれを補ふに金肥を以てするときはその有效率が增加する、また作物によりそれ〴〵特效の金肥ありて、代用物の得難き場合がある等の如きこれである。

これ等各種の事情と農産物及びその生産手段の價格に考へて、今日の經濟時代に於ては、稀有價格、特占價格などが認められ、需要供給などの概念を以て解釋することが、現時の財の價格を說明するに、最も都合よきものなるを知るのである、由來科學上の說明は決して決定的のものでなく、最も說明に都合よき概念が、當時に於ては科學的に正しいと認めらるゝに過ぎないのである。

凡そ價格は社會意識の定むる所であつて、それが公正なる價格であり、客觀的價格であつて、主觀的立場より、これが正當であるや否やを論ずべき限りでない、これはこの場合、特に附言するの必要ありと思ふ。

(1) 主觀的客觀的勞働價値の相異を考へ、生産物の價格より割出せる勞働價値を考慮の内に置きて研究するとき、科學的指導原理として、社會勞働及びその時間なる概念を採用することは、如何にも左支右吾、これが應用に困難を見なければならぬ、殊に小農經營の場合を經濟現象の中に入れて考ふるときに然るのである。

## 第二節　生産費の内容

### 一、生産手段に關する評價

生産技術よりの觀察に原づけば、生産手段には貨幣竝に現に貨幣價値を以て購

ふたるものと、然らざるものとの區別がある、貨幣を以て購ふたるものに就きては、別に詳論の必要がない、これに反して、その然らざるものに就きては、研究の價値が充分にある。

貨幣にもあらず、又た貨幣を以て購はれたるにもあらざる生産手段は、先づ以て廣き意義による自家生産又た自製であると見るべきである、殊更に廣き意義によると銘打たのは、自家勞力(及びその他の勞力)によつて、採集したる物料も、その他或種生産の副産物も、その中に含ましめんことを欲したので、採集を以て生産とするは、廣き意義に生産と解釋したるものとする方、意義が明瞭たるを得べく思はるゝからである、副産物の如きはこれが産出を嚴格の意義に於て生産とは固よりいふべきであるまい。

自家生産は又た評價の關係上、市價あるものと、市價なきものとに區別せらるゝ、市價あるものは當時の市價に原づきて、その貨幣價値を評定するに於て、多少の假定は必要とせらるれども、先づ以て殆んど無難にこれを行ふことが出來る、市價なき物料に就きての評價、これが根柢的の難解問題に多く直面して居る。

市價なきものとは、現に市場に於て賣買せられざる物料を意味するのである、何が故に、市場に於ての賣買がないであらうか、これには種々の事情があるに相違ない、例へば自家生産が主であつて、市場に於て需要者を發見することが出來ないといふが如き、その物料が餘りに運搬の勞費を要するが故に、賣買上大なる故障あるが如き、即ちこれである、その理由は兎も角も、既に市價なきものである、而るをこれに對して適當なる市價を評定せんとする、果してそれが合理的根柢を有して居るであらうか、喩へば人間が呼吸する空氣に向つて、これが市價を評定せんとするが如き、石灰窒素の原料たる空氣中の遊離窒素に向つて同樣の試みをなさんと要するが如き、果してそれに可能性と合理性とを認むることが出來るであらうか、市價なきものは價格なきものである、價格なきものに價格を認めんとする、これ根柢的間違でなければならぬではあるまいか。

先づ第一に問題が起つて來る、經濟學者が算出せんと試むる、即ち評價せんと欲する、その價なるものは、何ぞやといふこと、即ち是れである、それが所謂使用價値であるか、交換價値であるか、こゝが第一の疑問である、即ち價値といふ經濟學原論に使用せらるゝ所の術語に、これが解決を求めなければならぬ。

使用價値なるものは疑もなく、經濟學上の價値ではない、空氣の如き、使用價値の

至大なるものも、經濟學の研究對象とはなつて居ない、所謂經濟財ではない、經濟財ならざるものに、價値の存在が問題となるべき道理がない、即ち經濟學上の財は交換價値を有する物料であつて、價値は交換價値であると率直に述ぶることが出來やう、併し交換價値その物は客觀的評定が困難であつて、而かも今日の資本主義的營利經濟社會に於ては、貨幣なるものが價値の標準として一般に用ひらるゝものであるゆゑ、價値であると云へば、直に貨幣價値即ち價格であると、解すべきである。

一歩を進めて、價値の內容に立ち入つて、これが構成分子を吟味しなば、廣き意義に於ける使用が、その中の重要なる一つを形造つて居るを疑はない、而かもそれが幾何の重要度を有して居るかは問題でなければならぬ、使用なきものに價値が存しない、これには何等疑問はないが、而かも使用あるものが、悉く價値を有せざるも、亦た事實である、然らば類推の方則に原づきて、使用は價値の要素にあらずとなすことも、出來るやうに思はるゝ、否、それが至當の結論であるかの如く思はれるのである。

使用價値が物價の構成に向つて、左程の重要度を有することなしとせば、必ずや所謂生產價なるものに、眼を轉ぜなければならぬ、而かも生產價を以て、その生產物の價格の標準となさんとする、これ自己の生產資料としての價値を、自己の簿記的計算の一要素とせんとするの目的の爲めにするには、敢て不都合なき所ならんも、而かも生產物の價格の構成上より觀察するの標準としては、その概念の根柢に疑なきを得ないのである。

我々はこの問題の解釋に向つて、物價構成の根本的原理に回首しなければならぬ、工業品の價格はその生產價格に近接するの傾向を有するものと學者は論じて居る、而かもこれ自由競爭の完全に行はれ居る場合に於てゞある、農產物の價格は最も不良なる條件を以て生產せらるゝ場合の生產費に支配せらるゝと說かれて居る、これ亦た農業が自由競爭の下に經營せらるゝ場合を前提として居るのである、その他特種の性質を有する物財もある。

これ等の事情を考へ、更に進んで今日の商習慣に就きて、細かく研索するときは、農家が自己生產する所の物財の價格を、これが生產價の標準によつて、評定するの果して妥當であるか否かを疑はなければならぬ、殊に我々が現に取り扱はんとする所の生產物は、農產物である、農產物の價格が無條件に生產價に支配せらるゝものでなく、且つ同一生產費を以てして生產するも、その生產品の價額が同一でなく、

殊に生産手段としての使用價値としては、尙更大なる差等あるを免れないのである。

使用價値と生産價値との關係、以上の如くなるは、肥料、飼料などを例としなば、最も明白なるを得るであらう、自己生産のこれ等物料の技術上の價値は、その含有要素の分量と關係するものであつて、これに要したる生産費とは、その關係が左程密接でないのである。

殊に副産物の使用價値と生産價値との關係は、最も有趣味なる觀察をこれに下すの價値があるかの厩肥に就きて見るに、生産價なるものは家畜の飼養との相關的分量に該當する、家畜飼養に純收益がなければ、その差額丈けが即ち厩肥の生産費を形成する、これに反して家畜飼養が相當の純收益を擧ぐる場合には、生産價は零若くは負數を以て示さるゝことゝなるのである、而かもそれが零若くは負數を以て示されたればとて、その使用價値は生産價が正數を以て示さるゝ場合と何等の相違がないのである。

無市價物財に對する評價の方則に就きては、我々はこの上に進んで、これが研究をなすの、この著述の範圍外にあるを思はねばならぬ、我々の研究は非營利經營たる小農に對する生産費を主眼とするからである、我々が以上の研究は營利經營に於ける生産物に對する評價の方則に就いてゞある、小農經營に就きては、使用價値を標準としての評價法ならば、問題となるべからんも、生産價を標準とする場合の問題には全然異なりたる觀察を必要とする。

抑も營利經營に於ける生産費には、賃銀なるものが重要なる位地を占めて居ることは、既に述べたる所の如しである、然るに非營利經營たる勞作經營に於ては、自家勞力がある、而して自家勞力は生産費の構成分子たるものでない、故にこの場合には賃銀は全然編入せざるか、若くは少量を編入すべきに過きない、然らばこの場合の生産價は營利經營の場合と大に異なる所がなければならぬ、かくてこの場合の生産價は生産物の評價標準としては全然意味をなさぬ。

(1)　小農が生産する所の物品に就きては、評價の場合に全然二種に分たねばならぬ、賣出すべき、即商品化すべきものに對しては、市場の賣値段を基調とし、自家消費に供するものは、買値段を基調とするが至當であらねばならぬ、世間動もすれば同一基調に準據して凡ての生産物を評價せんとするは誤りである、かく小農の生産に二種の品物があるとすれば、小農經濟を以て或は消費經濟であると見るの、妥當にあらざるを謂はねばならぬ。

## 二、勞力の評價

現今往々行はるゝ所の生産費調査に於ては、小農者が生産手段として多く用ふる所の自家勞力が先づ以ての問題であらねばならぬ、抑もこの生産費調査は營利經營のそれに倣つて行ふ所のいはゞ類推の意味を以てするものと見ることが出來る、然るにこれが爲めに無市價の自家勞力を如何に評價すべきかに就きては、多くの苦心が拂はれて居る、これに就いての研究は就中最も有趣味であらねばならぬ。

抑も今日の勞働者の勞力に對しては、賃銀なるものが、勞力市場に相場を有して居る、即ち勞働者の勞力には客觀的貨幣價値が存在するのである、この客觀的貨幣價値は勞働の種類によつて、頗る大なる差等がある、この差等には勞働者自身の主觀的分子が多く存して居ると見ることが出來やう、技倆を要することが多いとか、特別の努力を要するとか、不愉快に思はるゝとか、危險に感せらるゝとか、健康に害あるとかいふ勞働の種類は他に比して、相場が高いのを原則とする、勞働の機會が年間に少いといふ事情も亦た相場を高からしむる原因となつて居るのである。

此の如く觀察し來たるときは、自家勞力の評定貨幣價値を計算するに、如何なる種類の勞働と比較するを至當とすべきであらうか、そこに至難の問題が存して居る、農業勞働であるといふことは云ふを待たぬ所であるが、雇傭勞働者とは他人に雇使せらるゝ所でないといふ根本の相異がある、縱ひ假に雇役せられたるものとし、農業勞働者と比較せんとするも、農業勞働者にも種類がある、年雇、臨時雇、これが二大別である、而かも自家勞力と賃傭勞力との主觀的立場が異なる丈け、二者孰れに近しとして、評定の標準を定むべきであらうか、余は既に兩者を吟味して、比較上相異の點が少からず、その隔りの大なることを發見したのである、而かも强ゐてこれが比較評價をなさんと試むるも、そは當然極めて獨斷的の隨意判斷たるより外はないのである、これが價値の期節的相違を認めんと欲するに至つては、問題となすに足らぬと思ふ。

由來學者は賃銀に向つて、主觀的立脚點に原づきて、その當然的貨幣價値を決定せんと試みたるが多い、これを個人の立場よりすれば、自己の生活に必要なる丈けの資料を賃銀に求めなければならぬ、これ當然の事であるが、一方需要者側は資本主義營利經濟界の經營より見て、その經營が有利に成り立つ丈より以上に賃銀を

出すことを好まぬ、而かもそこに需要と供給との關係上、相場が自ら生じ來たるのが、今日の經濟界の常態なれば、その常態を全然無視して、供給者も需要者も、勝手に我儘なる行動をなすことは許されないのである。

賃傭勞力にはかくて客觀的相場が、その貨幣價値の上に生じて來る、若し生産費調査に於ける勞力の貨幣價値を賃傭勞力と比較し評定せんと試むるならば、寧ろ斷然その勞力を賃傭勞力化して、即ちこれに賃銀を當篏めて、計算するがよい、この賃銀も日雇の場合のものと假定するがよい、生産費調査がその調査する物料の生産は資本主義的營利經營に於て行はれたりと假定するものたること、前述の如しであるからである。

併しかくすることによつて、事の實際と大なる隔たりを生ずるの非難あることは豫め覺悟しなければならぬ、何となれば若しこれが現に營利經濟に於て生産せられたものであつたならば、第一經營の方法が全然異なつて、勞作經營の如く多數の勞力を使用せないであらう、而してまた多くの場合に於て見るが如く、純生産の極めて僅少なるに滿足すべきでない、況んやそれが絶無乃至負數を示すに於てをやである、この般の理實に原づきて、生産費調査が勞作經營を營利經營視することの、根本に於て容すべからざる無理を含有するものたるを諒しなければならぬ。

そこで勞作經營に依つて生産せられたる場合の生産費調査に於て、生産手段たる勞力の貨幣價値の評價が特に試みらるゝことが往々ある、全然これに日雇賃銀を當嵌むることなく、年傭勞賃若くは兩者の中間を執るが如きの類これである、而かも余が既に指摘したるが如く、自家勞力と賃傭勞力とは根底に於て、即ち實質に於て相異あるものである故、その貨幣價値と賃傭勞力との比較によつて評定すべき理由が全然ないのである。

今日の所謂勞働者の勞働はマルクスのいふ社會的勞働である、この社會的勞働の源たる勞力である、商品を作り出しても出さなくても、自家勞力はこの種の社會的勞力とは全然相異なるものたること勿論である、而かもマルクスの如きは最も明白に勞働者は勞力なる商品を勞働市場に提供する人格であることを論定して居る、而してこれと資本家とを對抗の位地に置いて、筋肉勞働者、即ち所謂血と肉とより外に所有せざる筋肉勞働者であるとなして居る、從來の經濟學者も亦た勞働者に一種の限定せる意味を附して居り、賃傭勞働者であるとして居る、勞働者の受け取る所の報酬は賃銀であり、賃銀を報酬として受け取るものが勞働者(!)として

居る。

この種の術語は最早大なる變更を要するものではなからうか、俸給を受け取るを以て役員と目せらるゝ階級と、賃銀を受け取るを以て勞働者と目せらるゝ階級と、何處に截然たる區別があるであらうか、同樣に、精神勞働者と、筋肉勞働者との間の區別は截然たり得ないものたることを知らねばならぬ、資本家といふは實は企業者といふべきものであり、企業者は今は往々にし無形人格であり、企業の經營に當るものはこの場合に於ては從業者であつて、勞働者と全然區別すべからざる階級である、而して經營的勞力は一種の勞力と見做さなければならぬ、勞力の種類を分てば、質に相異はあるが、勞力なる同一範疇内に編すべきものたると論を待たぬ。

自家勞力なる一種の勞力は前述せる如く、賃傭勞力とも又た賃傭勞働者と同一範疇内のものと考ふべき從業者の階級の勞力とも異なれる一種の勞力である、その勞働は、質に於て、經營的勞力と勞作的勞力(かゝる語を用ひ得べくんば)とを兼ねたる一種の勞働と、概言することが出來る、この意味よりして、これが貨幣價値を賃傭勞働者と比較して評價すべきものでは、斷じてあり得べきものでない。

賃傭勞働者の最低限の賃銀は廣き意味に於て、勞力の生産費に相當しなければならぬ、自家勞力の收得も(一日でなく一經營又た若干經營年度に通算して)亦たその生産費以下ではあり得ない、反てまたその以上では若干程度まであり得るもので、その分量は客觀的に評定し得ないのである。

勞力の價値に種々の等差あるべきに論はない、筋肉勞力にも、精神勞力にも、而して又たそれが環境によりても、大なる差等がある、この環境を、姑く經濟要素を除き、自然的事情に限りて考ふる、この環境は就中農業に於て、所謂風土(地勢などをも籠めて)に於て、非常に相違がある、從つて異なつたる風土に於て勞作するときは、その效果に非常の相違がある、この效果は收得せられたる所の物料の貨幣的價値によつて、その貨幣的價値が表示せらるゝ、これが即ち自家勞力の價値である、賃銀に比較すべき貨幣的價値である。

かくて同一の勞働量を以てしても、その效果に非常の相違があり、その貨幣的價値にも從つて大なる相違がなくてはならぬ、これに加ふる勞力その者の質とその若干迄自己の隨意的變更をなし得る勞働量にも、大なる徑庭の差がなくてはならぬ、これ等の差異も、資本的營利經濟に於ては、その制度が容す所の競爭によつて、自然に平均せられて、その客觀的相場が生ずるのである。

農業に於ては實に小作料なるものが存する、風土など凡て好條件を有する土地はその小作料自ら高價である、經營者の特別なる技倆さへも、小作料の爲めに、その價値を奪はれ、結局かの利潤に、原則として客觀的相場が生ずるものと見られて居る。

勞作經營の行はるゝ經濟社會に於ては、制度が全然異なつて居り、小作料は一般に自由競爭によつて決定することなく、その構成原理も全然これと相異なつて居るものなること、後節に述ぶる通りである、かくて自家勞力の價値は主觀的分子に左右せられ、環境の支配をも受け、かの利潤に見るが如き、客觀的相場を生ずることは、狹き區域内に於てさへ、あり得ざるべき事情にあるのである。

賃傭勞働者の賃銀なるものが、勞力の生産費を最低限度とせざるを得ざるが如く、自家勞力の收得もその生活料の最低限度以下に下ることが出來ないことは、前述の如しである、而かも最も不良なる狀態の下にある所の自家勞力は殆んど饑餓の狀態にある、この狀態に居るものを自家搾取によつて説明せんと試むるものがある、これ蓋し資本家的搾取の意味を延長せるものであらうが、併し生活費の爲めの最大的努力は賃傭勞働者にも同樣であり、かくの如き饑餓的狀態は必しも收得の不足によつてのみ起り來たるものでないことは、注意し置くの必要がある。

自家勞力の客觀的價値として、生活の最低限度を採用すべき試み、これ又た頗る具體的困難を感じなければならぬ、自家勞力の所持者の經濟的狀態が非常に相違するからである、生活の程度なるものが、亦た大なる關係をその間に及ぼし來たることも、考慮の内に置かねばならぬ、而かも當時その社會に於ける生活程度に準據し、普通の場合を目標として、大體の生活最低限を評定し、これに要すべき最低限度の收得を評定し得られないでもなからう、但この評定が頗る獨斷的隨意的の嫌あるべきことは、免るべからざること勿論であらねばならぬ。

併し自家勞力の貨幣價値の評定にかくの如き最低限度を基準とすることは、少くともかの生産費調査の場合に於ては、勿論その當を得たるの事とは考へられぬ、それより最高限の收得まで種々の階級あるべきが爲めである、或は最高收得と、最低收得との間の平均を以て、自家勞力の平均價値として採用すべきであらうか、かかる場合の平均價値なるもの、果して何等の意味を有するであらうか。

然らば自家勞力の收得に原づきて、これが客觀的價値を求むることは、理論上、又た實際上、その道にあらざることを思はねばならぬ、或は自家の主觀的評價に準據

すべきであらうか。

これを賃傭勞働者の勞力價値に見るも、主觀的立場よりすれば、自家評價が相當の重さをその相場の決定上に有して居ることを思はねばならぬ、極端なる事情の下に於ける、極端なる競爭に原づける、已むを得ざる程度の最低賃銀は姑く措き、賃銀の相場は殊に勞働組合の勃興と共に、勞働者側の主觀的分子が相當の勢力をその上に有することゝなれるものと見なければならぬ。

わけて自家勞力は取捨頗る自由の意思によつて、その方向が定めらるゝの傾向を有する、今日農業家が自家の業を捨てゝ、他の職業に就くものが多い、その原因には單にその業と、竝にその居處環境の厭惡もこれを擧ぐることが出來るに相違ない、而かもその厭惡の原因には經濟的分子が重きをなし居る場合が多いに相違ない、農業の收得が少く、生活が他に比して低いといふ、この觀念が農業厭惡の動機たることは、現に常に見聞する所である。

農村若くはその附近に工場が起り、土木工事が企てらるゝなどの場合には、著しく自家評價の發現が認めらるゝ、工女として、職工として、勞働者として、その得る所の賃銀收入は、農業に勞作するが爲めに得る所の收得に比して、著しく高價なりとし、茲に相率ゐて農業を捨つるの現象を見ること、決して珍らしき事でない、總じて農業忌避、農民離村の現象が工業の勃興と共に、到處の現象として問題を惹起するのである、その原因を一に自家評價の結果に歸するが如きは、一義的觀察の嫌なきにあらざれども、亦たその一面より見て、正しき觀察たるを失はないのである。

この種の自家評價は凡てこれを間違なき正當の計算なりとなさば如何であらう、賃傭勞働者の得る所の賃銀收入と、自家勞力の圃場に於ける勞作的收得と、その價値上の比較は決して容易でない、賃銀的收得は全然金錢收入であつて、農作的收得は往々にして一部金錢、一部現物である、その他、兩者の間に各種の相違あることは、嚮きに既に相當に述べたる所、今更これを繰返すべきでない、此の如き相異の點多き、否、根本的相異ある兩者を比較するに於て、その比較の頗る當らざる場合多きは、論ずる迄もない所、況んや知識の程度低き農民がこれを行ふに於てをやである、必ずや多くの場合に於て皮想的觀察が比較の基準をなし居るべきを疑はない、而かも事實は事實として、これを容認する外はない。

然らば生產費計算の場合に於て、上叙の自家比較を以て、自家勞力の價値評價の基調となすべきであらうか、いふ迄もなく、かくの如き漠然たる自家評價の主觀的

價値を以て、評價の基礎となすべからざるも亦た審かでなければならぬ、學者の往々信ずるが如く、自家勞働價値がかくの如き自家評價に引きずられて、漸く客觀的性質を帶び來たるの傾向があるとしても、これによつて賃銀率の比較によつて、自家勞働の價値を評價せんとの試は、非科學的としてこれを斥けねばならぬ。

## 三　小作料の評價

小作料の評價に就きても、勞作經營の場合には、これが營利經營に於けると同樣なるべからざるは、第三章に於て述べたる所の土地に關する概念によつて、これを諒とすることが出來やう、營利經濟の場合と雖ども、小作料の評價は決して容易でない、凡そ一般の物料には同種同品等のものが多く存する、こゝに價格に相場なるものが生じて來る、これに反して土地又た農場は個々價値に相違がある、隨つてその小作料に各土地を通じて相場なるものがあり得ない、即ち個々別々に評價の必要が存する、而してこの評價は特別の標準に依據するが普通である。

小作經營をなさんと欲するものは、先づこれが經營の假想計畫をなし、假想の收支計算の下に、小作料を除きたる經營費を粗收入より控除し、殘餘の金額に就きて、幾何が小作料として地主に提供して差支なき分量であるかを考慮する、即ち茲に假定の純收益即ち利潤がある、この假定の利潤を右殘餘の金額より控除すれば、殘數は即ち小作料として提供し得べき金額となる、自作農の場合であつたならば、年度末收支計算の結果、剩し得たる所の純生產に就きて、豫定の純收益即ち利潤を控除し、殘數を以て小作料と假定するのである、但この計算に於て農場又た土地の負擔はこれを小作料内に含ましむるものとするが、普通としてよい。

かゝる計算は大抵一個の農場としてこれを行ふのである、然るを今一生產の爲めに、生產費を算出せんと欲する場合には、便宜按分的にこの小作料を配當しなければならぬ、但この按分配當が果してその當を得易きものと思はゞ、これ大早計の判斷たるの譏を免るゝことが出來ないのである。

自作經營の場合には、小作料を生產費の項目に加ふる代りに、土地資本の利息を採用するを可とする論者もあるやうである、この場合には農場又た土地が負擔する所の公私凡ての費用は、別にこれを小作料以外の生產費として計算するのである、この意見はこれ等負擔を籠めたる小作料を以て生產費となすのと、何等根底的の相違あるものと見るべきでなからう、蓋し農場又た土地の收益評價に原づける

資本價値は諸負擔を控除し得たる純收入を利率にて除し得たる所、即ち資本化の金額に外ならざるからである。

勞作經營に於ける農場又た土地の小作料はこれが評價を如何にすべきであらうか、そが營利經營に於けるとは全然相異ならざるべからざるものたること、勿論であらねばならぬ、この經營に既に利潤を認めない、故に收益を利潤と小作料とに分つこと前述の如きことはなし得られない、勞働の效果、即ち經營の效果は、幾何を以て適當とすべきか、いはゞ客觀的效果といふが如きは、あり得べき所でない、即ち理論的に小作料は小作人が拂ひ得る分量、又た拂はんことを敢てする分量、これが小作料の適當分量であると考ふるより外はないであらう、事實に於ても、小作料は所謂習慣によりて分量の定まるのが、小農經營に於ては普通に見る所である、これその證である。

小經營なる小作農が自由に小作料の取極めをなし得るものとしなば、少くともわが國の如き事情に於ては、各經營者の主觀的立場よりして、種々の相違が生じ來たるものと見なければならぬ、こゝに最も注意を要することは、この場合は多く一農場の貸借でなく、一區地毎の貸借であることである、一農場が一經濟單位として獨立し居るならば、その小作料の最高限度はそれを控除せる殘額が少くとも經濟者の生活資料の最少量を供給するに足る丈けなければならぬ筈である、愛爾蘭土に於て曾て見たるが如く、その收量の金額凡てを提供しても、尙ほ以てその約束額を充たすに足らぬといふが如きは、これ變態であつて、常理を以て論ずべきでない、但技倆が經營者各々相均でなく、又たその家內の事情も相同からざるゆゑ、生活資料の最少額に少からざる相違あるべきこと勿論でなければならぬ。

區地の貸借が行はるゝ場合には、小作料として提供せらるべき最高限度は勞作的純收得よりこれを控除し、殘る所がその勞作の收得として相當額に該當するを要すること、勿論でなければならぬ、而かもこの相當額が幾何なるべきか、經營者の事情によつて、非常なる相違あるべきものでなければならぬ。

一區地に就いてゞあつても、それを全經營の一部として考へなければならぬことは、いふ迄もない、而かも全經營それ自身に大なる相異がある、純耕種的なるもあり、混同農的なるもあり、それが副業を採用するの種類、その分量、副職業を採用すると否と、それが種類と分量、農業が反て副業的に經營せらるゝ場合もあり、この場合には本業の種類並に分量、これ等百般の事情は區地經營に對して要求する所が、決

して同一ではあり得ない、例へばその經營の爲めに投ずる勞力が主業的なると餘暇的なるとには、各場合の要求に相當の隔りがなからざるを得ないのである。

一區地と經營地全體との關係を見る場合に、經營全體の土地が均質の場合もあれば、異質の場合もあることを考量の中に置かねばならぬ、均質の場合は專ら量の關係であり、異質の場合は質と量との關係である、例へば田地ばかりの經營で、而かも稻作のみを耕作するが如き場合は、單に量のみの關係である、尋常の畑ばかりで、穀菽の栽培に專用するとき、亦た同樣である、田と畑と、又た畑のみにても、特用作物の適地が混じ居る場合の如き、これ質と量との關係を持ち來たすのである。

これ等、經營地の質と量とに對する關係に於て、問題の區地の小作料は如何に評價すべきか、この問題は如何にも複雜であつて、拙著「合關率」に於てその一端に論及せる所、こゝにこれを詳叙するは、この著の範圍内にあり得ない、所詮は自由競爭によつて、區地の小作が行はるゝ場合ありとせば、同一區地と雖ども、經營者の主觀的關係に於ける小作料には參差として異同あるべきである。

更に一歩を轉じて考へるに、小農經營に限りて、歴史的習慣的の小作制度が往々發見せらるゝ、原始的隷屬的に近き小作型式が今尚ほ我國にても存して居る、勞力提供を以て小作料とするが如きの類はその一に數へることが出來る、分益經營の如きは共同經營の形に於て、大農經營にも或は見出さるゝことなきにあらざれども、最も多きは小農經營に於てゞあつて、この場合に於ては小作經營の一種であると見做すべきが蓋し常であらう、かゝる場合の小作料は習慣的契約に準據せずんば、如何に評價すべきであらうか。

更に物納の小作料がある、大經營に於てもそが未だ資本主義經營に進まざる時代に於ては、物納の場合を可能とすれども、一般に金納を以て、通有の型式となすべきである、小農經營に於ては、往々にして物納が行はるゝ、生産する所の物料が單一である場合には、その物料の價格の變動の利害を地主と分擔する上にも有效であり、その他種々の理由に據つて、物納が尚ほ適當と認められ、これが往々にし實行せられて居る。

物納の場合に於ては、年の豐凶などによる生産の天災的減却によつて、小作料の減免が行はるゝ、大農的營利經營は個人主義に基づくものであるゆゑ、その經營に多少の支障を來たすの虞ある物納の如き、尚ほこれを喜ばぬ、況んや溫情的、恩惠的、友義的贈與又は共同經營的慣行を以て目すべき小作料の減免に於てをやである、

資本主義的營利經營はその損益の負擔は全然これを經營者の雙肩に任ずるを一般の主義とするものであつて、隨つて小作料の如きも、所謂定免が當然の型式であらねばならぬ。

物納には生産物の價格の變動に原づきて、貨幣價値を以て評價すべき小作料の數量に年々多少の相異を見る、況んやこれが減免の事が幾年かに一回行はるゝことあるに於てをやである、かゝる事情の下にある小作料の評價を、營利經營的原理に準據して行はんとするは、その當を得たるものにあらざるを思はねばならず、反て亦た疑もなく習慣的數量に計算の基礎を置かなければならぬのである。

土地の所有者側より見れば、今日の資本主義經濟に於ては、小作料は土地資本の利息と見るべきである、勿論この小作料には一般に多くの負擔が籠つて居る故、資本の利息と見るべきは、これ等負擔を控除して殘れる純小作料に該當するのである、經營者側よりは去る觀察はこれをなすべきでない、かれの手に在つて、かれの手に於て經營せらるゝ間は、かれの土地はかれの資本ではない、かれの經營の基礎的手段であつて、またかれの生産手段である、小作して經營すると、自作して經營すると、經營の效果は決して同樣でない、一は心理作用の相違がこれを然らしむるのである、かれの經營は利潤を生じない、隨つて利潤を引き去つたる後に殘るべき小作料なるものはあり得ないのである。

たゞ若し强いて小作料を自作の場合にも、假定せんとならば、生産力やその他環境の相均しき土地の小作に附せられたるものと、比較してこれと同一の小作料を認むるより外はない、精密なる地位査定の方法を用ひなば、由つて彼我の比較は餘り廣からざる範圍内の地方に於ては、相當の程度まで誤差少きことを得るの望があらう、これ勿論、彼我の經營方法は同樣であるとの假定に出でゝ然るのである、かの「我物」といふ心理作用の影響も亦たこれなきものと假定して然るのである、彼の生産費調査の爲めに、自作小經營の場合に、假定する所の小作料はかくて得たる比較數字より外はないと思はねばならぬ。

(1) 農務局大正十年小作慣行調査

(2) 小作料には地方によつて、自然に定まれる相場がある、收穫高に對する一定歩合の如きがそれである、この相場外れに低廉なる小作地ある場合には、小作側の競爭によつて、直に權利金が生じ、それ丈け、小作料が相當の相場に引き戻さるゝ譯である、かくて小作料低廉の地には、地主と權利主と、二重の持主あるの狀態あるを常とするのである、かくて適當なる小作料の引下げは、現に小作し居るものゝみに利益を與ふる譯である。

## 四、利息の評價

利息の評價は通常一般利率を標準とする、これ經營者の所有資本は縱ひその經營に投下せずとするも、國庫債券の如き、極めて安全なる有價證券化し置けば、尙ほこれ丈けの收入はこの資本によつて、これを獲得することが出來得るの望あるからである、資本主義經濟に於ては、この評價方法は別に大なる異論を容るゝに足らないであらう。

小經營の場合には、根本の理論として、かくの如き評價標準を採用して可なるやが、一の疑問であらねばならぬ、かれの資本は資本主義經濟の場合の資本とは意味を異にして居る、かれの資本はかれの勞作に對する補助的生產手段である、かれは出來る丈け少くこれを使用するを欲する、資本主義經濟に於てはこれが最も有利なるべき用途を考へ、この用途に向つて、出來る丈け、即ち事情の容るす範圍內に於て、出來る丈け多く投下するを欲する、勞作經濟に於ては出來る丈け充分に自家勞力を使用するが主眼である、その效果を助くるが爲めの資本である、生產の割合には資本の分量は僅少でなければならぬ、一定の程度以上にその分量の進むが如きは、極めて危險である、而して已むを得ずこれを使用する場合には、多少利率が高くとも、これが借用を辭すべきでないとも考ふることが出來る、(借用資本を用ふるの利害は別問題である、)自己所有の資本は他に利殖の途が縱ひこれあるとしても、これをその經營の手段として投下する場合に、別に利廻り計算をなす必要があるまいとも思はるゝ、所詮は生產費といふが勞作經營に成立し得ないとすれば、利息評價の問題も消滅するが當然であつて、かの生產費調査に利息を見積るのは、亦た資本主義經濟化せしめて、試むるが爲めであること、小作料などに於けると同一揆であらねばならぬ。

# 第十一章　純生産又は純收得

純生産の意義は生産費を論ずる場合に既に説明し去られたものと見て不都合がなからう、生産の結果は粗生産となる、粗生産は生産に生産費を加へたるものに均しい、即ち生産費を控除せざる前の生産である。

抑も生産費の評價は純生産を算出するが爲めに行ふものである、その生産費が營利經營と勞作經營とによつて、評價すべき要素に相違あること、前章述ぶる所の如しであれば、營利經營に於ける純生産の價額と勞作經營に於ける純收得の價額との間、同一の粗生産の價額を以てして、尙ほ大なる相違がなくてはならぬ、現に營利經營に於ける純生産は利潤を構成する所の一分子である、その農場の純生産の總量が即ち利潤となるのであつて、利潤の分數が純生産であらねばならぬ、言を換えて云へば、利潤を各生産に配當すれば、各純生産に均しき價額を得るのである。

勞作經營に於ける生産費は自家勞力の貨幣價値を含まざるものである、隨つて生産費は營利經營に比すれば、同樣の生産手段を以てしては、遙かに少く、隨つて又た純收得は遙かにこれより多からざるを得ない、純收得は其實利潤の構成分子でなく、自家勞力の齎らし致す所の成果となすべきものである、故に營利經營に純生産の語が用ひらるゝならば、勞作經營には純收得と名づけて然るべきであらう。

純生産も純收得も生産毎に相當の相違あることは、各種の生産を採用する所の農業に於て、當然然らざるを得ざるものである、純生産の場合に於ては、その分量が資本に配當して、期待額よりも少かるべき豫定であらば、營利經營者はその種の生産をば放棄するを原則とすべく、純收得の場合に於ては、自家勞力の使用に不相當にこれが少き見込であつたならば、勞作經營者は同樣、これが採用をなさないのであらう、而かも凡ての生産に向つて同樣の純生産また純收得あることは、豫期せられざる所であるに相違ない、各生産を適當に組み合するの必要あることは、各種の事情に鑑みて當然であること農業組織の章に於て述べたる通りである。

併しこの場合に於て、我々はこの純生産又た純收得の評價を適當に各生産に配當することの困難なるを諒としなければならぬ、一經營内に同時に數多の生産が行はれ居るとする、この場合に各生産に對し割り當つべき勞力の分量を正確に評定することは、一見容易の事の如くにして、その實は左樣でない、相次ぐ所の作物に對しては、前作に行へる耕鋤の效果が幾何後作に及ぶかは多くの場合に於て正確

に計算することが出來ぬ、肥料の場合亦た同樣である、その他種々の事情により生産費の各生産に於ける正確なる數字を得ることが出來ず、隨つて純生産又た純收得の評價は多少の不正確を免れぬ、これ純生産比較の際に留意しなければならぬ所である。

純生産又は純收得の比較が縱ひ相當に出來たとしても、これによつて直にそれ等の中比較的に優良なるものゝみを選みて、採用すべしとの結論に達することは出來ぬ、獨りその比較が前述の如く、頗る不正確なるの故に然るのみでなく、勞力分配の關係もあり、地力維持の關係もあり、資本數量の關係もあり、危險緩和の關係もあり、その他、各生産の組合せは農業經濟學組織の編に於て、相當に面倒なる問題となり居るのである。

營利經營と勞作經營との間、各生産の採用、これが組み合せに關し、理論上、根柢に於て相互の間性質の差はあるが、而かもその間、技術的原則に於て酷似の點がないでもない、かれに於ては問題が最大の利潤であり、これにありては最大の純收得を目的とする、而かも勞力に就きて、かれに於ても作男又た奉公人といふ年傭の勞働者が通常備へられて居る、この種の勞力と自家勞力との間、少からざる相似の點がある。

蓋し年傭勞力は生産費の一要目である、自家勞力は收入の源である、かく根本に相違あるに拘はらず、これが利用上の原則には各相均しき點がある、自家勞力は年間の使用日數が多からざれば、經營家の純收得がそれ丈け少きを免れぬ、年傭勞力は出來る丈け多く使用することによつて、それ丈け一日の勞價を少くすることが出來る、年傭の一日當りの賃銀は年給料を勞働日數によつて除することによつて評價し得るからである。

されば勞作經營に於ても、營利經營に於ても、均しく年間の勞力を出來る丈け平均に分配して、仕事に繁閑の差なきやうに計畫を立てねばならぬ、後者に於ては又た臨時傭を得ることの困難も、往々にしてある故、前者に於て賃傭勞力を用ふるを忌むと同樣に、仕事の一時的に集積することを喜ばないのである、かくて仕事が繁にして勞力の一時に集積するを喜ばざると同時に、そが閑にして勞力が多く徒爾に附せらるゝを忌むが故に、農業は一般に勞力の分配の平均的なるを以て、これが組織上の要義となすのである。

年間勞力の分配を宜くせんとするには、純生産又た純收得が凡ての生産に同樣

にあらざる以上、その中成果の最も多額なるものを選擇するが最も然るべきことは、別に叙々を要せざる所である、而かも各生産の行はるゝ期節、これに要する勞力の分配など種々の關係がかくの如き一義的敢行を容るさないのである、多くの場合に於て、純生産又た純收得の極めて少く、場合によりて、これが皆無であり、甚しきは一見得失相償はずと思はるゝものさへ、これを採用することがないでない。

殊にその生産が更に價格の貴き生産に再化せらるべき資料たる場合に於ては、主として閑時の勞力を利用するが爲めに、若くは第二次生産の副産物たる廉價の肥料を求むるが爲めに、或は第二次生産の爲めの廉價なる資料を得るが爲めに、第一次生産に得る所の極めて寡少なるを厭はない場合が多い、勿論この場合に於ては、勞力分配、地力維持、肥料の經濟、病害防除等を目的とする輪栽に對し、相當の關係を顧慮することが、就中大經濟に於て普通であることを見落してはならぬ。

第二次生産といへば、直に農産製造を意味すべく思ふのであらうが、而かも余はこれと同樣に、畜産の如きも、第二次生産と見做すべきものたるを信ずる、第一次生産が飼料作物である場合には、畜産が第二次生産であり、これが工藝作物である場合には、即ち農産製造が同樣、第二次生産である、此の如き觀察を以てすれば、畜産物に更に加工する場合には、即ち第三次生産となる譯である。

第二次乃至第三次生産の爲めを目的として行ふ所の資料生産より生ずる純生産又た純收得はその物それ自身の獨立的評價を以て、これが價値を決定すべきものではない、殊に小農經營の場合に於ては、閑時徒爲の勞力を利用するが爲めの生産作業に於ては、極めて些少の收得を以て滿足すべきであるとを忘れてはならぬ。

我々は農業組織の場合に回首して、主要作物と副次作物との區別を考へなければならぬ、これが說明はかの英國を本場とする四次輪栽式に例を採るが最も簡明たるを得る、蕪菁、大麥、誥草、小麥、この四者の中にて、大麥及び小麥は直に市場に賣り出すもので、即ち主要作物とせられ、蕪菁及び誥草は家畜の飼料に供せらるゝ所の副次的作物である、輪栽式の採用以前には休閑せられたる筈の位地に、この兩作を挿入せる譯であつて、輪栽式はこの兩作あつて始めて成立し、これを以て家畜を飼養し、その糞尿が厩肥の形に於て施用せらるゝことによつて、地力維持の效用あるものとなされて居る。

輪栽式に據らざる場合と雖ども、我國の小農の行ふ二毛作の場合に、稻の裏作たる麥類の如きは、主作物たる稻に對して、副作たるの位地を占むるもので、そが價値

少きといふ故を以て、漫にこれを排斥すべきでない、蔬菜園藝に於ては、夏作たる蔬菜類は就中主作であり、その前作たる麥類は副作であつて、夏作の幼時に於ける覆被作たるの效用もこれを認めねばならぬ、工藝作物に對する前作の麥類、亦た同樣である。

以上は純生產又た純收得の多少を比較し、漫に優秀なる生產のみを採用するを原則とせず、反て優劣相交え、適宜耕種組織を作り、畜產、副業兩組織も、便宜これを農業組織內に採用するに就きての大要の理論であつて、農業組織に對する大要の註釋であると見ることも出來やう。

この章を終るに當りて、小農經營の爲めに一言を加へて置かう、そは外でない、純生產の場合に於ては、特に年傭勞力を利用するが爲めの外、價値少き作物を採用することは、純收得の場合と同樣なる能はざるべき道理である、殊に集約なる生產は少くとも技術的の比較を以てすれば、小經營は大經營に遙かに優るべき可能性を有するものたること勿論でなければならぬ、閑時の勞力は小經營に於てはその價値づけらるゝことの極めて小なるを以て、甘んずるが常なるべきが故である。（拙著合關參照率）

# 第十二章　小農と簿記

簿記は經營者の指南車である、往々盲人の杖に喩へらるゝ、杖を持たぬ盲人は道を失ひ易い、簿記を具へざる經營主は間違なく經營の正道を踏むことが難い、これ私人經濟上より見たる簿記の效用である。

現代の簿記は單式複式の二種に分たれ、就中複式に至つては經營內採らるゝ所の事業每に、收支損益が一目瞭然仕譯せらるゝことゝなつて居り、經營に於ける資本の行動と金錢價値の增減が具體的數字を以て、詳かに且つ出來る丈け正確に分解し、綜合し、合理的に表出せらるゝ、これが簿記の役目である、或は分解し、或は綜合するに就きての基調は一に資本主義的營利經濟の原則にあるが故に、苟も資本主義的營利經濟の內容を具體的に詳悉せんとならば、一經營に於ける簿記の內容を研究するに如くはないと謂ふて不可ないであらう。

顧ふに簿記が大福帳、覺書、簡單なる帳面より、漸く發育して、現代的單複兩式の簿記に進んだのは、資本主義的營利經濟の進步と相伴ふたのであつて、これ經營上の必要に原づく所の型式である、利息、小作料、賃銀、利潤、これを審にするには、一に簿記

に由つてこれを具體化するに如くはない。

此の如く、簿記は營利經營に於ける貨幣價値の變動を詳悉するものである、而かも資本が物品化せるもの、或は物品が資本化せるもの、即ち物品の形にある所の資本は合理的評價の方法に依つて、始めてこれが貨幣價値を審にすることが出來る、而かもこの合理的評價なるものが、却て困難であつて、正確なる評價は殆んど不能に屬すといふも不可ない程である、この點よりして、簿記の正確さの疑問視さるゝことが有り勝ちである。

事業年度に於ける貨幣價値の變動は、日計簿によつて仕譯せられ、原簿に於て、口座毎に損益決算を見る、この決算の行程中に於て、各種物品の評價が必ず行はるゝ、評價未濟の品物が存するときは、損益の決算は不能に屬する、評價が既に行はれ、決算が終を告ぐる、而かも評價が誤つて高きに過ぐるが如きあらば、利潤がそれ丈け當然額より多きを示し、それが反て低きに過ぐるときは、それ丈け當然額より少きに失する、即ち簿記中の難關は實に評價の一點に存し、公表せられたる決算が往々信用に缺くるものあるは、一に評價が當を得たるかの疑に原づくのである。

此の如く、極めて困難なる所の評價、容易に正確を期し難い所の評價、これを必ず行ふて、簿記の決算を敢てするは、實に資本主義的營利經營の要求がこれをしかせざるを得ざらしむるからである。

農業に於ける簿記はこの點に於て殊に困難を感じなければならぬ、その事業年度の開始は評價すべき物品の最少なるの期日を選ぶことゝしあるも、尚ほそれが決して少からざるを常とする、又た農場所産が往々家庭用として供用せらるゝことが、稀有にあらざるが爲めに、こゝにも多少の評價の必要ある物品が發見せらるる、資本が生産化し、この生産化せる物品が更に生産手段として、二次的生産に供用せらるゝ、此の如き變化が生産行程中に往々行はれ、生産費調査の場合の如き、困難なる評價も避くることが出來ず、その記帳が必要とせらるゝに於て、簿記の上に幾多の困難が發見せらるゝ、將た生産行程の中途にある所の未成品たる立毛立木の類の如き、評價の上に幾多の困難が發見せらるゝ、將た複記式に依據して、各部の損益をそれ〴〵示さんと要するも有機的に組織せらるゝが常なる農業に於ては、その目的を充分に達することが不能である（拙著合關參照）。

これ等、その他幾多の難關に遭着するとき、農業簿記なるものが商業に於ける簿記と頗る相異なるを要すべく思はれ、所詮は簿記なるものも、商工業、就中商業の需

要の爲めに出來たるものかの如く、これに最も適合せるが、現代の簿記なるべく信ぜられないでない。

翻つて自作經營の場合を考ふるときは、簿記上更に一の大なる難關を加ふるを見るであらう、土地も家屋も、共に自個の所有に屬するが故に、一面には小作料又た土地資本の利子の評價が必要となり、土地、家屋そのものゝ貨幣價値の變動があり、爲めに經營費の割合に、大なる歩合を占め、往々にしてこれに倍蓰する所のこれ等不動産の評價が必要となり、而かもこれ等不動産には環境の關係より若くは直接これに加へられたる改良の結果に原づく所の貨幣價値の變動があり、爲めに評價上大なる困難が起るのみでなく、經營上に關係なき貨幣價値の變動が實現し、これ等資本の額が極めて大なる丈け、その關係が益々重大である、この面倒を避けんとならば、これが小作料を評價し、この評價額を以て地主としての經營主の所得となし、經營はこの土地、家屋を小作せるものとの假定によつて簿記的決算を行ふがよい、しかするも尙ほ決して正確を期する上に於て、容易なる評價をなすことの出來ないことは、前述の如しである。

小農の簿記に於けるや、全然これと價を異にする、若し小農がその經營に就きての簿記を作らんと欲せば、如何なる形式に依據すべきであらう、現代式の簿記は單記と複記とに論なく、資本主義營利經營に應用すべく作られ、又たその意味に於て發達したものたること前述の通りである、而して資本主義的營利經營に於ては經營と家事とは全然分畫せられて居るが、小農經營に於てはその間の分畫が截然たるを得ない、故に小農が特に經營の爲めに、簿記を設けんとするも、左支右吾、往々にして大なる難關に遭着するを免れないのである。

現代式簿記に於ては、最初に資本の貨幣價値、即ち經營を行ふべき生産手段が貨幣價額を以て記帳せられて居る、小農經營に於て同樣の型式を以て、簿記の開始をなすも、資本的經營ならざる小農に於は、果してその意味が徹底しないに相違なからう、生産手段として年度の始めに特に存置せらるゝものも、固よりないでもないが、この外家事用と經營用との區別なく孰れが孰れと區別せられざるも少くない、且つ小農の所謂もとでは勞力なるが故に、勞力の分量を揭ぐるが反て意義あるべく思はるゝ位なるも、簿記としてはそれに何等の意味の見出さるべきでなからう。

更に年度内に於て、收支を記帳し、年度末に於て仕譯決算をなすも、徒らに面倒極まつたる多くの評價をなさなければならず、收得の品物に就きても、自家消費の部

分と、商品化すべきものとを、區別して評價しなければならぬ、而かもかゝる面倒なる計算が果して何等の意義ある結果を齎らし來たるべき、所詮は年間に於ける價値附けられたる勞作の收得、その實多くはその評價價額を算出し得たるに止まるのである。

凡そ農業經營の各部分に於て得る所の收支の如き、農業の設計をなすに於て、往々想像するが如き、大なる參考の價値あるものでない、（拙著合關參照）況んや勞作經營たる小農に於てをやである、收支に於ける分解も、綜合も、これに於て、殆んど意義を見ないのである、殊に家事との間の截然たる區別を記帳になすことの出來ざる鷄式簿記に於てをやである。

是に於て余は全然異なりたる簿記を小農の爲めに提供せんと欲する、即ち在來の大福帳、金錢出納簿、覺書の類を便宜程善く整理し用ふることとこれである、而して主として簿記に記入し、年度末に於て差引計算して結果を徵すべきは金錢の出納である、金錢の殘高である、苟も金錢の殘高が相當にあつたならば、それがよい年柄で、勞作の目出度き結果と見るべきである、金錢以外、多少の財産を購ひ得たりとせば、その價額を現金の殘高に加算すべきことは勿論である。

余は小農經營者が現代式簿記に則とり、面倒なる各種の評價を敢てして、收支計算をなし、すべてを貨幣價値換算し、その收得を以て、都會に於ける相似たる階級と比較し、相互間の優劣を評定せんとの試の、或は甚だ不良なる結果を招くの虞あるを思はねばならぬ、例へば貨幣價値換算せられたる收得を、勞作日數を以て除して一日の勞働價値を算出するの法の如き、余が曾て提案したる所なれども、それが果して何等の結果を來たすべきか、正確に於て頗る疑はるゝ所の收得の評價價値が何を指示するであらう、この結果を以て都市住民の收入の凡てが金錢の形を以てし、その一家の生活が一にこの金錢の消費である所の所謂金錢經濟なるものと、農業家の生活が主として自然經濟に原づき、その收入中には適々山野河海に於て得たる所、その他簿記に掲ぐるの價値なしと思はれ、而かもその實相當の意義を生活上に有すべき收得、これ等は往々簿記の紙上に現はれ來たらざることも、亦た考慮の中に入れなければならぬ。

經驗家は往々簿記の收支に於て、損失を認め、而かも農家がよく生活し、場合によつては金錢の殘高さへも、發見せらるゝの事實を指摘する、これその決算の基礎が資本主義營利經營に置かるゝと、茲に收入の中に多くの記入漏あるに歸しなけれ

ばならぬであらう、小農經營者は自己經營の性質をよく會得しなければならぬ、金錢經濟に衣食する所の都市住民、その職業と並に環境とが比較にならざる程に心身に不利なる都市民、これと收入の上より徒らに優劣を比較するが如きはその當を得たることでは斷じてない。

小農の簿記は家庭と經營と截然區別するの必要がなく、金錢出納簿を具ゆると同時に、現物帳、各種覺帳、財產帳、勞働帳があつたならば、それにて滿足すべきで、就中勞働日數の記載は如何にして期節的に多くの剩餘を見る所の自家勞力を遺憾なく利用することが出來るかの問題の解決に資すべきものである、されば年內に於ける勞働日數と、勞働時間との大要を書き留め、以て翌年の事業計畫の參考に資せんことは極めて望ましき所となすべきである。

# 第十三章　農場

## 第一節　農場の意義

農場は圃地と農舍とより成る所の、農業の經營場である、狹い意義に於ては農舍を中心とする建設物一團の組織を意味し、圃地を除外さることもあるが、その實經營單位を意味するものとなすべきである。

特に經營場の爲めに、この用語が起つたのは、家事經濟と相對するの必要に原づくもので、農家の經濟の分化を意味するのである、この意義より推せば、農場なるものは資本主義經濟の產物であるといふことが出來る、我國にては由來農場なる名稱がなかつた、その實農場なるものがなかつたのである、今日と雖ども尙ほ然りであるから、その名稱もなかつたのは當然である、歐洲にては古くより規模廣大なる經營があつて、資本主義經濟の成立以前に於て、既に住宅と農舍とが區別せられて居つた、經營の經濟が全然分化し居らざる以前に、相當に建物には分化の實現して居つたと見えて、農場なる名稱は相當に古くより用ひられたやうであるが、今日の意義に於ける農場とは頗る內容の區別があつたものと見なければならぬ、わが國

の農家では既にいへる如く、農舍と住宅との區別が明晰を缺いて居り、農場として農舍を中心とする一組織が分化し居らず、分化し居るのは獨り圃地のみであつて、農場なるものは經濟單位としても成立し居ないのである。

## 第二節　農場の類別

農業を區別するに、農場制農業及び村落制農業の名を以てする、この區別は頗る徹底を缺くものと云はねばならぬ、農場制の農業は必ずしも村落制をなさないでなく、村落制も或は農場制たることを得ないにも限らぬからである、農場制農業と相對するには、當然非農場制農業を以てすべきである、疎居制と密居制、これは住居の意味を以てするもので、農場の區別には相應はしくない、村落制は亦た居宅の意味に出づるもので、適當の用語とはいへぬ、集在農舍と散在農舍と相對せしめば、農場の類別としては始めて妥當なるべく思はるゝ。

成團農場と散地農場との區別は農場組織の內容を示すに於て、頗る要を得たるものとなすことが出來やう、成團農場は土地と農舍とが一團をなし區地が散在することなきを意味する、普國政府が耕地整理に於て、理想として產出せんと試みたのは、實にこの種の農場であつたのである、營利經營なる大經營には、主として勞力經濟の上からこれが最も喜ばるゝものである、而かも個人主義的閉塞經濟には最も相應はしき型式である。

散地農場は農場に屬する圃地が分割されて、かの地この地に散在し居るもので、その分散の程度は勿論同樣でないが、而かも土地が集合せる一團となりて、その內に農舍を含むのとは全然相同からぬ、即ち大農經營には土地の散在が甚しければ甚しき程、不利は益々甚しきを免れぬ。

全然非難せられざる程に集團の地面をなして、理想的なる形狀をなしたる成團農場は容易に見出されず、成團と散地との間、截然區別すべからざる程度のものも多く、彼より此と、次第に階段附けらるるのである、而して成團農場に於ける農舍の位地が圃地の一端にあり、數個の農舍が群集して、群集農舍團を成形することの、理論上全然あり得べからざることにもあらざるべきが、實際に於ては、成團農場はその農舍の位地を中央近くに置かんことを欲する丈け、一地方に於ける成團農場の農舍は勢、散在するを免れないのである、而して經營者の住宅は農舍の附近にあるを原則とするが故に、この場合に於ては疎居制の村落が形造らるゝのである、但一

農場の住民は多く群集して居住を占め居るを常とするのである。

數個大農場の農舍が散在し、その所屬地亦た散在し居るもあるべきが故に、散地農場が農場制農業たることも、決して稀有ではなく、耕地整理が行はれざりし時代に於ては、寧ろそれが普通であつたし、又た今日も地方によりて然りであるとなすことも出來やう、而して多數經營の農舍が集團をなし居る場合には、勢、その附屬地は散在するを免れないのである、而して前同樣住宅は農舍附近に存在するが常であるゆゑ、住宅本位の見地を以てすれば、則ち村落制密居が成立するのである。

小農經營に於ては、前述の如く、住宅と農舍とは全然分離し居らざるを原則とする、而してその經營が成團型になり居るは稀であり、又たそれが原則として不可なりとせられて居る、而かもその住宅並に農舍が散在し、同時に區地も亦た散在し居るのもあるが、また村落型に密集し居るも多く、而してこの場合には區地は必ず散在し居らざるを得ない。

## 第三節　小農經營に於ける密居、疎居の得失

この問題を研究するには、觀察の立脚點が多方面にあらねばならぬ、而して今われは主として經濟方面より見たる、この問題の一端に局限し、共同經營並に農村の章下に、更にこれが大體觀に及んで見やうと思ふ。

小農經營に於ける密居、疎居の得失を研究するには、內外兩方面より細かに觀察するの必要がある、內といふは經營內に屬する管理上の關係であり、外といふは經營が外部に對するの關係である。

內部に於て最も注意を要するのは、先づ以て勞力利用上の問題であらねばならぬ、密居制に於ては既に云へる如く、農舍兼住宅が群集し居るに對して、區地がかの地この地に散在し居るのである、隨つて起る所の第一の問題は勞力利用上の不利益であらねばならぬ、農舍より圃地に往復するに當りて、距離の近きもあるべきも、遠き區地にありては、里餘にも及ぶこと、我國に於て往々見る所の如しであつて、往復に於ける時間の徒費量は頗る多からざるを得ない、獨りそが農舍との間の距離斗りでない、區地と區地との間の距離をも等閑視することが出來ぬ、この時間の徒費は勢、その不利を經營上に及ぼさねばならぬ、これ多くの例證を擧ぐる必要もない所である。

區地の散在はまた、その區地の形狀なり、面積なりに影響を及ぼし、稍もすれば區

地の面積が狹小に過ぎ、爲めに畦畔の耕地の面積を徒費すること、我國の水田に多く見る所の如しである、區地の形狀亦た不整なり易いことも、全く無視してはならぬ。

主要なる不利の點は右の如しであるが、一方區地が散在すれば、各區地の土質が種々相異なり、之れが爲めに同一品質の生産を多量に産出するに不便はあるが、反つて種々の作物の種類並に品種を栽培することが出來、一般普通の收得少き作物の外、特種の收得多き作物を栽培するの望もあり易い、且つ豐凶の機會が多少分たれ、圃地一切に凶歉の患に遭ふが如きの虞が少い、此の如きは決して經營上の利益でないとは云はれぬ。

この種の利益は必ずあるものとは云はれぬ、これは寧ろ副次的の利益とも、場合によつては、認むべきものであらう、密居制の利益は寧ろ外部に對するの關係に重きを措くべきである、外部の關係には種々雜多の種類がある、市場との關係、他の職業者との關係、學校との關係、政治機關との關係、共同作業及び施設上の關係、社交上の關係等に總括することが出來やう。

市場との關係には、市場を廣き意味に於てする、販賣、購買の機關は公共機關なり、私機關なり、又た仲間商人なり、凡てをその關係に置いて考ふれば、一村の住民が農舍と共に彼地此地に、居住を星散的狀態に置くときは、賣買上如何に不便なるべきかは、深く探究するまでもなき所であらう。

これを推し廣めて大工、左官の如き、別けて醫師、獸醫の如き、時々交渉を要し、時にそが火急を要する場合の如きを考へねばならぬ、幸にして農村の住民は一般に健康であり、急病を發するが如きことは稀であらうが、而かも固より絶無を保すべきでなく、時々往診を必要とするが如きの場合、比較的少數の住民が、廣く散在し居るが如きあらば、醫者の如き、人口の割合にその數を要することが多く、その收入も割合に少く、隨つて良醫の在住を望むことが出來ず、凡ての點に於て醫師との關係は頗る不便なるを免れざるべきである、産婆などは今現に多く農村に存在せざるやうであるが、縱ひこれが存在を見ることゝするも、出産は時間を選ばざるものである、遠距離に在る産婆では、間に合はざる場合が多いとしなければならぬ。

學校との關係は兒童の通學を主とし考ふるも、散在的居住が多くの住民に如何に不便を感ぜしむべきであらう、余は今日の如く、學級數の過多なる大規模の學校を良とするではない、學校は寧ろ學級數の少きを以て、教育上最も然るべきものと

するのである、而かも通學上の不便の爲めに、一村内に多數の學校、而かも學童數の餘りに少き學校(米國など一校五六人よりないもの絶無でない)を存置するの頗る不經濟たるを想はねばならぬ。

政治機關といへば、町村役場、警察機關などを意味するもので、疎居制の農村に於ては、就中警察官が適當にその職務を執行するに如何に不便を感ずべきかを思はねばならぬ、傳染病、火災などに關する施設上如何にそれが不便を感ずべきかを想ふべきである、但傳染病の傳播なり、殊に火災の延燒の如きは、家屋、住民共に星散し居れば、その恐が甚だ少きことは勿論なれども、それが絶無でない以上その場合に處することの困難は云ふ迄もない所である。

共同作業に就きては、産業組合などの組合の如き、農會の如き、教育會、母の會、處女會、青年會の如き、凡ての協會の組織と、これが行動の上に於て、如何に不便であるべきぞである、講演會、講習會、などを開催する場合、聽衆の來會に如何に不便を感ずべきぞである、その根本に遡つて考ふれば、疎居の住民は交通頗る稀疎なるべきこと勿論であるゆゑ、共同心の發揚が妨げられ、反て自我利己の精神が强く涵養せられ易い、隨つてこれ等共同の作業は起り難いのである、その他、各種文明的施設の採用に如何に不便であるかは、試みに都市と比較しなば疑ふ餘地がなからう。

社交上の關係が如何に面白からざるべきか、これは深く究むるまでもなく、住民多く孤立的に寂しき生活を營み、經濟上にも、それが絶大の影響を及ぼすの虞あるものと見なければならぬ、反面には社會上今日迄各地方に見るが如き、無用の消費は爲めに多く減殺するの望あるべきも、交通の稀疎は知識の進歩を妨げ、慾望の增進を抑え、これが經濟上に及ぼす所の關係も、決して鮮少なりとなすべきでなからう。

# 第十四章　自作小農と小作小農

自作小農に就きて、彼のアーサー、ヤングの歐洲大陸に於ける紀行が如何なることを敎へたか、既に他の章に於てその一端を語つた、小作小農に關する觀察も、歐洲大陸に於けるもの、必ずしもこれと格段の相違があり、悉く悲觀的材料を與ふるには限らない、その生活の狀態が相當なるを得るもの、彼の國に於て決して稀有の例となすべきでない、勿論これは往々註釋せらるゝ如く、數萬の資本を投じて經營する所の自作大農、又た小作大農との比較に於てゞなく、それと地位相似たる階級と對照して然るのである。

われ〳〵は此の如き比較をなす場合に於て、自己の收得は悉くこれを生活に消費し去る所の一般勞働者階級と生活的消費は幾分劣るとも、自己の經營に賴つて獨立的生活をなし、且つ多少の蓄を子孫に遺すの望ある小農階級とを(都會生活と農村生活との比較は姑く除外して)單に收入若くは支出のみの量的比較をなすべきにあらざることをも、考慮の內に置かねばならぬのであらうと思ふ。

わが國の自作小農はこれを歐洲大陸に於てアーサー、ヤングが觀察せる所と、優劣如何、余は必しも悉く遜色ありとは信じない、而かも自作農が倒れて小作農の位地に移るもの少からざるを思へば、これに關する悲觀材料の決して少からざるを認めない譯には行かぬ。

これに反して、小作小農の生活に關しては、多くの悲觀材料が往々に概括的に提供せらるゝ、これには往々確證を缺くのみでなく、その實反て地方によりては小作小農の收入が中地主のそれにさへ優るもの多きの徵證が絕無でなく、小作の階級より自作の階級に移るものさへ、決して稀有の事例ではないやうである。

此の如き問題はこゝに今討究するの機會でなく、實はこれが一般的結論に到着するには、これに關する材料が餘りに貧弱であるのである、故に余は眼を轉じて、小作小農の農村社會に於ける位地とこれと地主との關係に就きて、小農的研究の立場より、鳥瞰的觀察を試みんと欲するのである。

小作農の由來に就きて、これが歷史的觀察をなすことは、一種の趣味を以て迎えらるゝのである、而かも大抵これが當初地主に對する主從の關係に居りたることは、そが先天的であり、後天的であるを問はず、大抵皆然りであつたことが疑はれないのである、或は小作を以て子作となし、親作に對するの稱であつたとするも、決し

て漫然たる想像でなからうと思はるゝ、將た水呑なる稱は小作の別名であり、又た貧乏百姓の異名であつたといふことを考ふれば、その農村に於ける位地も略々察知せられないでない。

多くの觀察は自作農の經濟的立場の面白からざるを以て、そが農村に於ける階級的位地が小作農の上に居り、社交上費用爲めに多きを要するのみでなく、またその自尊心がその勞力を卑事に用ふるを敢てせざるに歸して居る。

この反面的觀察によつても、小作農が農村に於て、その位地の最下層に居るものなるを推證すべきであらう。

所詮は小作農が農村社會に於て、從來最下層に置かれたるは、一般的に肯定することが出來るであらうと思ふ、余が今日迄見聞せる所、一としてその然るを證せざるはないのであつて、この觀察を誤なきものとするに於て、多くの誤謬に陷ゐることなきを疑はない、由來資產の多少が社交上の位地の高下を定むるに、大なる關係ありたることも、その原因の一に數へねばならぬ。

明治維新によりて四民平等が法制上に認められ、小作が地主に對する從屬的位地は名實共に、全然消失した、名實共にと殊更にいふのは、多くの場合に於て、德川幕府時代に於ても、名の示す如く實も亦た從屬的であつたではないのである、全然從屬的關係に居る所の小作の種類が、今尙ほ此處彼處に存在して居ないではない、而かも一般から云へば、貸借關係は事實に於て遠き以前より存して居つたと信じて然るべく思はるゝ。

然るを今日尙ほ地主と小作との關係が、依然從屬的であると考へ、地主の壓迫、橫暴などを呼ぶものあるは、社交的形式と、小作條件とが、都會に於て今日多く見ることの出來ない、一種從屬的色彩を帶び居るからであらう。

社交的形式は彼の旦那樣と者供の狀態を生ずるが常である、殊に大地主に至つては嚴然たる昔時の殿樣に類して居るも少からぬ、慶弔の事あれば、小作は多く來集して、地主の使役に服する、此の如きを以て所謂橫暴にして、君主然たるの徵であるとなすであらう、而かも都會に於ても、殊に富豪の出入商に於けるは、今尙ほこれと相均しき形式を社交上に見るではなからうか、都會民人の間にさへ、尙ほ然りとすれば、況して親族的社交が行はれ、舊慣が多く重んぜられ、事大的思想の容易に消え去らざる農村に於てをやである、小作が地主の家事に周旋するとしても、決して偏務的とは見ることが出來ぬ、小作側に於ける慶弔の場合に於ては地主亦たその

使用人を派して、その事を助くるが常であり、又た相當の返禮は地主側より手傳に來たれる人々に與へらるゝのである、慶弔の場合に於ける饗膳丈けにても、既に返禮の意が寄せらるゝものと見るべきである。

大地主にあらざる地主に至つては小作に對して全然友人的交際に出づるものであると見るべく、固より主從の關係が徵せらるゝのでない、資產を以てしても、生活狀態を以てしても、主從的形式を兩者の社交上に用ふるは、其間が餘りに近接して居り、その間隔が餘りに小である。

小作の約定が形式に於て、全然對等的でなく、契約の形式を備へざるが常なることは、著しき事實である、小作の約定が現代式でなく、現に通俗小作證文を納るゝといふ、一種の小作願書と稱しても不可ないのが常である、その內容を見るも、多く小作側に於て嚴守すべき條項を列ね、地主側には何等の責務を揭げて居ない、恰もこれ偏務的從屬の地位に小作は置かれたるかの如き感がある、論者は此の如き形式を非難するであらうが、而かもこれ一遍形式に出でたる覺書であり、舊慣を墨守せる社交的立場に出でたるものとなして不可ないであらう、例へば倫敦市長が英王即位の式に際する儀禮として、市門鑰を英皇に恭呈することありとするも、誰れか獨立市が皇帝に降參の意を表すること、昔時の歷史に見たる所と、今尙ほ同一であると見るべきであらう、都會に於ての土地貸借の契約書が、明治の中葉あたりまで、殆んどこれと相似たるものなりしと、吾人の記憶に尙ほ新たなるではあるまいか、況んや一遍形式の外、何等の意味をなすことなき、小作證文に於てをやである。

小作關係は小農の場合に於ては、慣例を重んじ、相互溫情の支配下に立ち居るが、固より當然であらねばならぬ、由來兩者の間は、恰も金錢貸借上に於けるが如く、債權債務の經濟的關係に居るものと見ることは出來ない、土地は今日の經濟學的概念に於ては資本である、貨幣價値ある經濟財である、而かも小作の關係に於ては去る概念は多く見ることが出來ない、恰もこれ一種自然財であつて、その使用料を小作者は支拂ふものと見ることが出來る、曾て東京市の電車賃に關して起れる訴訟の判決によれば、電車は市の公有物であつて、乘客はこれが使用料を支拂ふもので、市は營業的關係に居るものでないとせられた、地主と小作との關係は殆んどこれと相類するものとなすことが出來ないでもなからう。

若し土地が一の資本であり、小作がこれを借用するものとしなば、兩者の關係は純然たる賃借的であり、賃與せる所の地主は年々相當の小作料を收め、期限が過ぎ

れば貸與時に於てと同樣の價値狀態を以て返却を受くれば、それにて事は足りるのである、土地は純然たる物權と見て差支へあるべきでない、貸借關係は純然たる經濟的たること、一般大經營の小作に於けると同樣、現代式ならざるべからずと思ふべきである。

小農の場合の小作條件は全然これと異なつて居る、小作料の決定は所謂習慣に依據するもので、計算上に明確なる基調がその數字の上に立てられて居ない、いはば大體上の見當であつて、歷史的由來を有つて居るかの如く思はるゝ、而して地方的に相場があり、わが國の稻作地方の如き耕作が單純である場合には、大率ね收穫高の步合がその標準とせられて居る、その增減は、小作者數對小作地面積の割合の增減即ち所謂供給需要の釣合に支配せらるゝが、一般の方則となつて居る、而かもこゝに見逃すべからざることは、不作時減免の習慣である、隨つて小作料の一般に後拂であることである、金貸業者が借金者の事業の損失に對して、多少の危險を分擔するが如き習慣は、現時の經濟組織に於て、容易に原則としてあるべからざる所である、將た土地貸借に於て、保證金又た敷金を徵せずして、後拂を約するが如き、亦た原則として見るべからざるものとなしてよからう、この兩樣の習慣は小作小農の小作條件が所謂營業的契約にあらざるを徵するに足るものであらねばならぬ。

就中稻作地に於て小作料が現物納であることは、又た注目の値がなければならぬ、現物納の小作を金納に改めんとの議もあるが、これは小作の側に於て餘りに經濟上危險の負擔が重過ぎるの憂がある、獨り米穀の價の騰落が時に甚しきことあるのみでなく、納期が一般に秋收の時期に於てせられ、爲めに多額の米が同時に賣出され、市場に米穀堆積し、いとゞさへ米價下落の傾向ある出來秋に於て、更にその傾向が增大するの虞がある、此の如き事情の下に金納は小農の場合に於ては、好適にあらずとしなければならぬ、農業倉庫によつて、この不利を緩和せんと擬するものなきにあらざれども、この考案が必しも適當にあらざることは、既述せる所によつて明瞭である、殊に況んやこの考案が採用せらるゝとするも、尙ほ小作料の大部分は短かき期間に市場に出て來つて、米價の大下落は到底免るゝことが出來ざるものとするが、蓋し間違なき觀察であるとなさねばならぬ。

現物納に原づきて、地主は多少の危險を負擔する、この現物を市場にて販賣する、又た往々土地の改良修繕などの爲めに資本を投下する、產業組合などの爲めに周旋することも、決して稀有の例でない、かゝる地主は農業を小作者と共同經營する

ものとなすことが出來ないでなからう、此の如きを以てしても、地主と小作とが一種友情的立場に居るものであつて、主從的關係に居るものにあらざるを知るに足るではなからうか。

頃者小作調査會が得たる所の小作立法の要綱の如き、現に以上の一種友情的習慣を認め、これを法律化せんと試むるものであるとなして不可なからう、縱ひ法律化の目的が達せらるゝとするも、爲めにこの習慣が改められて、經濟的營業的關係が現出せらるべきでない、但溫情が爲めに減却して、習慣が法律的交渉化するの虞あるのみに過ぎないに相違ない。

所詮は小作關係も、他の農村生活の關係同樣、貨幣の仲介によりて、地主との間の交渉が交易化すべからざること、これが小農の性質の然らしむる所である、縱ひ若干の程度まで、交易化が現代の影響の下に行はるゝに至るとしても、到底都市の社會に見る所と同一般にまで進むべきでない、金融業者と借金者との關係の如く、全然經濟的關係に立ちて、人間味の賞すべからざることゝなるが如きはあり得ない、小作大農と地主との關係の多く冷々淡々たるとは、同視し得べきでない、階級的睨合の狀態に於て、相互の溫情が消滅するが如きあらば、これ兩者の破滅ならざるを得ないのである。

勞働者と企業者との關係の如き兩者は社交の上に於て風馬牛の相及ばざるが如きものがある、而かも由來企業者は譬へば寄主の如しである、勞働者は寄生物の如しである、寄主が漸く衰ゆるときは寄生物も亦た勿論その弊を受けなければならぬ、但夫れこの寄主は相當に彈力性を有つて居る、寄生物の爲めにその內容を吸收せらるゝこと、若干程度迄增加するに至るも、尙ほその生榮を續くることの出來る場合が多いやうである、同盟罷工が往々にして成功し、企業者尙ほ爲めに衰弱を免るゝことを以ても、これを徵することが出來る。

地主を企業家に較ぶるに、同樣多少の彈力性を備へざるにあらざれども、この彈力性は原則として地主の收入の犧牲によつて生ずるに過ぎない、企業家がその計畫と努力とによつて收入の增加をなし得る所の積極的彈力とは同一視すべきでない、地主の彈力性は消極的に過ぎない、或は人口增加の爲めに食糧品の價格が漸騰し、地主が爲めに不勞所得の利を享くるを信ずるもの、今日尙ほ往々これを見る、此の如きは世界の交通が未だ甚だ開けざりし時代の舊事實をその思想の上に現代化し事實化せるに過ぎない、固より空想に外ならないのである。

されば地主と小作とが、睨合の姿にある間は、そのいづれかが土地に投資して、これが生産力の增加を圖るべくも想はれないが故に、これこの爭議は一定の收量に就きて、その割前の多少を論ずるものと見なければならぬ、縱ひ兩者のいづれかが爭議によつて、勝利を得たりとするも、甚しければその極いづれかゞ斃るゝに至るべきは必然でなければならぬ、寄主は無限に養分を寄生物に供給することの出來るものでない。

階級爭議を理想とするものは、地主なる特占階級を搾取家と見做し、小作の利益の爲めにこれを壓迫し去らんと欲するやうである、縱ひ土地の所有者が一私人たる地主にあらざる國家また社會であつたとしても、小作者から見れば何等そこに區別はない、小作が自作化するより以上に、爭鬪が不思議の魔術を以て耕作者の爲めに無限大の利益を作るべきでない。

此の如く睨合の對峙狀態に居るは、相方和親して、地力の增進を圖り、經濟の利益を進むるの計をなすにいづれぞやである、由來小農は個人主義閉塞經營を以て成立つべきでない、小作のみの團結によつて、その經營が利便の完きを得るものでない、全村住民の協働がより大切である、經濟上に於て既に然りである、況んや農村住民としての文化生活の向上に於てをやである、農村住民としては地主もなく、自作もなく、小作もない、農村の社會はその住民總體の犧牲社會であらねばならぬ、分業化し、分化し、複雜化し、幾多の交易社會、犧牲社會が出來て各種の社會の間が交易關係以外、多くの交渉なくして濟むのと同樣ではない、隣接の住人が變轉窮まり無く、いつ何時舊き住民が新しき住民に代はれるか、相互に全然知らざるが常であるといふが如き、都會の生活とは同一視することが出來ぬ、先祖代々幾十年幾百年かの間、續ける家々の人々の交渉である、社交は社交、經濟は經濟、と農村住民間の生活を分ち考ふるは、一個體の耳目鼻口を各孤立せる機關視すると同樣、その當を得たるの觀察たることが、勿論出來ないのである、この意味に於て、小作農に階級的思想を吹き込み、これを孤立の位地に措き、延いて農村の社會を分裂せしめ、不利益なる分化を農村に惹起せんとするは、固よりその當を得たるものでない、乃ちこれ小作農に對して所謂最眞の引き倒をなすものとなすべきである。

地主は企業者ではない、隨つて小作は勞働者ではあり得ない、若し地主が企業者たる場合ありとすれば、この場合の農業は小作と地主との共同經營と見做して可なるのである、大農の場合に於て、兩者の交渉の交易的であり、營業的であるに對し

て、小農の場合には必ずや友情的であり、親和的であらねばならぬ、小農の性質、固より然らざるを得ないのである。

## 第十四章　自作小農と小作小農

### 附　地主と農業經營

地主が果して農業家であるや否や、或はこれを然りとし、或はこれを然らずとする、而かもこれ場合によつて決定すべきの問題であらねばならぬ、朝鮮に廣く行はれ、歐米またその例に乏しからざる分益農には往々にして、地主と農業家との共同經營と見做して可なるものが發見せらるゝ、學者によりては分益農を以て共同經營の範疇内に入れて居るが、必ずしもこれを以て不當なりとなすべきでなからう、朝鮮に於ける東山農場の如きは共同經營の一例とすべく、これとやゝその趣を異にするも均しく共同經營とすべきものが、兒島灣の農場にも發見せらるゝ。

わが國の小作小農と地主との關係を精査するとき、その多くの場合に於て、亦た一種の共同經營と見て不可なしといふとも出來ないでない、この意味に於て地主は多く農業家と稱して不可なきが、わが國の實情であるとなすべきであるまいか。



翻つて考ふるとき、小農的勞作經營が共同して、資本主義的大經營を組織することの可能性が以上の場合に認めらるゝではあるまいか、資本家が小經營を集めて、一種の大經營を組織せるが、これ等の場合の農場と見ることが出來るからである、而かも朝鮮に於ける場合は廉價なる土地を購入し、そこに習慣として長く存する分益經營を利用して、一種の組織となせるもので、廉價なる土地といふことが、その成立の一要件であり、朝鮮特種の事情が又た他の要件である、兒島灣の場合に於ては干拓して得たる廉價の土地であり、又た今日尚ほ無稅のまゝに存して居る所の特種の事情ある土地に於て、地主の特種の考案に基ける所謂自營農場である。

各種の事情に基き、この種の經營は特種の場合に於て始めて成立すべく、地主に取りてはかゝる場合には、有利なることあるべきを疑はざれとも、而かも農業家に取り果してそれが有利であるかは、頗る疑はしからざるを得ない、これ余が共同經營の章に於て論する所を以て、その理由の梗概を知ることが出來やう。

わが國農業の前途に就きて、此の如き勞作經營と合せて、一大資本主義的經營を組織するの不可能にあらざるを想ふものあるに似たるも、朝鮮や兒島灣の如き特種の事情を有せざるわが國一般に通して、こがはその可能性に乏しきを信じて疑

はないのである。

また資本主義的勞作經營を以て目して不可ないでなからうかと思はるゝ一種の組織がある、手間子と稱する一種の經營がそれである、岩手地方に行はれて居る、これ一種の受負耕作を以て目すべきもので、地主が勞働者(農業家)にすべての資料を供給して耕作に從はしめ、その報酬として收穫の一定量を提供する、これが主なる特徴である、頗る分益經營に似て居るが、而かも收穫の歩合分けをなさざる所に、主たる相違點がある、近頃大阪地方に於て小作者を雇傭關係に置くの組織として、或は試みに採用せる組織は蓋しこの手間子經營若くはこれと相似たる經營法であらう。

此の如き組織は特種の場合に於て採用せられ、往々有利なることもあるべきである、而かも耕作者に於ては一定量の收入は收穫量の多少に拘はらず、いはゞ天引的にこれを確取することの出來るものゆゑ、地主の利益の如きは必ずしも問ふ所でなく、將た縱ひ收穫多きを致すも、自己の收入爲めに增加するの望あらざるが故に、その勤勉の刺戟が增收入より來たるの望がなく、大なる短所がかくて、この組織内に發見せらるゝのである、この短所を補ふ爲めに收量に對する累進的報酬を約し與ふることも一の對案なるを妨けざれども、而かも分益經營に對比して、果してこの組織が優れる點を有するか、乃至は尋常の小作經營と比較して、これに對する改善と見做すことが出來やうか、岩手地方に於てはこの種の經營法は小作人を得ることの難き場合、已むを得ざるに行ふ場合が常であるといふ、一種の變態的小作であり、原始的組織であると見做すことが出來ないでなからう、而してこの經營法の採用によつて爭議が根絶するの望ありとは、如何にしても考へられぬのである。

かくてわれ〳〵は小農經營の範疇内に種々の組織あるを發見するのである。